

を悔い、自ら責めて善に反る、伊尹、乃ち太甲を迎へて之に政を委す」とある。【八】委質 拜する時に膝を屈して身體を地に委するといふ説と、雉を贊として上るといふ説とあつて、後者の方が通用してゐる。【九】仲尼 家語に「孔子、衛より晉に入らむとして河に至り、趙簡子が寶犢鳴犢舞華を殺せしを聞き、乃ち河に臨んで嘆じて曰く、丘、これを聞く、胎を刳り、天を殺せば、麒麟、その郊に至らず、巢を覆し、卵を破れば、鳳皇、その邑に翔らず。何となれば、君子その類を傷ふを遠ればなり」と。遂に還つて敵に息ふ」とある。【一〇】龜山 樂府詩集に「琴操に曰く、龜山操は、孔子の作るところなり。季桓子、齊の女樂を受く、孔子諫めむと欲すれども得ず、退いて魯の龜山を望んで、此曲を作り、以て季氏が龜山の魯を蔽ふが若きを喩ふるなり」とあり、元和郡縣志に「龜山は兗州泗水縣の東北七十里に在り」と見ゆ。【一一】有斧 陸賈の新語に「斧あり柯なし、何を以て之を治めむ」とある。

【題義】一に南陵五松山感時贈別とある。五松山は、南陵に在つて、その詳は、前にも見えて居た。この詩は、南陵の事を記し、五松山に題して作つたのである。

【詩意】聖人の達徳あるものは、時に従つて、或は去り、或は就き、光を潜め、徳を匿し、一見すれば、愚なるが如き顔付をして居る。魚は、龍と同じ池に棲んで居るが、龍が一朝風雲を得て天に飛び上ることは、魚の測るところではなく、聖達の士の起つて大事業を爲すことは、衆愚の知り得ることではない。むかし、傳説は、多くの人夫ともに交つて、土牆の工事をやつて居たが、その人夫どもは、いかで、その眞情を知るべき。かくて、傳説は、殷の武丁に用ひられて、一朝、相位に上つて民人を和らげ、死後には、その靈魂が列星となり、光氣爛然として輝いて居る。伊尹は、空桑の中に生まれ、料理の技を以て湯を干したが、やがて、用ひられて相位に登り、區區の技を捐て、湯王を佐

けて、夏桀を亡した。それから、湯の崩後、太甲が不徳たるに因り、これを桐宮に放ち、その間親政を攝し、愧ち入る様な失策は決して爲さず、三年の後、太甲が、すっかり改心して、帝道が明かになつたから、これを迎へ、質を委して其臣となり、終生輔翼の方を盡した。至人の心は、曠濶無邊であつて、萬古に互つて法則とすることが出来る。しかし、いかに至人でも、運命の悪い時に廻り合せると仕方がないので、孔子の聖を以てするも、晉に行かむとして、河に臨んで嘆息し、鸞鳳は忽ち其の巢を覆し、麒麟は來り過ぎず、趙簡子が忠臣を殺したのを見ても、其類を傷まぬ譯には行かないといひ、又季氏の專權を見ては、龜山の魯を蔽ふが如くで、國中は暗くなつて、光明を認めない、斧の刃だけがあつても、柄が無ければ、役に立たず、おのが才能も、用ひられないから仕方がない。さらば、ここを立ち去つて、何處かへ往つて仕舞ふ外はないといひ、夜、河を渡つて、洪波を越え、やがて、放浪の旅に上られた。

【餘論】この詩は、感時贈別として見れば、略ぼ題に協つて居るが、南陵や五松山には全然關係がない。それから、傳説、伊尹の功業を敘し、一轉して、孔子の志を得ざりしことに及び、抑揚波瀾の妙はあるが、どうやら、結末が振はず、聊か尻切り蜻蛉の感があるので、或は未完の斷片であるかも知れない。

夜泊牛渚懷古

夜牛渚に泊して懷古す

牛渚西江夜。青天無片雲。

牛渚西江の夜、青天、片雲なし。

登舟望秋月。空憶謝將軍。

舟に登つて秋月を望み、空しく懷ふ謝將軍。

余亦能高詠。斯人不可聞。

余、亦た高詠を能くす、斯人聞くべからず。

明朝挂帆席。楓葉落紛紛。

明朝、帆席を挂くれば、楓葉落ちて紛紛。

【字解】 一、片雲 一片の雲。二、帆席 木華の海賦に維長綰挂帆席とあつて、李善の註に「劉熙の釋名に曰く 風に隨つて帆を張るを帆といふ、或は席を以て之を爲る、故に帆席といふなり」とある。

【題義】 原註に、此地即謝尚聞袁宏詠史處とある。太平寰宇記に「牛渚山は、太平州當塗縣の北三十五里に在り、江中に突出し、謂うて牛渚磯となす、古しへの津渡の處なり」といひ、輿地志に「牛渚山、むかし、人あり、潛行して云ふ、この處、洞庭に通じ、旁達底なし、金牛の狀異なるあるを見、乃ち驚き怪んで出づ。牛渚山北、これを采石といふ、按ずるに、今采石渡口に對し、上に謝將軍の祠あり」といひ、淮南記に「吳の初、周瑜を以て牛渚に屯し、晉の鎮西將軍謝尚も、亦た此城に鎮す。袁宏、時に運船を寄せて、牛渚に泊す。尚、月に乘じて江に泛び、運船中の諷詠を聞き、これを遣問すれば、即ち宏、その自作の詠史の詩を稱す、ここに於て、大に相嘆賞す」とあり、なほ其詳は、前の勞

勞亭の項に見えて居る。この詩は、夜、舟を牛渚に泊し、因つて、古しへを懷うて作つたのである。

【詩意】 大江の西岸なる牛渚の夜は晴れて、青天には一片の雲だにない。この時、予は舟に居て、秋月の玲瓏たるを望み、古しへの謝尚を思ひ出して、予も亦た生來高詠を能くするが、いくら謝尚に聞いて貰はうと思つても、今古時を異にして居るから、仕方がない。そこで、明朝、帆を掛けて、江を下れば、時しも秋の末、楓葉紛紛として、落つるばかり、矢張、謝尚の様な人に遇ふことは出来ないだらう。

【餘論】 起首に於ては、牛渚夜景の清絶を寫し、中間四句に於ては謝尚を逗出し、空憶といひ、斯人といひ、その思慕の切なるを見るべく、一結悽然。通首、一氣に下り、格調が頗る高い。この詩は、前に宿巫山下の項に於て一寸論じて置いた通り、五律の變體で、全篇對せぬものである。嚴滄浪は「律詩、首尾を徹して對せざるものあり、盛唐の諸公、この體あり。孟浩然の詩、

挂席東南望、青山水國遙、舳艫爭利涉、來往接風潮、問我今何適、天台訪石橋、坐看霞色晚、疑是赤城標。

又水國無邊際の篇、又李白牛渚西江夜の篇、皆文從ひ、字順、音韻鏗鏘、八句皆對偶なし」といひ、趙宦光は「律、對を取らず、李白牛渚西江夜云云、孟浩然挂席東南望云云の如き、二詩、一句の屬對なし、しかも、調は一字として律ならざるなし、故に調律は則ち律、屬對は律に非ざるなり。近こ

ろ、詩家あり、竊に古調を取つて近體を作り、自ら以て高しと爲すもの、終に是れ古詩、律に非ざるなり。中晩の律、毎に一貫して下るを取る、すでに自ら歎を失ふ、況んや、今日の古を以て律を作るをや。楊用修云ふ、五言律、八句對せず、太白・浩然、之あり、乃ち是れ、平仄穩貼せる古詩なりと。楊、謬つて對を以て律と爲す、亦た之を淺しとするか、律を觀る。古詩は格と意義とに在り、律詩は調と聲韻とに在り。もし必ず對を取らば、六朝全對の者、正に自ら多きなり、何ぞ即ち律詩と呼ばざるか。律詩の名は、唐に起る、律詩の法は、唐に嚴なり、未だ起らず、未だ嚴ならず、偶然對を作す、作者觀者、慎んで此を以て心を持する勿れ、方に能く一代作用の旨を得む」といひ、王阮亭は「この詩、色相ともに空し、政に羚羊角を掛け、迹の求むべき無きが如し、畫家の謂はゆる逸品とは是れなり」といひ、吳昌祺は「長侯は猶ほ對起あり、この篇は全く散、海鶴空を凌いで、必ずしも鸞鳳の苞彩ならざるが如し」といひ、田雯は「青蓮、近體を作る、古風を作るが如し、一氣呵成、對詩の跡なく、流行の樂あり、境地高絶」といひ、王翼雲は「前解は是れ牛渚懷古、後解は自ら袁宏に況し、正に懷古の情を寫す。この詩、古を以て律を行り、對偶に拘はらず、蓋し情詞に勝るもの」といひ、最後に乾隆御批には「白天才超邁、町畦を絶去す。その詩を論ずる、興寄を以て主となし、排偶聲調に屑屑たらず、その意合するに當りては、眞に能く筆墨の跡を化し盡し、迥に塵囂の外に出づ。司空圖云ふ、不著一字、盡得風流」と。嚴羽云ふ。鏡中の花、水中の月、羚羊角を掛け、迹の求むべきなし」と。

論者、この詩及び孟浩然望廬山の一篇を以て、之に當つ、蓋し以て其妙を窺ふあり。羽又云ふ、味酸醜の外に在り、と。此を過ぐれば、その名狀の善きを知らむ」とある。

姑熟十詠

姑熟溪

姑熟十詠

姑熟溪

愛此溪水閒。乘流興無極。
 漾楫怕鷗驚。垂竿待魚食。
 波翻曉霞影。岸疊春山色。
 何處浣紗人。紅顏未相識。

此の溪水の閒なるを愛し、流に乗じて興極まへりなし。
 楫を漾はして、鷗の驚くを恐れ、竿を垂れて、魚の食
 波は翻す曉霞の影、岸は疊む春山の色。 「ふを待つ。
 何の處か浣紗の人、紅顏、未だ相識らず。

【字解】「浣紗人」西施が其初、紗を浣つたといふことがあつて、前にも見えたが、ここでは暗に、之を用ひて、田舎の美少女に比擬したのである。

【題義】太平寰宇記に「姑熟溪は、太平州當塗縣の南二里に在り、姑熟は即ち古しへの縣名、この水、縣市中を經、故溪を過ぎ、即ち地に因つて、以て之に名づくるなり」といひ、江南通志に「姑熟溪は、

太平府當塗縣南二里に在り、一名姑浦、丹陽東南の餘水及び諸港を合して、來り會し、寶積山を過ぎ、大江に入る」とあり、周必大の泛舟遊山錄に「姑熟溪、水色紺碧、河流と相雜らず」とあり、陸放翁の入蜀記に「姑熟溪は、土人但だ之を姑溪といふ、水色正に綠にして、澄澈鏡の如し、鱗鱗往來、數ふべし、溪南皆漁家、景物幽奇」とある。この詩は姑熟十詠の第一首として、姑熟溪を詠じたのである。

【詩意】姑熟溪は物靜で、いかにも愛すべき處である。そこで、舟を浮べ、流に乗じて、逸興極まるところを知らず、楫を動かしては、鷗を驚かさむことを恐れ、竿を垂れては、魚の餌を食ふを待つて居る。波は曉霞の影を涵し、岸には春山の翠濃かなるが重なり合つて居る。その岸上に在つて、紗を洗つて居るのは、何處の人であるか、紅顏極めて美しいけれども、まだ面識もない。この女があればこそ、一幅溪山の畫圖中に、好個の點綴を爲し、愈よ風情を増すを覺ゆるのである。

丹陽湖

丹陽湖

湖與元氣連。風波浩難止。湖は元氣と連り、風波浩として止め難し。

天外賈客歸。雲間片帆起。天外、賈客歸り、雲間、片帆起る。

龜遊蓮葉上。鳥宿蘆花裏。

龜は遊ぶ蓮葉の上、鳥は宿す蘆花の裏。

少女棹輕舟。歌聲逐流水。

少女、輕舟に棹し、歌聲、流水を逐ふ。

【字解】 一 元氣 宇宙の精氣。 二 浩難止 勢強くして容易に止みさうもない。 三 賈客 行商をする人。

【題義】 元和郡縣志に「丹陽湖は、宣州當塗縣の東南七十九里に在り、周圍三百餘里、溧陽縣と湖を分つて界と爲す」とあり、六朝事跡に「丹陽湖、圖經に云ふ、溧水縣西八十里に在り、太平州當塗縣と分界す。唐の李白、かつて此湖に遊び、酷だ其景を愛し、乃ち帆を張り、酒を載せ、意を縱にし、往來して詩を作つて曰く、湖與元氣連、風波浩難止云云」とあり、太平府志に「丹陽湖は、府城の東南に在り、多福・黃池・積善・湖陽等の郷に跨り、徽池・寧國・廣德、諸州の水、これに滙し、江寧の高淳・溧水と皆湖心を以て界と爲す、東西七十五里、南北九十里、太平の巨浸なり」とある。この詩は、上の引抄中にも見えた如く、李白が舟を湖中に泛べ、その風景を留賞して作つたのである。

【詩意】 丹陽湖は、渺茫として、邊際なく、直に宇宙の精氣に連接するが如く、湖中には、風波しきりに起つて、その勢の凄じさ、なかなか止みさうな模様もない。ここは、樞要な處に當つて居るから、湖中には、舟船の來往繁く、賈客は天外より歸り來り、片帆は雲間に起つて勢よく飛んで行く。又湖汀一帶は、龜が蓮葉の上遊び、鳥が蘆花の中に宿し、なかなか趣がある。加ふるに、無心の少女

は、輕舟に棹し、歌を唱へつつ、流るる水のまにまに漂うて行く、その風情は、殊に人の心を傷ましめる。

謝公宅

謝公宅

青山日將暝。寂寞謝公宅。青山、日、將に暝せむとす、寂寞たり謝公の宅。

竹裏無人聲。池中虛月白。竹裏、人聲なく、池中、虚月白し。

荒庭衰草徧。廢井蒼苔積。荒庭、衰草徧ねく、廢井、蒼苔積む。

惟有清風閒。時時起泉石。惟だ清風の閒なるあり、時時泉石に起る。

【字解】 一 暝 夕暮になる。 二 衰草徧 徧は遍、あまねし、枯れた草が一ばいに生えて居る。 三 蒼苔積 青苔の厚くなりしむいふ。

【題義】 太平寰宇記に「青山は、太平州當塗縣の東三十五里に在り、齊の宣城太守謝朓、室及び池を山南に築き、その宅階址、尙ほ洛南の碑井二口を存す、天寶十二年、改めて謝公山と爲す」とあり、江南通志に「謝朓の宅は、太平府東南青山の椒に在り。南齊の謝朓、宣城に守たりしとき、別宅を此に建つ、今保和菴たり、路傍に井あり、謝公井と名づく」とあり、陸放翁の入蜀記に「青山の南、小市

に謝玄暉故宅の基あり、今湯氏の居るところたり。南、平野を望む極目、宅を環る、皆流泉奇石、青林文篠、眞に住處なり。宅後より山に登る。路極めて險巖、凡そ三四里許にして一菴に至る、菴前に小池あり、謝公池といふ、水味甘冷、盛夏と雖も竭きず」とある。この詩は、謝朓の別宅の跡を過ぎて作つたのである。

【詩意】 青山の夕日は、將に暮れむとし、謝朓の宅址は、極めて寂寞として居る。あたりには、竹が生ひ茂つて、人聲だになく、池中には、月影を白く浮べて居るばかり、荒れた庭には、枯れた草が一杯いであるし、壊れた井には、青い苔が厚く積んで居る。しかし、時たま、清風が靜に泉石の間より吹き起り、處から彷彿として、謝朓の高風をしのばしめる。

陵歎臺

陵歎臺

曠望登古臺。臺高極人目。曠望、古臺に登る、臺高くして人目を極む。

疊嶂列遠空。雜花間平陸。疊嶂、遠空に列し、雜花、平陸に間はる。

閒雲入窓牖。野翠生松竹。閒雲、窓牖に入り、野翠、松竹に生ず。

欲覽碑上文。苔侵豈堪讀。碑上の文を覽むと欲するも、苔侵して豈に讀むに堪へむや。

【字解】【一】疊嶂。重れ合った峰嶂。【二】雜花。色色の花。邱希範の陳伯之に與へたる書に「雜花樹に生じ、羣鶯亂れ飛ぶ」とある。【三】平陸。謝瞻の詩に夕陰暖平陸」とあり、爾雅に「大野を平といひ、高平なるを陸といふ」とある。

【題義】方輿勝覽に「陵歛臺は、太平州城北黃山の上に在り、宋の武帝南遊し、かつて、此臺に登り乃ち離宮を建つ」とあり、江南通志に「陵歛臺は、太平府當塗縣の黃山に在り、石あり、案の如し、高さ五尺ばかり、頂平かにして圓、宋の武帝、宮を建て、暑を避くる處」とあり、周必大の泛舟遊山錄に「北門を出づること五里餘、陵歛臺に登る、臺は黃山の上に在り、本と高からずして望甚だ遠し、西南は即ち青山、采石、天門及び溧陽和州の諸山を却顧するに皆目中に在り」と見ゆ。この詩は、陵歛臺の遺跡を弔つて作つたのである。

【詩意】曠望を試みむが爲に、陵歛臺に登ると、聞きしに違はず、臺は高くして、人目を極めるばかり、遙かなる方まで見える。重疊せる峰嶂は、遠空に列し、色色の花は、大野より高原に互り、處處に點綴して、目もあやなるばかり。閒雲は飛んで窓に入り、野色の翠なるは、松竹が叢茂して居るのである。傍に石碑があつて、何か書いてあるから、それを讀まうとしたが、苔の爲に掩はれて居て、讀めさうにもない。

桓公井

桓公井

桓公名已古。廢井曾未竭。

桓公、名、已に古く、廢井、曾て未だ竭きず。

石磴冷蒼苔。寒泉湛孤月。

石磴、蒼苔冷かに、寒泉、孤月を湛ふ。

秋來桐暫落。春至桃還發。

秋來つて、桐、暫く落ち、春至つて、桃、還た發す。

路遠人罕窺。誰能見清澈。

路遠くして、人窺ふこと罕なり、誰か能く清澈を見む。

【字解】【一】石磴。磴は敷瓦、今の煉瓦の如きもの。【二】桃還發。還は循環の義があつて、又ぞるといふこと。【三】清澈。井水の清きをいふ。

【題義】一統志に「桓公井は、太平府城の東五里、白紵山に在り、晉の桓溫の鑿つところ」とある。この詩は、桓溫の井を見て作つたのである。

【詩意】桓公といへる名も、すでに古く、井は壞れて仕舞つたが、水は決して竭きない。あたりを疊んだ石や敷瓦には、青苔が厚く鋪き、井中の寒泉は、孤月を浮べて居る。秋が來ると、桐の葉が、しばしの間落ちつづけ、春に成れば、桃の花が又ぞろ咲き出る。ここは、路も遠くて、邊鄙の處に在るから、人の窺ふこと稀に、誰も清澈の水色を見たことがない。

慈姥竹

慈姥竹

懷古 姑熟十詠桓公井 慈姥竹

野竹攢石生。含煙映江島。

野竹、石に攢まつて生じ、煙を含んで、江島に映ず。

翠色落波深。虛聲帶寒早。

翠色、波に落ちて深く、虛聲、寒を帯びて早し。

龍吟曾未聽。鳳曲吹應好。

龍吟、曾て未だ聽かず、鳳曲、吹いて應に好かるべし。

不學蒲柳凋。貞心常自保。

蒲柳の凋むを學ばず、貞心に自ら保つ。

【字解】【一】攢、あつまる。【二】虛聲、吹き渡る風の聲。【三】龍吟、馬融の笛賦の中なる語を用いたので、前に見ゆ。【四】鳳曲、蕭史の事を用いたので、亦前に見ゆ。【五】蒲柳、晉書に「願悅之曰く、蒲柳常質、秋を望んで先づ零つ」とある、蒲柳は今の水楊、即ち河柳で、その葉は落ち易い。

【題義】藝文類聚に丹陽記を引いて「江寧縣南四十里に慈母山あり、積石、江に臨み、簫管の竹を生ず、王褒の洞簫賦に稱するところは即ち此竹なり。その竹圓緻、衆處に異なり、俗呼んで鼓吹山と爲す」とあり、李善てより、その後、惟だ此幹珍とせられ、歷代常に樂府に給す。俗呼んで鼓吹山と爲す」とあり、太平府志も此等に據の文選註に引ける江圖に「慈母山、この山の竹、簫管を作る、妙聲あり」といひ、太平府志も此等に據つて「慈姥山は、當塗縣北四十里に在り、積石、江に俯し、巖壁峻絶、風濤洶湧、估舟かつて此に依つて以て避く。その山、竹を産す、圓體にして疏節、簫管と爲すに堪へたり、聲、音律に中る」とある。この詩は慈姥山の竹を詠じたのである。

【詩意】野竹は、積石の間に叢生し、煙を含んで江島に映じて居る。その翠色は、深く波心にうつり、さわさわと鳴り響く聲は、早くも、寒氣を帯びて居る。これで、笛を作ると、龍吟を爲すとのことであるが、未だ聞いたことがない、しかし、鳳凰の曲を吹いたならば、定めて、好みに違ひない。元來、竹は勁節を以て自ら矜つて居るもので、かの蒲柳の凋み易きを學ばず、一片の貞心を以て、常に自ら保つて居るものである。

望夫山

望夫山

颯望臨碧空。怨情感離別。

颯望、碧空に臨み、怨情、離別を感ず。

江草不知愁。巖花但爭發。

江草、愁を知らず、巖花、但だ争つて發す。

雲山萬重隔。音信千里絕。

雲山、萬重隔り、音信、千里絶ゆ。

春去秋復來。相思幾時歇。

春去り、秋復た來る、相思幾時か歇まむ。

【字解】【一】颯望、仰ぎ望む。【二】臨碧空、臨は高い處から下を見るので、ここでは一寸不向の様に思はれるが、極めて軽い意味に見たら善からう。

【題義】太平寰宇記に「望夫山は、太平州當塗縣北四十七里に在り。むかし、人あり、楚に往いて、

累歲還らず。その妻、この山に登つて夫を望み、乃ち化して、石となる。その山、江に臨み、周圍五

十里、高さ「百丈」とある。この詩は、望夫山を望んで作つたのである。

【詩意】晴れた碧天の上を仰ぎ望めば、そこに望夫山が聳えて居て、むかしの人が、別離の後、怨情に堪へず、化して石となつたといふ其話を思ひ出す。江草は愁を知らず、巖花は唯だ妍を争つて咲き亂れ、すべて草木は無情にして、少しも思ひやりが無い。夫の行衛はといへば、雲山萬重、遠く相隔離、音信千里、全く絶えはてて仕舞つた。そこで、春去り、秋來り、歲月頻りに移れども、相思の念は、何時やむとしもなく、はては、一塊の石に化して仕舞つたのである。

牛渚磯

牛渚磯

絶壁臨巨川。連峰勢相向。絶壁、巨川に臨み、連峰、勢、相向ふ。

亂石流湫間。廻波自成浪。亂石、流湫の間、廻波、自ら浪を成す。

但驚羣木秀。莫測精靈狀。但だ羣木の秀づるに驚く、精靈の状を測る莫し。

更聽猿夜啼。憂心醉江上。更に聽く、猿、夜、啼くを、憂心、江上に醉ふ。

【字解】【一】絶壁 磯は元と江邊の絶壁をいふのである。【二】流湫 湫は韻會に「水洞るなり」とあつて、渦を巻いて居るこ

と。【三】精靈狀 題義の項に見ゆ。

【題義】江南通志に「牛渚山は、太平府城の西北三十五里に在り、山下に磯あり、牛渚磯といふ。采石磯と相屬し、亦た燃犀浦と名づく。晉の温嶠、犀を燃やして水族を此に照らす」とあり、その温嶠の事は、詳しく異苑に見え「晉の温嶠、牛渚磯に至り、水底に音樂の聲あるを聞く、水深くして測るべからず、傳へて云ふ、その下に怪物多し」と。乃ち犀角を燃やして之を照らす。須臾にして、水族火を覆ひ、奇形異狀、或は車馬に乘じ、赤衣幘を著くるを見る。その夜、夢に人謂つて曰く、君と幽明道隔つ、何の意か相照らす」とある。なほ太平府志に「牛渚磯は、當塗縣采石山下に在り、江濬に石柱あり、高さ丈許、峭壁の間に突兀たり。相傳ふ、古しへ、金牛あり、此に見はる、故に名づく」とあり、後漢志に「丹陽の疆域、ひとり南に牛渚ありと稱す、孫吳東晉、毎に重兵を其地に宿せしむ」とある。この詩は、牛渚磯の形勢を詠出したのである。

【詩意】絶壁は、突兀として、大江の岸に臨み、對岸には、連峰があつて、その勢、相對するが如く、亂石は渦巻く急流の間に峙つて居て、廻旋する水は、自然に波浪を起す。牛渚磯の形勝は、ざつと此の如く、但だ其絶壁の上に羣木の秀でて居るのに驚くが、水底に於て、精靈が如何なる状を爲すか、温嶠ならぬ限りは、これを測り知ることが出来ない。それから、猿の夜鳴くを聞けば、この身、江上に在つて、憂心、さながら醉ふが如くである。

靈墟山

靈墟山

丁令辭世人。拂衣向仙路。丁令、世人を辭し、衣を拂つて仙路に向ふ。
 伏鍊九丹成。方隨五雲去。伏して、九丹を鍊つて成り、方に五雲に隨つて去る。
 松蘿蔽幽洞。桃杏深隱處。松蘿、幽洞を蔽ひ、桃杏、隱處に深し。
 不知曾化鶴。遼海歸幾度。知らず、曾化の鶴、遼海歸る幾度ぞ。

【字解】一 九丹 抱朴子に「第一の丹は名づけて丹華といひ、第二の丹は名づけて神符といひ、第三の丹は名づけて神丹といひ、第四の丹は名づけて還丹といひ、第五の丹は名づけて餌丹といひ、第六の丹は名づけて鍊丹といひ、第七の丹は名づけて柔丹といひ、第八の丹は名づけて伏丹といひ、第九の丹は名づけて寒丹といふ。凡そ九丹を服す、天に昇らむと欲すれば去り、しばらく人間に止まらむと欲すれば、亦た意に任かす、皆能く無間に出入し、得て害すべからず」とある。二 五雲 五色の雲、前に見ゆ。

【題義】方輿勝覽に「靈墟山は、當塗縣南十里に在り」といひ、一統志に「靈墟山は、太平府城の東北三十五里に在り、世傳ふ、丁令威、道を學び、この山椒に飛昇す、壇址猶ほ在り、山に洞あり、後に井あり、大旱竭きず」とある。次に丁令威の事は、前にも一寸見えたが、ここに、その終始を敘すれば、搜神後記に「丁令威は、本と遼東の人、道を靈墟山に學び、後、鶴に化して遼に歸り、城門の華表柱に集まる、時に少年あり、弓を擧げて、これを射むと欲す。鶴、乃ち飛び、空中に徘徊し、言つて曰く、

有鳥有鳥丁令威。去家千年今始歸。城郭如故人民非。何不學仙家業。

遂に高く上つて天に沖す。今遼東の諸丁は、云ふ、その先世、升仙するものあり、但だ名字を知らざるのみ」とあり、江南通志に「丁令威は、遼東の人、涇縣の令となり、姑熟に遊び、靈墟山の泉石幽秀なるを樂み、丹を此に鍊り、丹成るや、虛に翔つて去る」とある。この詩は、靈墟山を詠じ、仍つて、丁令威を弔つて作つたのである。

【詩意】丁令威は、世人に辭し、衣を拂つて仙路に向はむとし、仍つて、この靈墟山に籠つて、仙丹を鍊り、やがて、九種の丹が盡く成るや、忽ち五色の彩雲に乗じて、立ち去つて仕舞つた。その後、ここには、松蘿が幽洞を蔽ひ、桃杏が隱處に深く、わづかに、その遺跡たるを知るのみである。丁令威は、かくて化して鶴に成つたといふが、遼東城門の華表に幾たび歸つて來たが、その跡、杳茫として尋ね難きは、即ち仙の仙たる所以であらう。

天門山

天門山

迥出江上山。雙峰自相對。迥に出づ江上の山、雙峰、自ら相對す。
 岸映松色寒。石分浪花碎。岸は松色に映じて寒く、石は浪花を分つて碎く。

懷古 姑熟十詠靈墟山 天門山

參差遠天際。縹緲晴霞外。

參差たり遠天の際、縹緲たり晴霞の外。

落日舟去遠。廻首沈青靄。

落日舟去ること遠く、首を廻らせば、青靄に沈む。

【字解】一、雙峰。天門山の二山をいふ。二、參差。不揃なること、二山の高低を異にするをいふ。

【題義】天門山は、前に七絶があつて、その處で解説して置いたが、更に念の爲め、ここに詳述すると、太平寰宇記に「天門山は、太平州當塗縣の西南三十里に在り、二山あり、大江を夾む、東を博望といひ、西を天門といふ。郡國志に云ふ、天門山、亦た蛾眉山と名づく、楚、吳の餘艦を此に得たりと。按ずるに、その山、相對し、時人呼んで、東梁山、西梁山となす。縣圖に據れば、天門山たり。輿地志に云ふ、博望梁山、東西江を隔てて相對すること、門の如く、相去ること數里、これを天門といふ。宋の孝武詔して曰く、梁山は層岫雲峙、流、海岳に同じ、天、魏を表象し、以て國形を旌すと。仍つて二山を以て闕を立つ、故に天門といふ」とあり、太平府志に「天門山は、郡の西南三十里に在り、亦た東梁山と稱す。和州の西梁山と大江を夾んで對峙し、江中より遠望すれば、色、黛を横ふるが如く、修嫵靜好、宛宛として、蛾眉に異ならず、故に又蛾眉山と名づく」とある。この詩は、天門山を詠出して、その形勢を敘したのである。

【詩意】天門山は、遙に江上に出で、東西の二梁が自然に相對して居る。水上に於ては、岸が老松の色に映じて寒げに見え、水中に於ては、石が流るる水を分ち、碎けては浪の花と咲き出づる。江を隔てて眺めやれば、遠い天際に當りて、二山高低齊しからず、晴霞の外に、縹緲として、山色匂ふばかり。ここに、夕日の西に没する頃、舟に乗つて江を下ると、やがて、次第に遠くなり、首を回らせば、いつしか、青靄の中に沈んで見えなく成つて仕舞つた。

【餘論】每首八句、皆仄韻を用ひ、そして、中間に於ては、成るべく對偶を用ひて居る。隨分、骨を折つて形容刻劃してあるが、格別、名句も雋句もなく、要するに、平淺の譏を免れない。されば、古來の選本にも、此中の一首をだに載せず、唐宋詩醇の如きも、全く之を閒却して居る。そこで、これは、李白の手筆では無からうといふ説もあるが、如何にも、尤も千萬なことと思はれる。王琦は、最後の一首天門山の下に註して「蘇東坡曰く、姑熟亭下を過ぎ、李白の十詠を讀み、その淺近を疑ふ、孫逸云ふ、これを王安國に聞く、これは、乃ち李赤の詩、祕閣の下に赤の集ありて、この詩在り、白の集中には此なし。赤は柳子厚の集に見え、自ら李白に比す、その後、厠鬼に惑はされて死す。今、その詩を觀るに、只だ此の如きのみ、しかも以て李白に比す、その人心恙、すでに久しく、特に厠鬼の罪のみに非ざるなり」とある。これは、何の書に據つたのか、その出處を明言せぬのは、聊か手ぬかりである。何にせよ、李赤の如きは、區區たる小詩人で、もとより、李白の十一を望むことも出来ないで、この言は、蓋し當を得たものであらう。但し、之を後人の作に較ぶれば、必ずしも、その

下に落ちぬもので、これにつけても、時代の風氣は、到底、争はれぬものである。次に陸放翁の入蜀記には「李太白集、姑熟十詠あり、予の族伯父彦遠、かつて言ふ、東坡、黄州より還り、當塗を過ぎて之を読み、手を撫して大に笑つて曰く、賈物敗る、豈に李太白、この語を作すものあらむや、と。郭功父、争うて以て然らずと爲す。東坡笑つて曰く、恐らくは是れ、太白後身の作るところのみ、と。蓋し、功父少時、詩句俊逸、前輩或は之を許し、以て太白の後身と爲し、功父亦た遂に以て自負す、故に、東坡、これに因つて之に戲る。或は曰く、十詠及び歸來乎、笑矣乎、僧伽歌、懷素草書歌は、太白の舊集に之なく、宋次道、再び編する時、多きを貪り得るを務むるの過なり」とある。

李太白集卷二十一

閒適

閒中適意の作で、或は心知を訪ひ、或は小酌興を恣にし、すべて浮世の塵囂を忘るるを旨としたものである。

與元丹丘方城寺談玄作

元丹丘と方城寺にて玄を談じて作る

茫茫大夢中。惟我獨先覺。

茫茫たり大夢の中、惟だ我獨り先づ覺む。

騰轉風火來。假合作容貌。

風火を騰轉し來り、假に合して容貌を作す。

滅除昏疑盡。領略入精要。

昏疑を滅除し盡せば、領略、精要に入る。

澄慮觀此身。因得通寂照。

澄慮、此の身を觀、因つて寂照に通ずるを得たり。

朗悟前後際。始知金仙妙。

朗悟す、前後の際、始めて知る金仙の妙。

幸逢禪居人。酌玉坐相召。

幸に禪居の人に逢ひ、玉を酌んで坐に相召す。

彼我俱若喪。雲山豈殊調。 彼我、俱に喪ふが若く、雲山、豈に殊調ならむや。

清風生虛空。明月見談笑。 清風、虛空に生じ、明月、談笑を見る。

怡然青蓮宮。永願恣遊眺。 怡然たり青蓮宮、永く願はくは遊眺を恣にせむ。

【字解】(一) 大夢 莊子に「且つ大覺あり、而して後、此は、その大夢なるを知るなり」とある。(二) 風火 王琦の解に「釋家、此身を以て、地水火風の四大、假りに合して成ると爲す。堅きものは是れ地、潤ふものは是れ水、暖きものは是れ火、動くものは是れ風」とある。(三) 寂照 楞嚴經に「淨極光通達、寂照合三虛空、却來觀三世間、猶如三夢中事」とあつて、王琦の解に「湛然常定、これを寂といひ、盤然不昧、これを照といふ、寂は其體なり、照は其用なり、體用、寂照を離れず、雙運は即ち是れ定慧交修止觀互用の妙諦」とある。(四) 前後際 王琦の解に「維摩詰所說經に、法は人あること無く、前後際斷す。故に華嚴經に雖知諸法無有前際、而廣說過去、雖知諸法無有後際、而廣說未來、雖知諸法無有中際、而廣說現在」とある、つまり、人生の過去未來の事を指すであらう。(五) 金仙 佛をいふ。(六) 青蓮宮 佛寺をいふ。

【題義】元丹丘は、前に數ば見えて居た。もと仙を學んだ人で、李白と平生交誼が厚かつた。方城寺は、何處に在るか分らない。この詩は、元丹丘と方城寺に會し、玄、即ち道家の理を談論した間に作つて、その人に示したのである。

【詩意】人の一生は、茫茫たる大夢の如きものであるが、唯だ我のみ獨り先づ目を覺まして、その真相を看破した。抑も風火といふものが騰轉し來り、それが假りに結び合つて、容貌となり、依つて、この五體が出来たのである。されば、昏い疑惑の念を滅除し盡し、宇宙の眞理を領得して、その精要を

極めることが、第一に必要である。そこで、種種の思慮を落ちつけて、靜に我が一身を觀れば、やがて、寂照、即ち宇宙の本體に參通することが出来るし、この現在に言ふに及ばず、過去未來の際まで大悟すれば、はじめて、佛法の廣大至妙なることが分かる。われは、幸にして、ここに元丹丘の如き禪居の人に逢ひ、玉液を酌みつつ、相迎へて坐し、互に玄妙の道理を語り合ひ、彼も、我も、嗒然として、心身を喪ふが如く、全く宇宙と冥合して仕舞ひ、雲山に隱るる道家も、決して其調を異にせず、つまり釋道二教は、その出世間的見地に於て、全然同一の物である。この心浩然として、得るところあるが如く、清風は虛空に生じ、明月は我等の談笑を窺ふが如く、無心なる風月も、亦た我が爲に周旋するやうに思はれた。かくの如くなれば、怡然として、この佛寺の中に留まり、いつまでも、遊眺を恣にして居たいので、ここは、物外の妙境、即ち我等の身を託すべき處である。

【餘論】前半十句は、談玄の妙致を敘し、言言、妙機に參透し、作者の向内的思索も、さこそと推察される。幸逢禪居人以下は、元丹丘と對坐することを寫したので、清風明月の二句は、その境地の清幽を思はしめる。釋成時は「李白の詩に云ふ、朗悟前後際、始知金仙妙、と。文人を束ぬる、稻麻竹葦の如きも、この十字を吐き出さず」といつて、ひどく傾倒の意を表して居る。

尋高鳳石門山中元丹丘

高鳳石門山中の元丹丘を尋ぬ

尋幽無前期。乘興不覺遠。
 蒼崖渺難涉。白日忽欲晚。
 未窮三四山。已歷千萬轉。
 寂寂聞猿愁。行行見雲收。
 高松來好月。空谷宜清秋。
 溪深古雪在。石斷寒泉流。
 峰巒秀中天。登眺不可盡。
 丹丘遙相呼。顧我忽而哂。
 遂造窮谷間。始知靜者閒。
 留歡達永夜。清曉方言還。

幽を尋ねて前期なく、興に乗じて遠きを感じず。
 蒼崖渺として、涉り難く、白日忽ち晚れむと欲す。
 未だ三四山を窮めず、已に歴たり、千萬轉。
 寂寂として、猿の愁ふるを聞き、行行、雲の收まるを見る。
 高松、好月來り、空谷、清秋に宜し。
 溪深くして古雪在り、石斷えて寒泉流る。
 峰巒、中天に秀で、登眺、盡すべからず。
 丹丘、遙に相呼び、我を顧み、忽として哂ふ。
 遂に窮谷の間に造り、始めて知る、靜者の閒なるを。
 留歡、永夜に達し、清曉、方に言に還る。

【字解】 一 尋幽 幽は幽境。二 渺難涉 はるかに遠くして登り難きといふ。三 千萬轉 路の曲折甚だしきこと。四 好月 よく晴れた明月。五 石斷 大石が中斷して居る。六 中天 半天に同じ。七 丹丘 即ち元丹丘。八 窮谷 深谷に同じ。九 靜者 心靜なる人、隱逸者をいふ。一〇 留歡 留つて共に樂む。一一 永夜 長夜に同じ。一二 清曉 夜の明け離れたるをいふ。一三 方言還 言は、ここに訓すべし。

【題義】 高鳳石門山は、前にも見えて居る。この詩は、その山中に分け入り、元丹丘を尋ねて作つたのである。

【詩意】 山林の幽處を尋ねるのに、前から何時といつて約束した譯でもなく、ふと興に乗じて路の遠きを感じず、はるばると山中に分け入つた。すると、蒼崖が前面に屹立して居て、なかなか遠くへ一寸登れさうにもなく、兎角する内に、日も暮れむとした。まだ三つ四つの峠を踰え切らないのに、路は、うねりくねつて、千萬回も曲折する位。その間に於ては、寂寂として猿の聲の悲しげなるを聞き、行き行きて、夕雲の谷に收まるを見た。やがて、よく晴れた月は、高松の上に懸り、空谷は、殊に清秋に宜しき様である。巖壑は深くして、太古の雪を餘し、大石が中斷して、寒泉は潺湲として流れて居る。仰ぎ見れば、峰巒高く半天に聳え、そこに登つて眺めむとするも、なかなか行き著かない。その時、元丹丘は、わが來るを知つて、遙に聲を揚げて呼びかけ、われを顧みて、忽然として笑つて居た。そこで、その聲を知るべに窮谷の間に下り、彼の菴に往つて見ると、あたりの景色、いかにも物さびしく、はじめて靜者の心閑なるを知つた位。引き留められた儘、杯酒歡を盡し、夜あけの頃に成つて、はじめて歸途に就いた。

【餘論】 起首四句は、尋訪の總提、未窮三四山の四句は路の奇險なるをいひ、高松來好月の四句はやがて夜になりしことをいひ、峰巒秀中天の四句は、丹丘に呼び留められたことをいひ、遂造窮谷

間の四句は、丹丘の廬に至り、終夜歡を共にせしをいひ、段落截然として、次第に遞下して居る。嚴滄浪は「起二句、遊情を得、遊弊を知つて、方に與に此を言ふべし」といひ、鍾伯敬は「興に乗じて來り、興盡きて返る、只だ是れ此起五字の意、然れども、此の如く説く、殺風景ならず」といつた。

安州般若寺水閣納涼喜遇薛員外

安州般若寺の水閣に納涼し、薛員外に遇ふを喜ぶ

脩然金園賞。遠近含晴光。脩然たり金園の賞、遠近、晴光を含む。

樓臺成海氣。草木皆天香。樓臺、海氣を成し、草木皆天香。

忽逢青雲士。共解丹霞裳。忽ち青雲の士に逢ひ、共に丹霞の裳を解く。

水退池上熱。風生松下涼。水は池上の熱を退け、風は松下の涼を生ず。

吞討破萬象。舉窺臨衆芳。吞討、萬象を破り、舉窺、衆芳に臨む。

而我遺有漏。與君用無方。而も、我、有漏を遺れ、君と無方を用ふ。

心垢都已滅。永言題禪房。心垢、都已に滅し、永言、禪房に題す。

【字解】(一) 脩然 悠然の如し、莊子に「脩然として往き、脩然として來る」とあつて、その詳は前に見ゆ。(二) 金園

の園圃をいふ、王琦の解に「須達長者、祇陀太子の園を買つて、佛の住處となさむと欲す、太子戯れに言ふ、金を得て地中に布滿すれば、即ち當に賣與すべし」と。須達、遂に金餅を出して地に布き、園中に周滿し、厚さ五寸に及び、廣さ惟れ十里、この園地を買つて、如來に奉施し、精舎を起立す。後人金園の事を用ふる、これに本づく」とある。(三) 有漏 大般若經に「何をか有漏法といふ。佛、善現に告ぐ、世間の五蘊、十二處、十八界、四靜慮、四無量、四無色定、所有一切三界に墮つる法、これを有漏法と名づく」とある、つまり一切の現象。(四) 無方 莊子に「無方に行ふ」とあつて、郭象の註に「物に隨つて轉化するなり」とある。(五) 心垢 四十二章經に「心垢滅盡、淨として暇穢なし」とある。

【題義】安州は、唐時淮南道に隸屬して居て、又これを安陸郡といつた。般若は、讀んで百惹の如く、釋言般若、華言智慧、寺は之に因つて名を立てたのである。薛員外は、如何なる人か分らぬ。この詩は、安州般若寺の水閣に於て、納涼を爲せし時、員外郎の薛員外といふものに遇ひしを喜んで作つたのである。

【詩意】悠然として、寺の園中に勝賞を縱にすれば、折しも、空はよく晴れて、遠近ともに明かに見えた。樓臺は、海氣の蒸し成せるかと怪まれ、草木は、この世ならぬ天上の香氣を帯びた様に感ぜられた。ここに、偶然邂逅した員外郎の薛員外といふ人は、青雲の士とも稱すべく、もとより仙道に心を寄せ、その志操は、甚だ高潔である。そこで、各丹霞の裳を解いて打寛げば、水は漫漫と湛へて、池上、すでに熱なく、風は颯颯と響いて、松下、自ら涼を生じた。やがて、萬象を一つに併せて、吞み下しつ、その真相を尋ね、簾を擧げて、多くの花卉を眺め下した。われは世間のあらゆる有漏の

法はすべて遺てしまひ、君と共に無方を行ひ、物に随つて轉化するのである。そこで、心上の垢は、すべて滅し盡し、ここに言を永うして歌を唱へ、乃ち禪房に題した次第である。

【餘論】起首四句は、寺中の風物を總括し、忽逢青雲士の四句は、水閣に於て薛員外に遇つたことを言ひ、吞討破三萬象の四句は、即ち感慨を敍したのである。前首と頗る類似して居るが、構想措辭、ともに一籌を輸するを免れないやうである。

魯中都東樓醉起作

魯の中都東樓醉起の作

昨日東樓醉。還應倒接羅。

昨日、東樓に酔ひ、還た應に接羅を倒にすべし。

阿誰扶上馬。不省下樓時。

阿誰、扶けて馬に上る、省みず樓を下るの時。

【字解】一 接羅 帽をいふ。この句は、山簡醉歸の事を用ひたので、すでに前に見ゆ。二 阿誰 三國志龐統傳に「向者の論、阿誰、失と爲す」とある。

【題義】唐書に「河南道に中都縣あり、もと平陸縣、天寶元年、名を更む」とある。この詩は、魯の中都縣なる東樓に於て酔を沽ひ、やがて歸つて酒の始めて醒めた時に作つたのである。

【詩意】昨日、東樓の上に於て、酔ひ潰れたが、その時は、定めて帽をも逆に冠つたであらう。それ

から、誰が介抱して、馬に乗せて呉れたか知らぬが、樓を下つた時の事などは、一切覚えて居ない。

【餘論】醉起したのは、無論、東樓ではなく、この詩は、東樓に於て沽ひし酔の醒めた時に作つたので、題の書き方は、稍や不十分である。嚴滄浪は「尋常の醉狀、皆かくの如し。有意者、以て必ずしも説かずと爲す、これを説く政に佳」といつて居るが、もとより一時口占の作で、その性質上、大したものではない。

對酒醉題屈突明府廳

酒に對し酔うて屈突明府の廳に題す

陶令八十日。長歌歸去來。

陶令八十日、長歌歸りなむ來。

故人建昌宰。借問幾時廻。

故人建昌の宰、借問す幾時か廻る。

風落吳江雪。紛紛入酒杯。

風は吳江の雪を落し、紛紛として酒杯に入る。

山翁今已醉。舞袖爲君開。

山翁、今すでに酔ふ、舞袖、君が爲に開く。

【字解】一 陶令八十日 陶潛の歸去來辭の序に「予、一家貧にして、耕殖以て自ら給するに足らず、幼稚室に盈ち、瓶に儲粟なし。親故多く予に勸めて、長吏たらしむ。家叔、予が貧苦を以て、遂に小邑に用ひらる。時に風波未だ靜ならず、心、遠役を憚る。彭澤は家を去ること百里、公田の利、以て酒を爲すに足る。少日に及びて、眷然として歸與の情あり、自ら免じて職を去る。仲秋より

冬に至るまで、官に在ること八十餘日。事に因つて心に順ひ、篇を命じて歸去來辭といふ」とある。【三】建昌宰 唐時、江南西道に建昌縣があつて、豫章郡に隸屬して居た。【四】山翁 山簡、前に數ば見ゆ。

【題義】 屈突は、あまり聞き慣れぬ變てこな姓であるが、通志の氏族略に「屈突氏は、乃ち代北の複姓なり。本と玄朔に居り、後、昌黎に徙る。孝文、改めて屈氏と爲す、西魏に至つて、復た屈突となす」とある。この詩は、建昌縣に往つた時、酒に對し、酔うて縣令屈突某の客間の壁に題したのである。

【詩意】 むかし、陶淵明は、彭澤の令となり、官に居ること、わづかに八十日、歸去來の辭を作つて、その郷里に歸つて仕舞つたが、建昌の縣令たる我が友は、何時、その郷に歸るであらうか。今しも、風は吳江の雪を吹き亂し、紛紛として、酒杯の中に落ち、いささか寒いけれども、極めて風情がある。山翁は、早くも、すでに酔ひ、君が爲に起つて舞はむとし、兩の袖を開かうとして居る。

【餘論】 はじめに、陶令を情ひ來つて、屈突明府に比し、後半は、おのが對酒の興を敘したのである。

月下獨酌 四首

月下獨酌 四首

花間一壺酒。獨酌無相親。舉杯邀明月。對影成三人。

花間一壺の酒、獨酌相親むなし。杯を舉げて明月を邀へ、影に對して三人を成す。

月既不解飲。影徒隨我身。

月すでに飲を解せず、影、徒に我が身に隨ふ。

暫伴月將影。行樂須及春。

暫く月と影とを伴うて、行樂須らく春に及ぶべし。

我歌月徘徊。我舞影零亂。

我歌へば月徘徊、我舞へば影零亂。

醒時同交歡。醉後各分散。

醒時同じく交歡、醉後各分散。

永結無情遊。相期邈雲漢。

永く無情の遊を結び、相期して雲漢邈たり。

【字解】 【一】無相親 他に伴侶なきをいふ。【二】徘徊 さまよふ。【三】零亂 亂れ動く。【四】交歡 一緒に相交つて喜ぶ。【五】無情遊 この無情は、悪い意味ではなく、世俗の情思に囚はれざること、つまり物外の遊といふ。【六】雲漢 大空に同じ。

【題義】 この詩は、月下に獨酌せる時、その感興を詠出したのである。

【詩意】 花間に坐して、一壺の酒を傍に置き、ひとりで注いで飲み、誰も相手になるものがない。やがて、杯を舉げて明月を迎へ、われと月とが、わが影に對して、合せて三人となつた。月は、すでに酒を飲むことを解せず、影は、唯だ我が身に隨ふばかり、折角三人ではあるが、とんと、酒の相手に成らぬ處から、矢張り、物足りないが、しばらく、月と影とを伴ひ、この長閑けき春に乗じて、行樂を縱にしやうと思ふ。やがて、我歌へば月も徘徊し、我舞へば影も亂れ動き、どうやら、心ありげに我が興を助けるやうである。かくて、醒めて居る時は、各、打澄まして互に喜び合つて居るが、酔う

て後は、各分散して、取り留めもないやうで、その處が、極めて面白く且つ趣があるのである。この三人は、この世ならぬ物外の遊を約し、はるかに、天上にまでも往つて、一緒に居たいと思ふのである。

【餘論】起首四句は、月と影とを合せて三人に成るといひ、次の八句は、月と影とが我と交渉する妙趣を敘し、永結無情遊の二句を以て收束したのである。嚴滄浪は「飲情の奇、孤寂の時に於て、その伴侶を求む、更に下物に順ならず、且つ一嘆一解、遠きが若く、近きが若く、開開闔闔、極めて無情、極めて有情、かくの如く相期す、世間豈に復た相親むべきものならむや」といひ、乾隆御批には「千古の奇趣、眼前より之を得たり、爾時の情景、復た潦倒と雖も、終に其曠達に勝へず、陶潛云ふ、揮杯勸孤影」と、白の意、これに本づく」とある。

天若不愛酒。酒星不在天。天、若し酒を愛せざれば、酒星、天に在らず。
地若不愛酒。地應無酒泉。地、若し酒を愛せざれば、地、應に酒泉なかるべし。
天地既愛酒。愛酒不愧天。天地、すでに酒を愛す、酒を愛して、天に愧ぢず。
已聞清比聖。復道濁如賢。すでに聞く、清の聖に比し、復た道ふ、濁は賢の如し。

賢聖既已飲。何必求神仙。賢聖既に已に飲む、何ぞ必ずしも神仙を求めむ。
三杯通大道。一斗合自然。三杯、大道に通じ、一斗、自然に合す。
但得酒中趣。勿爲醒者傳。但だ酒中の趣を得たり、醒者の爲に傳ふる勿れ。

【字解】一、酒星。晉書に「軒轅の右角の南の三星を酒旗といふ、酒官の旗なり、宴享飲食を主り、五星、酒旗を守る」とある。
二、酒泉。漢書に「酒泉郡、武帝の太初元年に開く」とあつて、應劭の註に「その水、酒の若し、故に酒泉といふなり」とあり、顏師古の註に「相傳ふ、俗に云ふ、城下に金泉あり、泉の味、酒の如し」とある。
三、清比聖、濁如賢。魏略に「太祖、酒を禁ず、而して、人、ひそかに之を飲む、故に酒と言ひ難く、濁酒を賢者となし、清酒を聖人となす」とある。
四、酒中趣。晉書に「桓温、孟嘉に問ふ、酒は何の好きことあつて、卿、これを嗜むか。嘉曰く、公、未だ酒中の趣を得ざるのみ」とあるに本づく。

【詩意】天にして酒を愛せざれば、酒旗の三星が天上に在る筈もなく、地にして酒を愛せざれば、酒泉郡に金泉の有るべき筈がない。天地すでに酒を愛するが故に、酒を愛する人は、造化の神の好意を空しくせぬものである。古しへより、清酒を聖人といひ、濁酒を賢人といつたが、聖人賢人、いづれも酒を飲んだもので、酒は憂を玉帯、これさへあらば、わざわざ神仙の道を求めるにも及ばない。抑も酒を飲むや、三杯にして大道に通じ、一斗にして宇宙と冥合するので、酔中の趣は、又格別であるが、唯だ知る人ぞ知るで、酒の嫌ひな人には、いくら言つて聞かせた處で、到底分らないから、言はない方が善い。

【餘論】起首四句は、天地より酒に及び、次の四句は、天地より聖賢に及び、以下聖賢より酒の功德に及んだのである。劉須溪は「纏綿散朗、漸く真趣に入る、言語の悟入、かくの如し」といひ、嚴滄浪は「何ぞ獨り醒を爲すに忍びむ、醒者の憐むべきを看得たり。醒者の爲に傳ふる勿れ、醒者の鄙むべきを看得たり。酒人の地歩を占むる、かくの如し」といひ、それから、王琢崖は「胡震亨云ふ、この首は、乃ち馬子才の詩なり。胡元瑞謂ふ、近ごろ、李の墨跡を擧げて證と爲すと。詩は僞るべし、筆は僞るべからざらむや。琦按するに、馬子才は乃ち宋の元祐中の人、而かも、文苑英華、すでに太白のこの詩を載す、胡震亨の説、恐らくは誤れり」といつたが、この一首は、寄託元傲、深情含蘊にして際なく、謫仙人でなければ、とても出来ないと思はれるので、胡震亨の如きは、洵に眼識なき者である。

三月咸陽城。千花晝如錦。

三月咸陽城。千花、晝、錦の如し。

誰能春獨愁。對此徑須飲。

誰か能く春獨り愁ふる、此に對して徑に須らく飲むべし。

窮通與修短。造化夙所稟。

窮通と修短と、造化夙に稟くるところ。

一樽齊死生。萬事固難審。

一樽、死生を齊しくし、萬事固より審にし難し。

醉後失天地。兀然就孤枕。

醉後、天地を失ひ、兀然として、孤枕に就く。

不知有吾身。此樂最爲甚。

吾が身あるを知らず、この樂、最も甚しと爲す。

【字解】【一】千花 様様の花。【二】修短 長いと短いと。【三】齊死生 死と生とを同一視する。淮南子に「天下を輕んじ、萬物を細とし、死生を齊しくし、變化を同じうす」とあるに本づく。【四】萬事固難審 世間の事は真相が分らない。【五】失天地 世界を忘れる。【六】兀然 形骸ある貌。【七】此樂 醉中の樂をいふ。

【詩意】咸陽城中、彌生三月の頃は、さまざまの花が咲き亂れ、紅綠紫黃、相映じて、さながら錦のやうである。ここに、春の長閑けきに當つて、獨りで愁ひ顔をして居るのは、まことに愚の骨頂で、花咲き匂ふ此景色に對しては、直に酒を飲むが宜しい。窮通と修短とは、もとより、造化より受けたところの宿命であつて、歎いたとて、悔やんだとて、今更仕方がない。そこで、一樽の酒に對して、死生を同一視するが善いので、あらゆる浮世の事は、もとより、其真相の分つたものではない。一醉せし後は、この世界の存在をも全く忘れて仕舞ひ、ごろりと孤枕に就いて、快げに睡つて仕舞ふ。この時、すでに吾が身あるを知らず。この樂は、人間に於て、この上も無いものである。

【餘論】嚴滄浪は「首四句を摘めば、すでに盡す、以下多を嫌ひ、破を嫌ふ」といつたが、これは、詩中の趣を解せざるのみならず、兼ねて酒中の趣を解せざるもので、まことに笑ふべきである。乾隆御批には「これを陶の飲酒中に置く、真趣正に復た相似たり」とある。蓋し陶集中には、飲酒二十首の

作があつて、すべて、かくの如き興趣を述べて居るからである。

窮愁千萬端。美酒三百杯。窮愁千萬端。美酒三百杯。

愁多酒雖少。酒傾愁不來。愁多く、酒少しと雖も、酒傾くれば、愁來らず。

所以知酒聖。酒酣心自開。酒の聖たるを知る所以、酒酣にして心自ら開く。

辭粟臥首陽。屢空飢顏回。粟を辭して首陽に臥し、屢は空しくして顔回を飢ゑしむ。

當代不樂飲。虛名安用哉。當代、飲を樂まず、虛名安んぞ用あらむや。

蟹螯即金液。糟丘是蓬萊。蟹螯は即ち金液、糟丘は是れ蓬萊。

且須飲美酒。乘月醉高臺。且つ須らく美酒を飲み、月に乘じて高臺に酔ふべし。

【字解】【一】千萬端 一端ならず、様様に入り亂れたるをいふ。【二】酒聖 清酒を聖といふこと、前に見ゆ。【三】首陽 伯夷の事、前に見ゆ。【四】顏回 箠瓢屢ば空しく、しかも晏然たりしこと、前に見ゆ。【五】蟹螯 蟹は大蟹、晉書に「畢卓、かつて人に謂つて曰く、酒を得て數百斛の船に滿たし、四時甘味を上頭に置き、右手に酒杯を持し、左手に蟹螯を持し、酒船中に拍浮す、便ち一生を了するに足る」とある。【六】金液 仙藥、前に見ゆ。

【詩意】この世に於ては、窮愁さまざまに入り亂れて、すこしも、心の休まる暇もないから、宜しく美酒三百杯を盡すべきである。かくて、愁は猶ほ多く、これに對して、酒は少いけれども、酒を傾けて居さへすれば、さしもの愁は、決して推し寄せて來ず、清酒を聖といつたのも成程と頷かれる位、酒酣なる時に當つては、結ばれて居た心も、豁然として自然に開くものである。むかし、伯夷は、周の粟を食ふを屑しとせずして首陽山に隱れ、顏回は、陋巷に居て、箠瓢屢ば空しく、到底飢ゑを免れなかつた。二人ともに、まことに氣の毒な話。今の時に當つて、飲酒を樂まず、伯夷や顔回の眞似をして、虛名を貪つた處で、何の役にも立たない。まことに、蟹螯は、酒の肴として、この上もないもので、仙家の金液に比すべく、酒を醸した跡の糟粕が丘を爲せるは、宛として、この世に於ける蓬萊山である。されば、心ゆくばかり、美酒を飲み、月に乘じて、高臺の上に爛醉するが善い。

【餘論】嚴滄浪は「酒傾愁不來、奈何とすべきなきも、頼に此あるのみ」といひ「夷齊顏回を一掃す、更に高きこと一著」といつた。以上四首、その結局の旨意は、全然同一で、主として酒徳を讃したものであるが、その落想各異にして、絶えて重複せぬところは、まことに面白く、詩品亦た伯仲の間に在る。唐宋詩醇では、第一第三の二首を擧げて、その他を概してあるが、必ずしも、之に拘はるに及ばぬことと思ふ。

春歸終南山松龍舊隱

春、終南山松龍の舊隱に歸る

我來南山陽。事事不異昔。

我、南山の陽に來る、事事昔に異ならず。

却尋溪中水。還望巖下石。

却つて溪中の水を尋ね、還た巖下の石を望む。

薔薇緣東窓。女蘿遶北壁。

薔薇は東窓に緣り、女蘿は北壁を繞る。

別來能幾日。草木長數尺。

別來能く幾日ぞ、草木、數尺を長す。

且復命酒樽。獨酌陶今夕。

且つ復た酒樽を命じ、獨酌、今夕を陶まむ。

【字解】

【一】南山陽 南山は終南山の略、陽は日光を受ける方で、川ならば北岸、山ならば南麓。【二】緣 まとふ、這ひ上る。

【三】女蘿

ひめかづら、前に見ゆ。【四】命 呼ぶ、差し出させる。【五】賦 暢ぶる、打寛ぐ。

【題義】

地理今釋に「終南山は、今の陝西西安府長安縣の南五十里に在り、東は藍田縣に至り、西は鳳翔府郿縣に至るまで、綿亘八百餘里」とあつて、終南山は長安の正南より、すつと西に延びた一帶の山脈である。松龍は、何か分らぬと見えて、むかしから註して無い。或は山中の地名でもあらうか。

又舊隱といふ上は、そこに李白が嘗て隱居して居た草庵の様なものがあつたのであらう。この詩は、春の末、終南山中、松龍の地に在る舊棲に歸つた時に作つたのである。

【詩意】

われ、今、終南山の南なる舊隱の地に歸り來れば、打見たるところ、事事物物、すこしも、むかしと違つて居ない。ここは浮世を離れた絶境であるから、變遷といふことは、殆んど無いと見える。そこで、溪中の水を尋ね、又ぞろ、巖下の石を望みつつ、わが舊居に來て見ると、流石に年古りて、いくらか荒廢した様な按配。野薔薇は伸びて、東の窓に這ひ上り、姫かづらは、北の壁を繞つて居る。ここに別れてより幾許の日を経て、草木は、かくの如く數尺を長じたのであるか。そこで、例の如く、酒を呼び、ひとり杯を傾けて、長き夜を打寛ろいで樂まうと思ふ。

【餘論】

全體が歸去來辭の縮本と見える。別來能幾日の二句は、草木の長茂せしに因つて、はじめて、歲月の積りを知つて、驚嘆する意である。

冬夜醉宿龍門覺起言志

冬夜酔うて龍門に宿し、覺め起きて志を言ふ

醉來脫寶劍。旅憩高堂眠。

酔ひ來つて、寶劍を脱し、旅憩して、高堂に眠る。

中夜忽驚覺。起立明燈前。

中夜、忽ち驚いて覺め、起立す明燈の前。

開軒聊直望。曉雪河水壯。

軒を開いて、聊か直望、曉雪、河水壯なり。

哀哀歌苦寒。鬱鬱獨惆悵。

哀哀として苦寒を歌ひ、鬱鬱として獨り惆悵。

傳說板築臣。李斯鷹犬人。

傳説は板築の臣、李斯は鷹犬の人。

歎起匡社稷。寧復長艱辛。
而我胡爲者。嘆息龍門下。
富貴未可期。殷憂向誰寫。
去去淚滿襟。舉聲梁甫吟。
青雲當自致。何必求知音。

歎ち起つて社稷を匡し、寧ろ復た長く艱辛せむ。
而して、我胡するものぞ、嘆息す龍門の下。
富貴未だ期すべからず、殷憂誰に向つて寫かむ。
去去、涙、襟に滿つ、聲を擧ぐ梁甫吟。
青雲當に自ら致すべし、何ぞ必ずしも知音を求めむ。

【字解】(一) 直望 正面より眺めやる。(二) 苦寒 古樂府に苦寒行といふのがあつて、行役寒に遇ふに因つて作つたのである。今存して居る中で、一番古いのは、魏の武帝の作で、北上太行山、險哉何巍巍とある。(三) 傳説 叔築、李斯鷹犬、ともに前に見ゆ。(四) 歎 暴起、たちまち、俄に。(五) 匡 ただす。(六) 殷憂 憂ひ盛なること。(七) 寫 除く。(八) 梁甫吟 前に見ゆ。(九) 知音 鍾子期、伯牙の琴を彈するを聞いて、その曲意を知りしより云ふ。前に見ゆ。

【題義】 通典に「河南府河南縣に關塞山あり、俗に龍門といふ」とあり、太平寰宇記に「關塞山、左氏傳に、晉の趙鞅、王を納れ、女寛をして關塞を守らしむ。服虔謂ふ、南山伊闕、是れなり。杜預の註、洛陽の西南伊闕口なり、俗に龍門と名づく」とある。この詩は、冬の夜、酔うて龍門山に宿し、覺めて起きたる後、その志を述べて、作つたのである。

【詩意】 酔うた揚句には、寶劍を解き棄て、旅中高堂に憩うて眠つた處が、中夜に忽ち驚きて、目が

覺め、明燈の前に起立した。試に軒窓を開いて直望すれば、曉の雪、紛紛として、河は氷に閉ぢ、その景色は、如何にも凄壯である。そこで、哀哀として、苦寒行の古詩を歌ひ、鬱鬱として、獨り心に思ひ惱んだ。おもへば、傳説は、土工の人足であつたし、李斯は、上蔡門外に鷹や犬を据ゑて遊獵に耽つて居たものであるが、二人とも、忽然として起ち、各、その君の爲に、社稷を一匡した位で、決して、いつまでも艱辛を嘆いては居なかつた。然るに、われ獨り如何なる者なれば、今しも、龍門山下に客となつて、むなしく嘆息して居るのであるか。富貴は、未だ期すべからず、この心中の憂は、誰に依つて除くことが出來やう。ここを去らむとすれば、涙、自ら流れて、襟に滿ち、やがて聲を擧げて、梁甫吟の一曲を歌ひ出した。要するに、青雲の上には、自ら其身を致すべく、すべて、獨力で遣つて除けるのが第一であるので、何も必ずしも、知音を求めて、その人に絶がらうなどいふ了見を起してはならぬ。

【餘論】 全篇を通じて、自奮の心、燃ゆるが如く、骯髒不平の氣、鬱勃として、楮表に溢るるばかり。但し、格を取ること未だ高からず、粗獷の習を擺脫し得ぬところは、自ら然るところではあるが、取りも直さず、この詩の遂に妙品に上らぬ所以である。

尋山僧不遇作

山僧を尋ね遇はずして作る

石徑入丹壑。松門閉青苔。

石徑、丹壑に入り、松門、青苔に閉づ。

閒階有鳥跡。禪室無人開。

閒階、鳥跡あり、禪室、人の開くなし。

窺窓見白拂。挂壁生塵埃。

窓を窺うて、白拂を見、壁に掛けて、塵埃を生ず。

使我空歎息。欲去仍徘徊。

我をして空しく歎息せしむ、去らむと欲して仍ほ徘徊、

香雲徧山起。花雨從天來。

香雲、山に徧ねくして起り、花雨、天より來る。

已有空樂好。況聞青猿哀。

すでに空樂の好きあり、況んや聞く、青猿の哀しきを。

了然絕世事。此地方悠哉。

了然として、世事を絶つ、此地、方に悠なるかな。

【字解】一 丹壑 深い谷で、丹は其土色を云つたのであらう。

二 白拂 白い毛の拂子。

三 空樂 空中の天樂、華嚴經

に「樂音和悅、香雲照耀」とあり、楞嚴經に「即時、天、百寶蓮華を雨らし、青黃赤白、間錯紛糅」とある。

【題義】この山僧といふのは、何といふ坊さんか、その名は分からぬ。折角尋ねた處が不在であつた

から、この詩を作つたのである。

【詩意】石徑屈曲して、壑中に入れば、松に倚りそふ山門があつて、そのあたりは、青苔が一ぱいで

ある。佛殿の階砌には、鳥の足跡があるだけで、禪室は、閉ぢた儘、わざわざ來て開く人もない。窓から伺き見れば、白い拂子が壁上に挂つて居て、それも久しい間と見えて、ほこりが一ぱいかかつて居る。折角、尋ねて來ても、かくの如く不在であつたから、われをして、空しく嘆息せしめ、一たびは歸らうと思つたが、幽居の景色、流石に棄て難きまま、しばらく徘徊して居た。すると、香雲一帶、山に遍ねき程に立ちこめて湧き出で、花の雨は繽紛として天から降り、空中の仙樂の妙に面白きは、言ふに及ばず、青毛の老猿の聲さへも聞こえた。かくて、全然浮世の事を忘れて、この地の幽閒極まりなく、悠然として、吾が性に慚ふを覺えた。

【餘論】前八句は題意の正面、敘して既に之を盡し、香雲徧山起以下六句は、その餘波であつて、専ら境地の清幽限りなき有様を寫したのである。嚴滄浪は「了然絕世事、此地方悠哉、只須らく此の如くなるべくして、適ま此の如し」といひ、乾隆御批には「容、去るを欲せず、僧、復た何くにか之、歎息の意、後半に於て之を見る」とある。

過汪氏別業二首

汪氏の別業を過ぐ二首

遊山誰可遊。子明與浮丘。

山に遊ぶには、誰と遊ぶべき、子明と浮丘と。

閒適 尋山僧不遇作 過汪氏別業二首

疊嶺礙河漢。連峰橫斗牛。
汪生面北阜。池館清且幽。
我來感意氣。槌魚列珍羞。
掃石待歸月。開池漲寒流。
酒酣益爽氣。爲樂不知秋。

疊嶺、河漢を礙り、連峰、斗牛に横ふ。
汪生は、北阜に面し、池館、清且つ幽。
我來れば、意氣に感じ、槌魚、珍羞を列す。
石を掃うて歸月を待ち、池を開いて寒流漲る。
酒酣にして益す爽氣、樂を爲して秋を知らず。

【字解】(一) 子明、列仙傳に「陵陽子明、黃山に上り、五石の脂沸水を探つて之を服す」とある。(二) 浮丘、黃山圖經に「黃帝、容成子・浮邱公と丹を此山に合す、故に浮邱容成の諸峰あり」と見ゆ。(三) 斗牛、南斗・牽牛の二星。(四) 北阜、阜は陵。

【題義】この詩は、汪氏の別莊を訪問して作つたのである。汪氏は如何なる人か分からぬ、又場所も、何處だか知らぬが、陵陽子明・浮邱公、ともに、黃山に限られたるより見れば、矢張、場所は黃山であるかと想像される。さうすると、遊山の地も、無論黃山である。

【詩意】黃山に遊ぶには、誰と共に遊んだら善いか、幸にも、同伴者の中には、かの陵陽子明の如き人もあるし、浮邱公の如き人もある。眺めやれば、重なる嶺嶂は、天の河を遮るかと思はれ、相連れる峰巒は、高く南斗・牽牛二星の間に横はつて居る。汪君は、黃山の北陵に面して、別業を構へ

られて居るが、池館清幽にして、まことに、居心地が善い。予が偶々來訪すると、意氣に感じたやうらで、大へんな歓迎をなし、料理に手を盡して、色色の御馳走を竝べ立てた。かくて、石を掃うて坐し、心のどかに、移り來る月を待ち、池の水を切り落せば、寒流漲るばかり。酒酣なるに當つて、爽氣益す加はり、胸宇すがすがしく、十分に樂を極めて、秋の悲哀をも知らぬが如く、まことに快適の極であつた。

【餘論】起首四句は山中の光景、汪生面北阜の四句は題意の正面、掃石待歸月の四句は、例の餘波で、千歲の下に、その逸興を偲ばしめる。蕭士贇は「秋は歲功將に成らむとするの時なり、士、志あつて不遇、功業未だ建たずして、年、すでに蹉跎、往往これに感じ悲む。これは樂を爲すの極、老の將に至らむとするを知らず、その悲を忘れたるなり」といつた。

疇昔未識君。知君好賢才。
隨山起館宇。鑿石營池臺。
星火五月中。景風從南來。
數枝石榴發。一丈荷花開。

疇昔、未だ君を識らず、知る君が賢才を好むを。
山に隨つて館宇を起し、石を鑿つて池臺を營む。
星火五月中、景風、南より來る。
數枝石榴發し、一丈荷花開く。

恨不當此時。相過醉金罍。恨むらくは、此時に當り、相過ぎて金罍に酔はざるを。
 我行值木落。月苦清猿哀。我が行、木の落つるに値ひ、月苦にして清猿哀し。
 永夜達五更。吳歎送窮杯。永夜、五更に達し、吳歎、窮を送るの杯。
 酒酣欲起舞。四座歌相催。酒酣にして、起つて舞はむと欲すれば、四座歌相催す。
 日出遠海明。軒車且徘徊。日出でて、遠海明かに、軒車且つ徘徊。
 更遊龍潭去。枕石拂莓苔。更に龍潭に遊んで去り、石を枕にして莓苔を拂ふ。

【字解】 一 嚙昔 嚙は發語の辭、昔は過去をいふ。こゝでは前日。 二 星火 書の堯典に「日永く、星火以て仲夏を正す」とあつて、蔡沈の集傳に「星火は東方蒼龍の七宿、火は大火をいふ、夏至昏の中星なり」とある。 三 景風 淮南子に「清明風至る、四十五日、景風至る」とあり、史記の律書に「景風は南方に居る、景とは陽氣道竟るを言ふ、故に景風といふ」とあり、王叔齋の籟記に「景風、一に曰く凱風、又曰く薰風、亦た曰く巨風、赤天の暑門より起り、南方より來る」とある。 四 金罍 酒器、前に見ゆ。 五 吳歎 楚辭に吳歎蔡謫大呂些とあつて、王逸の註に「歎謫は皆歌なり」とある。

【詩意】 前日、まだ君と面識が無かつたが、君が賢才を好むことだけは、傳聞して知つて居た。君は山に隨つて館宇を起し、又石を鑿つて池臺を營み、大に園林を開かれた。そこで、星火天に在る五月、即ち仲夏の頃になると、景風が南から吹き來り、草木は、欣欣として叢茂し、石榴は、數枝の花を著け、蓮の花は、一丈も高く咲き出づることと思ふ。この時に方つて、君を訪うて金罍に酔はざりしは、如

何にも残念なことである。今、われ、落木の頃に値うて、偶ま此に來たが、月の色、冴えわたり、猿の聲は、清げに、悲しく、天地肅殺の候、物色極めて清寒である。この時しも、長き夜を、逸興に耽りて、五更に及び、その間、吳地の歌を唱へつつ、しきりに瓊杯を送られた。酒酣にして、起つて舞はむとすれば、座中自ら歌を爲して、相促すものがある。兎角する内に、日が出て、遠い海の方から明けかかつたから、軒車を命じて、徘徊することとし、更に龍潭に遊び、石を拂うて青苔の上に偃臥しやうと思ふ。

【餘論】 起首四句は、汪氏及び其別業を黜出し、星火五月中の六句は、夏景極めて美なるも、其時遂に來らざりしをいひ、我行值木落の六句は、今夕偶ま過訪して、逸興正に酣なるをいひ、日出遠海明の四句は、例の餘波であつて、明朝更に山中の遊を縱にしやうといふ意を述べたのである。全體に於て、敘述周匝ではあるが、平易淺近の傾向があつて、前首の簡勁清切なるに及ばぬことは、勿論である。

待酒不至

酒を待てども至らず

玉壺繫青絲。沽酒來何遲。

玉壺、青絲に繫ぎ、酒を沽ふ、來る何ぞ遅き。

山花向我笑。正好銜杯時。
 山花我に向つて笑ふ、正に好し杯を銜むの時。
 晚酌東窓下。流鶯復在茲。
 晩に東窓の下に酌めば、流鶯復た茲に在り。
 春風與醉客。今日乃相宜。
 春風と醉客と、今日乃ち相宜し。

【字解】 一 青絲 青い絲で作つた紐で、酒壺を縛つてある。 二 沽酒 酒を買ふ。 三 銜杯 杯を口にくはへる。 四 流鶯 一つ處に留まつて居らず、處處に飛び渡る鶯をいふ。

【題義】 客をもてなす爲に、酒を買はせに遣つたところが、その者が、なかなか還つて來ず、その酒の來るのを待つて居る間に作つたのである。

【詩意】 玉壺に青絲の紐を繫けて、こぼさぬ様にして、酒を買ひに遣つた處が、使が間拔の所爲か、なかなか還つて來ない。 傍を見れば、山花正に開いて、我に向つて笑ふが如く、杯を口にすることは、まことに善い時であるから、早く酒を持つて來れば善いと思ふのみである。その内に、やつと酒を得て、東窓の下に酌めば、日は暮れかかつて、折角の景色も、ほの暗くなりかけたが、流鶯の聲は近く聞こえ、春風席を拂ひ、風情なほ面白く、恰も醉客と相得て、極めて宜しい眺めであるのが、まことに嬉しい。

【餘論】 前半は、題意の正面、後半は、その酒を得て打興する思を敍したのである。 嚴滄浪は「何の日か宜しからざらむ、ひとり今日を擧げ、更に情の至るを覺ゆ」といひ、乾隆御批には「世人皆豪放

を以て白を待つ、豈に其精妙乃ち爾るを知らむや」とある。

獨酌

獨酌

春草如有意。羅生玉堂陰。
 春草、意あるが如く、羅生す玉堂の陰。
 東風吹愁來。白髮坐相侵。
 東風、愁を吹いて來り、白髮坐に相侵す。
 獨酌勸孤影。閒歌面芳林。
 獨酌、孤影に勸め、閒歌、芳林に面す。
 長松爾何知。蕭瑟爲誰吟。
 長松、爾、何を知らむ、蕭瑟、誰が爲に吟ずる。
 手舞石上月。膝橫花間琴。
 手は舞ふ石上の月、膝には横ふ花間の琴。
 過此一壺外。悠悠非我心。
 この一壺の外を過ぐれば、悠悠我が心に非ず。

【字解】 一 羅生 連つて生ずる。楚辭に秋蘭兮靡蕪、羅生兮堂下とあつて、王逸の註に「その堂下を環り羅列して生ず」とある。 二 勸孤影 陶淵明の詩に揮杯勸孤影とある。 三 面芳林 面は對する。

【題義】 この詩は、獨酌の際、興に乗じて、放吟したのである。

【詩意】 春の草は、さながら、心あるが如く、玉堂の陰に羅列して生じ、眼前の景色は、極めて長閑である。しかも、東風は、愁を吹いて來り、白髮は、知らぬ間に我を侵すので、この時、この愁を消

遣するには、酒が第一である。そこで、わが影を顧みつつ獨酌し、閒歌して、花咲き匂ふ林に對して居る。その林の中には、一株の長松がある。ああ長松よ、汝は、人の心も知らずに、蕭瑟として、誰が爲に吟ずるのであるか。幸にして、われ今ここに在り、仍つて、石上の月に向ひ、手を翳して舞ひ、花間に坐し、膝の上に琴を横へて弾じ、颯颯たる汝の天然の音樂に和するのである。あはれ、酒あればこそ。この酒は自分の命であつて、この一壺の外は、萬物は悠悠として、我が心を解せぬものばかりである。

【餘論】起首四句、春意あるも東風愁を吹くに因つて、酒を思ふといひ、次の二句は飲酒に及び、長松爾何知の四句は、長松を倩ひ來つて、獨酌の興正に酣なるを言ひ、結二句に於て、又酒に及んだのである。嚴滄浪は「真に酒趣を得たり、東風白髮、亦た奈何ともするなし」といひ、乾隆御批には「閒適諸篇、大抵陶と近似す、意あつて古しへに擬するに非ず、その自然の處、合するに天を以てするのみ」とある。

友人會宿

友人と會宿す

滌蕩千古愁。留連百壺飲。

滌蕩す千古の愁、留連す百壺の飲。

良宵宜清談。皓月未能寢。

良宵、清談に宜しく、皓月、未だ寝ぬる能はず。

醉來臥空山。天地即衾枕。

醉ひ來つて空山に臥すれば、天地即ち衾枕。

【字解】一、滌蕩、蕩は盪に同じ。東都賦に因造化之盪滌とあつて、その註に「猶ほ除くが如きなり」とあり、又古詩に滌蕩放情思何爲自結束とある。二、皓月、すみわたる月。

【題義】友人が來訪して泊まり込んだに就いて、ともに、酒を飲み、醉中に此詩を作つたのである。

【詩意】良朋邂逅、酒を飲んで、興を恣にし、千古の愁を除き盡し、留連して百壺の酒を傾け盡した。折しも、月は澄み上り、良宵の景、世の常ならねば、寝ぬるも惜しく、しばらく、高談しやう。空山の中に在つて、酔後、體を横にすれば、天地は衾枕も同様で、浩浩の懷、たとふるに物なき程である。

【餘論】この詩は、蕭士贇の云へる通り、全く劉伶の酒徳頌の幕天席地といふ句に本づいたので、襟懷曠達なるものに非ざれば、到底道破することが出来ぬ。嚴滄浪は「天地即衾枕、本と語すでに惡、那んぞ再び述べけむや」といつたが、これも亦た人を喜ばしむる快語であつて、何の惡か之あらむといふべく、滄浪の評は、斷じて、苛酷に失したものである。

春日獨酌 二首

春日獨酌 二首

東風扇淑氣。水木榮春暉。

東風、淑氣を扇り、水木、春暉に榮ゆ。

閒適 友人會宿 春日獨酌 二首

四二七

白日照綠草。落花散且飛。白日、綠草を照らし、落花、散じて且つ飛ぶ。
 孤雲還空山。衆鳥各已歸。孤雲、空山に還り、衆鳥、各すでに歸る。
 彼物皆有託。吾生獨無依。彼の物、皆託するあり、吾が生、獨り依るなし。
 對此石上月。長醉歌芳菲。この石上の月に對し、長醉、芳菲を歌ふ。

【字解】 一 東風扇淑氣。南史衛陽王義季傳に「陽和扇氣、播厥之始」とあり、陸機の詩に蕙草饒淑氣とある。淑は善、淑氣は目出たき氣。二 春暉。春の光。

【題義】 この詩は、春の日に當り、獨りで酒を酌んで作つたのである。

【詩意】 東風は、目出たい生氣を扇り、水木ともに春の光に榮えて見え、白日は、緑の草を照らし、落花は、しづ心なく散り且つ飛んで居る。眺めやれば、孤雲緩く曳いて、空山に還り、多くの鳥どもは、各その時に歸つた。かの萬物は、各託するところあつて、落つついて居るのに、われのみは、獨りで、依るところもなく、この石上の月に對し、長醉して芳菲の花に歌ふより外はない。

【餘論】 王翼雲は「これ春に感じて、自ら飄蕩を傷むなり」とある。次に嚴滄浪は「擧ぐべきなく、亦た議すべきなし、此あらば足れり、次いで作らざるべし」といつたが、例の酷評で、この一首は、すでに興到り筆隨つたものと稱すべく、決してさう輕蔑したものではない。

我有紫霞想。緬懷滄洲間。われに紫霞の想あり、緬懷す滄洲の間。
 思對一壺酒。澹然萬事閒。思は一壺の酒に對し、澹然として萬事閒なり。
 橫琴倚高松。把酒望遠山。琴を横へて、高松に倚り、酒を把つて遠山を望む。
 長空去鳥沒。落日孤雲還。長空、去鳥沒し、落日、孤雲還る。
 但恐光景晚。宿昔成秋顏。但だ恐る、光景晚く、宿昔、秋顏を成すを。

【字解】 一 紫霞想。霞を餐したいと思ふ心、即ち仙人志願のこと。二 緬懷。緬は遙に、遠く。三 光景。風景といふ義とあるが、ここでは、光陰、上の落日を承けて云つたのである。四 宿昔。むかしの紅顏といふこと。

【詩意】 われは、仙人に成つて、紫霞を餐したいと志し、常常はるかに滄洲の間を懷つて居る。ここに暫く一壺の酒に對し、澹然として、浮世の事どもをすつかり忘れて仕舞つた。そこで、琴を横へて、高い松の木に、倚りかかり、酒を把つて、遠山を望んだ。長空には去鳥沒し去り、夕日の中に孤雲が歸つて行く。恐るるところは、光陰は兎角に移り易く、むかしの紅顏も、やがて衰容に變ずることである。

【餘論】 この詩は、専ら世の果敢なさより、酒を縱にするに及んだので、澹然萬事閒の一句が、全首の關鍵である。

金陵江上遇蓬池隱者

金陵の江上に蓬池隱者に遇ふ

心愛名山遊。身隨名山遠。

心に名山を愛して遊び、身は名山に隨つて遠し。

羅浮麻姑臺。此去或未返。

羅浮の麻姑臺、ここを去つて、或は未だ返らず。

遇君蓬池隱。就我石上飯。

君が蓬池の隱に遇ひ、我が石上の飯に就く。

空言不成歡。強笑惜日晚。

空言、歡を成さず、強笑、日の晩るるを惜む。

綠水向雁門。黃雲蔽龍山。

綠水は雁門に向ひ、黃雲は龍山を蔽ふ。

歎息兩客鳥。徘徊吳越間。

歎息す、兩客鳥、徘徊す吳越の間。

共語一執手。留連夜將久。

共に語つて、一たび手を執り、留連、夜將に久しから

解我紫綺裘。且換金陵酒。

我が紫綺裘を解いて、且つ換ふ金陵の酒。

酒來笑復歌。興酣樂事多。

酒來つて笑つて復た歌ふ、興酣にして樂事多し。

水影弄月色。清光奈愁何。

水影、月色を弄し、清光、愁を奈何。

明晨挂帆席。離恨滿滄波。

明晨、帆席を挂く、離恨、滄波に滿つ。

【字解】 一 麻姑臺 廣東通志に「麻姑峰は、羅浮山の南に在り、その前に麻姑臺あり、下に白蓮池あり、池水、朱明洞に注ぐ」とあり、羅浮山志に「冲虚觀の西南に石峰あり、峭拔、名づけて麻姑峰といふ。旁に巖あり、麻姑臺といふ。樹石、清幽、その上、常に彩雲あり、白鶴仙女集まる、晉唐以來、人、これあるを見たる者多し」とある。二 雁門 景定建康志に「雁門山は、城の東南六十里に在り、周廻二十里、高さ一百二十五丈、西、彭城山に連り、南、大城山に連り、北、陵山に連り、山勢連綿、北地の雁門に類す、故に以て名と爲す。輿地志に云ふ、山の東北に温泉あり、以て浴すべく、これを飲めば能く冷疾を治す」とあり、江南通志に「雁門山は、江寧府上元縣の東南六十里に在り」と見ゆ。三 龍山 太平寰宇記に「巖山は、昇州江寧縣の南四十五里に在り、その山巖險、故に巖山といふ。宋の孝武、改めて龍山といふ」とあり、六朝事蹟に「雞籠山、寰宇記に云ふ、城の西北九里に在り、西は落星澗に接し、北は栖霞塘に臨む。輿地志に云ふ、雞籠山は、覆舟山の西二百餘歩に在り、その狀、雞籠の如し、因つて、以て名と爲す。宋の文帝、元嘉中、改めて龍山と爲す、黒龍、かつて眞武湖に見はれ、この山、正に湖上に臨むを以て、因つて、以て名となす。今縣を去ること六里」とあり。又景定建康志に「龍山は、城の西南九十五里に在り、周回二十四里、高さ一百二十丈、太平州當塗縣北に入つて水あり、その形、龍に似たるを以て、因つて、以て名づく」とある。

【題義】 作者の自註に、時於落星石上、以紫綺裘、換酒爲歡とある。地理廣記に「開封縣に蓬池あり、亦た蓬澤といふ、故の衛國の匡地」とあり、竹書紀年に「梁の惠王、逢忌の藪を發して、以て民に賜ふ、即ち此」とあり、太平寰宇記に「蓬池は、開封府尉氏縣の北五里に在り。按ずるに、述征記に云ふ、大梁西南九十里、尉氏縣に蓬池あり、阮籍の詩に云ふ、徘徊蓬池上、回顧望大梁」と。即ち此なり。隱者、蓋し其間に居る。故に因つて以て號となす」とあり、江南通志に「落星岡は、應天府の西北九里に在り、一名落星墩、又曰く落星石」とあり、景定建康志に「落星岡、一名落星墩は、城の西北九里に在り、周廻二十六里、高さ一十二丈、又江寧縣西五十里、江に臨んで落星岡あり。李白、

かつて落星石に於て、紫綺裘を以て酒に換へて歡をなす、此地なり」とある。この詩は、金陵の近傍なる大江の岸上に於て、蓬池の隱者に遇つたから、作つて示したので、その時、李白は、紫綺裘を典して、酒に換へ、そして、落星石の上に於て、會飲して歡を爲したといふことである。

【詩意】われは、心に名山の游を愛し、因つて、身は名山に隨はむとして、随分遠くに行くことがあつた。今回は、羅浮山中の麻姑臺を尋ねむとして出かけたが、ひよつとすると、その儘、返らぬかも知れぬといふ覺悟である。ここに、蓬池の隱者たる君に偶然邂逅し、仍つて、石上に於て會食をした。唯だ喋言つて居たばかりでは本當の歡を爲さず、そこで酒が必要であるし、又随分悲しい事も、歎はしい事もあるが、強ひて笑にまぎらして、日の暮るるを惜む位。眺めやれば、秋の緑水は、雁門に向ひ、夕の黄雲は、龍山を蔽ひ、物とはなしに、淋しげな景色。この時しも、君と我とは、兩個の客鳥の如く、吳越の間に徘徊して、すこしも、落ち付かない。かくて、共に語りつつ、一たび手を執り、やがて此處に留まつて、夜も追迫に更けて行く。そこで、わが著て居た紫綺裘を解き、これを典して、金陵の美酒を買つた。その酒が來ると、笑ひ興じて、又歌ひ出し、興酣にして、樂事が多い。水色は、ひたひたと湛へて月色を弄し、清光は、水天の間に溢るるばかりであるが、わが愁を奈何ともすることは出来ない。明朝帆を掛けて立ち去らば、別離の恨は、滄波に満ちて限りなきを覺ゆべく、兎に角、今夕は、十分に痛飲したら善からう。

【餘論】起八句は、初めて遇つた時の光景、緑水向二雁門の八句は、夜に入るも猶ほ別るるに忍びず、仍つて、裘を典して、酒を買ひしことに及び、酒來笑復歌以下は、醉中の感慨を敍して、收束したのである。乾隆御批には「白、吳越に徘徊すと雖も、情を國家に忘るるものに非ず、偶然觸發、覺えず流露、篇中亦たこの健句を得て、撐拄するを喜ぶ」とある。

月夜聽盧子順彈琴

月夜、盧子順の琴を彈するを聽く

閒坐夜明月。幽人彈素琴。

閒坐すれば、夜、明月、幽人、素琴を彈す。

忽聞悲風調。宛若寒松吟。

忽ち聞く、悲風の調、宛として、寒松の吟するが若し。

白雪亂纖手。綠水清虛心。

白雪、纖手に亂れ、綠水、虛心を清くす。

鍾期久已沒。世上無知音。

鍾期、久しく已に沒す、世上、知音なし。

【字解】(一) 悲風調、釋居月琴曲譜錄に「悲風操、寒松操、白雪操あり」といひ、白帖に「陽春白雪、綠水悲風、幽蘭別鶴、竝に琴曲多し」とある。(二) 鍾期、前にも數ば見えたが、風俗通に「伯子牙、善く琴を鼓す。鍾子期、これを聽く。而して、意、高山に在り、子期曰く、善いかな、巍巍乎として、泰山の若し」と。これに傾くして、意、流水に在り、子期曰く、善いかな、湯湯として江河の若し」と。子期死するや、伯牙、琴を破り、絃を絶ち、終身復た鼓せず、世に知音と爲すに足るもの無きを以てなり」とある。

【題義】この詩は、月夜、盧子順といふ人の琴を弾するを聞いて、作つたのである。但し、盧子順は如何なる人か分からぬ。

【詩意】しづかなる夜、明月の底に坐して、幽人の盧子順は、素琴を弾じ始めた。忽ちにして、悲風操の一曲を聞いたが、その響の清越なるは、寒松の吟するが如くであつた。初に白雪の曲を弾するに方りては、盛に織手を動かし、次に緑水の曲を弾すれば、人の虚心を清うするばかり。さはいへ、鍾子期すでに没し、世上復た音を知らず、折角の琴の音を聞き分けて呉れる人が無いから、子順の爲には、まことに氣の毒千萬の事である。

【餘論】中間四句、巧に琴曲の名を點出し、そして、知音なきを以て收束したので、短幅の中に波瀾横生の妙がある。

青溪半夜聞笛

青溪に半夜笛を聞く

羌笛梅花引。吳溪隴水情。

羌笛梅花の引、吳溪隴水の情。

寒山秋浦月。腸斷玉關聲。

寒山秋浦の月、腸は斷つ玉關の聲。

【字解】【一】羌笛 前に見ゆ、胡人の笛。【二】梅花引 曲名、樂府詩集に「梅花落、本と笛中の曲なり」とある。【三】隴水 情 古歌に隴頭流水、分離四下、念我行役、飄然曠野とある。【四】玉關 即ち玉門關の略、前に見ゆ。

【題義】王琦の解に「青溪は、當に清溪に作るべし、江南池州府城の西北五里に在り、その地、唐時に在りては、秋浦縣たり」とある。

【詩意】羌笛高く吹きすさびて、梅花引の一曲を奏するを聞けば、ここ吳溪に於て、隴頭流水の咽ぶを耳にするやうな感を起さしめる。今しも、秋浦の地なる寒山にさし上りし月に對し、玉門關外の悲しい聲を耳にして、心腸斷絶せむばかりである。

【餘論】前半と後半と、共に吳地と邊地との對比で、一は正敘し、一は逆敘し、錯綜して、自然に趣がある。

日夕山中忽然有懷

日夕、山中忽然として懷あり

久臥青山雲。遂爲青山客。

久しく青山の雲に臥し、遂に青山の客となる。

山深雲更好。賞弄終日夕。

山深くして、雲、更に好く、賞弄、日夕を終る。

月銜樓間峰。泉漱階下石。

月は樓間の峰を銜み、泉は階下の石に漱ぐ。

閒適 青溪半夜聞笛 日夕山中忽然有懷

素心自此得。眞趣非外借。素心、此より得、眞趣、外借に非ず。
 颺啼桂方秋。風滅籟歸寂。颺啼いて、桂、方に秋、風、滅して、籟、寂に歸す。
 緬思洪崖術。欲往滄海隔。緬思す、洪崖の術、滄海に往いて隔てむと欲す。
 雲車來何遲。撫己空歎息。雲車來る何ぞ遅き、己を撫して空しく歎息。

【字解】一、漱、口ゆすぐ。二、颺、むささび。三、籟、初學記に「風、萬物を吹いて、聲あるを籟といふ」とある。こゝでは、音聲を發する竅孔を指すので、その本義である。後には、音聲その物を指すやうにあつた。四、洪崖術、神仙傳に「衛叔卿、數人と博戲す、その子度世曰く、是れ誰ぞや。叔卿曰く、洪崖先生」とある。五、雲車、雲上を渡る車、西王母が雲車に乗じて武帝を訪ひしこと、博物志に見ゆ。

【題義】山中に在つて日夕を互り、常に清閑なる間に、ふと心に思ひ起すことがあつたといふので、これを詠出したのである。嚴滄浪は「題語甚だ奇」といつて、これを賞めて居る。

【詩意】久しく青山の雲に臥して居たが、遂に青山の客となつて、ひとり打澄まして居る。山は深くして、雲のただすまひ面白く、これを賞弄して、朝夕を度つて居た。月は樓間の峰に銜まれ、泉は階下の石に漱いで、いづれも清寂の極、如何にも素心に協つて心地よく、自然の妙趣は、外より借りることは出来ない。夜が更けると、むささびが啼いて、桂花、はじめて秋に入り、風が歌むと、萬籟と

もに本の空寂に還つた。われは、洪崖の術を學んで、仙道を得たる後、滄海に往いて、長く浮世と隔つるを期し、雲車の來り迎ふるを待てども、甚だ遅くして、何時とも分かず、はては、己を撫して、むなしく嘆息するのみである。

【餘論】起首二句は汎説、山深雲更好の四句は、峰月石泉を狀し、素心自此得の四句は、桂秋籟寂を借りて、幽邃愈よ増すことを述べ、緬思洪崖術の四句は、仙を學んで、未だ成らざるを浩嘆したのである。

夏日山中

夏日山中

懶搖白羽扇。裸體青林中。白羽扇を搖かすに懶し、裸體青林の中。

脫巾挂石壁。露頂灑松風。巾を脱して、石壁に掛け、頂を露はして、松風を灑ぐ。

【字解】一、白羽扇、白羽を聚めて造つた團扇。二、裸體、衣を著けざること。三、露頂、頭を露出する。

【題義】夏日山中に於て、涼を縱にする趣を詠出したのである。

【詩意】白羽の團扇を搖かして居るのも、億劫で堪まらぬが、何分暑い處から、衣を脱ぎ棄てて、青林中に榻を移した。そこで、頭巾をかなぐり捨てて石壁に掛け、頭を露出して、松風の洒ぐに任せ

ると、何とも言へぬ爽快な心持である。

【餘論】一讀して、心骨の清爽を覚え、劉須溪が「後人この語を以て畫に入る、眞に復た愛すべく、妙は是れ結句」といつたのも、尤も至極と頷かれる。

山中與幽人對酌

山中、幽人と對酌す

兩人對酌山花開。兩人對酌すれば山花開く、

一杯一杯復一杯。一杯一杯、復た一杯。

我醉欲眠卿且去。我酔うて、眠らむと欲す、卿且つ去れ、

明朝有意抱琴來。明朝、意あらば、琴を抱いて來れ。

且は、しばらくと訓す。

【字解】(一) 我醉欲眠卿且去

宋書に「陶潛、酒を嗜む、貴賤、これに造るもの、酒あれば輒ち設く。

潛、もし先づ醉へば、便ち客に語る、我酔うて眠らむと欲す、卿去るべしと。その真率、かくの如し」とある。

【題義】この詩は、山中に在つて、ある世すて人と對酌した時に作つたのである。諸種の選本中には、簡單に題を山中對酌に作つたものもある。

【詩意】會心の友は、我と君と、唯だ二人のみ、山中に在つて、對酌すれば、その傍に花の咲けるが

あつて、さながら、我等の興を助くるが如く、一杯、一杯、復た一杯、杯を重ねること幾回、我、すでに酔うて、眠くなつたから、君、しばらく去られよ、來るも迎へず、去るも送らず、禮數の極めて寛なる處が、世の俗輩と異にして、即ち幽人の眞面目である。さて又、明日重ねて我を訪ふの意あらば、その折は、琴を抱いて來られよ。さすれば、對酌の間、又別様の趣があつて、定めて面白からう。

【餘論】前半は、わざと普通の平仄を破つたので、絶句の變體である。それから、選本の中には、第一句と第二句と位置を易へ、一杯一杯復一杯、兩人對酌山花開に作つたものもあるが、大した相違でもない。嚴滄浪は「これを磨いて去るべし、これを招いて來るべし、政に同調を見る、談諧し得て好し、是れ傲語を作すならず」といひ、乾隆御批には「成語を用ひて、妙、己より出づるが如し、前二句は古調、後二句は拗體の正格に諧ふ」とある。

春日醉起言志

春日醉起して志を言ふ

處世若大夢。胡爲勞其生。

處世、大夢の若し、胡すれぞ、其生を勞する。

所以終日醉。頽然臥前楹。

終日酔ひ、頽然として前楹に臥する所以。

覺來眊庭前。一鳥花間鳴。覺來來つて、庭前を眊みれば、一鳥、花間に鳴く。
 借問此何時。春風語流鶯。借問す、これ何時、春風、流鶯語る。
 感之欲歎息。對酒還自傾。之に感じて、歎息せむと欲す、酒に對して、還た自ら傾く。
 浩歌待明月。曲盡已忘情。浩歌、明月を待ち、曲盡きて、已に情を忘る。

【字解】【一】處世 この世を渡る。【二】大夢 莊子に「且つ大覺あつて而して後に、此は其大夢たるを知るなり」とあり、楞伽經の偈に世間恆如夢とある。【三】浩歌 大聲に歌ふ。【四】忘情 情は俗情。

【題義】説明に及ばぬ、選本などに、言志を宣志に作つたものもある、意味は、もとより同じである。

【詩意】人の斯世に在るは、恰も長い夢を見て居る様なものであるから、その間に色色な事をして、性命を勞するのは、まことに馬鹿げて居るので、我は終日酒に酔ひ、やがて潰れて、楹前に臥すのである。かくて眠覺めし後、ふと庭前を眺むれば、花間に鳥が啼いて居るので、今は如何なる時候かといへば、正に春にして、夕東風ぬるく吹き、その啼くのは、鶯であつた。心に流光の轉徙を感じて、嘆息せむとし、又ぞろ、酒を傾けつつ、大聲に歌うて、月の出るのを待つて居たが、程なく、歌ひ畢れば、その儘、世間の俗情をも忘れて仕舞つた。

【餘論】起首四句は、酒を縦にする所以、覺來眊庭前の四句は、今しも春なることを言ひ、感之欲

歎息の四句は、感慨に入つたのである。劉須溪は「流麗酣暢、淵明に勝らむと欲するものは、その尤も易きを以てなり、詩、皆かくの如し、何ぞ沈著を以て爲さむや」といひ、嚴滄浪は「甚だ適、甚だ達、陶に似て却つて陶を學ぶと言ふを得ず」といひ、范德機は「諸五言、皆晉宋間の風あり、而して、此更に超然」といひ、蕭士贇は「太白の此詩、陶の化に擬するなり」といひ、吳昌祺は「時に感ずるの思あり、しかも覺らずして酒に自得す、高歌の興あつて、しかも、覺らずして遽に其情を忘る、この意、正に佳」といひ、王琦は「麓堂詩話、太白天才絶出、眞に謂はゆる秋水出芙蓉、天然去彫飾」なり。今傳ふるところの石刻、處世若大夢の一詩、序に稱す、大醉中に作り、賀生、我が爲に之を讀む、と。此等の詩、皆手に信せ、縦筆して就る、他は知るべきのみ。琦、かつて、石刻を星鳳樓帖中に見る、覺來眊庭前を攬衣覽庭除に作り、一鳥を有鳥に作り、對酒還自傾を未歎酒已傾に作る。數字同じからず、賀生は誰たるを知らず、もし知章を指せば、恐らくは此理なし、疑ふらくは其れ、後人の疑託に出づるなり」といつた。

廬山東林寺夜懷

廬山東林寺夜懷

我尋青蓮宇。獨往謝城闕。われ青蓮の宇を尋ね、獨往、城闕を謝す。

霜清東林鐘。水白虎溪月。霜は清し東林の鐘、水は白し虎溪の月。
 天香生虛空。天樂鳴不歇。天香、虛空に生じ、天樂、鳴つて歇まず。
 宴坐寂不動。大千入毫髮。宴坐、寂として動かさず、大千、毫髮に入る。
 湛然冥真心。曠劫斷出沒。湛然として真心を冥し、曠劫、出沒を斷つ。

【字解】(一) 青蓮字 梵宮をいふ。(二) 謝 去る。(三) 天香 法藏碎金に「靜勝境中、自然の清氣あり、名づけて天香といふ。自然の清意、名づけて天樂といふ」とある。(四) 宴坐 宴、一に燕に作る、燕は安、安息の貌。(五) 大千 李善の文選註に「大千とは三千界を謂ふ、下は阿毘地獄に至り、上は非想天まで、一世界たり。千世界を小千世界となし、千小世界を大千世界となし、千中世界を大千世界となす」とある。(六) 曠劫 梵書に一世を以て一劫となし、曠劫は即ち永劫。

【題義】江西通志に「東林寺は廬山の麓に在り、晉の太元九年、慧遠建つ。この山、儀形九疊、峻竦天絶、しかも、寺の在るところは、尤も林壑の美を極め、背に爐峰を負ひ、旁に瀑布を帯び、清流階を環り、白雲棟に生ず、別に禪室を營み、最も深靜に居る、凡そ瞻禮に在れば、神氣これが爲に清爽とあり、慎蒙の名山記に「廬山に東林寺あり、寺は晉の慧遠法師に始まる。謝靈運、爲に池を鑿ち、蓮を種う。師、隱者十八人と同じく、土社に修淨す、緇素咸な在り、これを蓮社といふ。師、客を送り、虎溪に至つて止む。かつて、陶淵明、陸修靜と談じ、覺えず溪を過ぎ、ともに笑うて反る。今三門内屋、橋上に於て水淹塞す、云ふ即ち虎溪と。傍の稻田中、蓮數本あり、即ち蓮池なり。寺を出づれば大溪あり、石橋を渡る、或は云ふ、これ虎溪たり」とある。この詩は、廬山の東林寺に宿した夜の感懷を述べたのである。

【詩意】われは、梵宮を尋ねむとして城闕を去り、獨り出かけて山中に宿した。東林寺の鐘は、霜を帯びて清く響き、虎溪の水は、月光に映じて白く見える。自然の清氣は、えならぬ香を發して、虛空に生じ、自然の清意は、音樂をなして、しばしも鳴り止まない。ここに於て、優然獨坐、寂然として動くことなく、この世界も毫髮の中に入つて、至細の物に外ならぬといふことを悟つた。それから、湛然として、この心の本體を自覺し、永劫に互つて出沒を絶ち、これは先天的存在を爲せる極めて靈妙な物であるといふことが分つた。

【餘論】起首六句は、東林寺の夜景、宴坐寂不動以下四句は、靜寂の中に於ける作者の感懷である。

尋雍尊師隱居

雍尊師の隱居を尋ぬ

羣峭碧摩天。逍遙不記年。羣峭、碧、天を摩し、逍遙、年を記せず。
 撥雲尋古道。倚樹聽流泉。雲を撥して古道を尋ね、樹に倚つて流泉を聽く。
 花暖青牛臥。松高白鶴眠。花は暖くして青牛臥し、松高くして白鶴眠る。

語來江色暮。獨自下寒煙。語り來れば、江色暮れ、獨り自ら寒煙を下る。

【字解】【一】羣峭 羣峰に同じ。【二】青牛白鶴 列仙傳に「老子、青牛車に乘じ、去つて大秦に入る」とあり、玉策記に「千歳の鶴、隨時にして鳴き、能く木に登る。その未だ千歳ならざるものは、終に樹上に集まらざるなり、色、純白にして腦丹を成す」とある。楊齊賢は「青牛は、花葉上の青蟲なり、兩角あつて蝸牛の如し、故に云ふ」といつたが、王琦は「青牛白鶴、道家の事を指ふるに過ぎざるのみ、必ずしも別に創解を爲さず」といつて居る。

【題義】この詩は、雍尊といふ僧の隱栖を尋ねて作つたのである。但し、雍尊とは、如何なる人か、よくは分らない。

【詩意】羣峰は、突兀として、碧、天を摩するばかり、雍尊師は、この間に在つて、逍遙を事とし、幾年を経たか分からぬ位。歩しては雲を開いて古い道を尋ね、疲れては樹に倚りかかつて流泉の響を聞いて居る。今しも、咲き亂れたる花は暖かたか、青牛が臥して居るし、千年の松は高く聳えて、白鶴が穩に眠つて居る。われは、この法師と對談し、江色次第に暮れかかりしに驚いて辭し去り、寒煙立ち籠めたる山路をたどどしく下りて來た。

【餘論】これは純然たる五律で、兩聯極めて精當である。嚴滄浪は「必ずしも深からず、必ずしも琢せず、但だその爾かるべきを覺ゆ」といひ、吳昌祺は「この種、甚だ襄陽と相似たり」といひ、王翼雲は「前聯は隱居を尋ぬるを寫し、後聯は己が尊師を見て還るを寫すなり」といひ、乾隆御批には、

一 結勝を擅にす、神韻悠然」とある。

與史郎中欽聽黃鶴樓上吹笛

史郎中欽と黃鶴樓上に笛を吹くを聽く

一 爲遷客去長沙。一たび、遷客となつて、長沙を去る、

西望長安不見家。西、長安を望めども、家を見ず。

黃鶴樓中吹玉笛。黃鶴樓中、玉笛を吹く、

江城五月落梅花。江城五月、落梅花。

梅が落ちるとか、落ちぬとかいふ議論もあるが、そんな事は、どうでも善いから、省略することにした。

【題義】黃鶴樓は、前に數ば見えて居たが、湖廣通志に「黃鶴樓は、武昌府城の西南隅に在り。世傳ふ、仙人、黃鶴に乗じて、此を過ぐ、因つて名づく。江山に雄據して、楚會の大觀たり」とある。この詩は、李白が夜郎に流された途次、郎中の官に居る史欽といふ人と共に黃鶴樓に登り、折から笛を吹くのを聞いて作つたのである。

【詩意】われ既に遷謫の人となり、今や長沙の方に向はむとし、ここに、君と共に黃鶴樓に登れば、

西、長安を望むも、家ある方も見えす、道路阻長、客懷凄切。時しも、樓上に笛を吹くものがあつて、落梅花の一曲を奏したが、江城五月の候、この景、この情、愈よ以て堪へられない。

【餘論】五月は仲夏で、梅花の落ちる時ではない。ここでは唯だ笛曲の名を點出し、矢張、梅花の散る様な感じがするといふので、そこに、自然の妙味がある。嚴滄浪は「凄遠、涙を墮すに堪へたり」といひ、潘稼堂は「黃鶴樓に登り、初め家を望まむとして家見えす、笛を聞くを期せずして、笛、忽ち聞こゆ。すべて是れ、歸るを思ふの情、厚きを以て掩はる」といひ、乾隆御批には「凄切の情、言外に見はれ、含蓄不盡の致あり。落梅は曲名、點用して化に入る。論者、乃ち梅の落つると落ちざるを争ふ、豈に癡人の前、夢を説くを得ざるに非ざるか」とある。

對酒

酒に對す

勸君莫拒杯。春風笑人來。君に勸む、杯を拒む莫れ、春風人を笑つて來る。

桃李如舊識。傾花向我開。桃李、舊識の如く、花を傾け、我に向つて開く。

流鶯啼碧樹。明月窺金疊。流鶯、碧樹に啼き、明月、金疊を窺ふ。

昨日朱顏子。今日白髮催。昨日朱顏の子、今日白髮催す。

棘生石虎殿。鹿走姑蘇臺。棘は生ず石虎の殿、鹿は走る姑蘇の臺。

自古帝王宅。城闕閉黃埃。古しへより帝王の宅、城闕、黃埃に閉づ。

君若不飲酒。昔人安在哉。君、もし酒を飲まざれば、昔人安くにか在る。

【字解】(一) 石虎殿 十六國春秋に「石虎、羣臣を太武前殿に饗す。佛圖澄、殿上に衣を褰けて行吟して曰く、殿乎殿乎、棘子成林、將壞人衣、と。虎、石を發かしめ、下つて之を見る、棘子あつて生ず」とある。(二) 鹿走姑蘇臺 漢書伍被傳に「子胥、吳王を諫む、吳王用ひず、迺ち曰く、臣、今、麋鹿、姑蘇の臺に遊ぶを見るなり」とある。(三) 黃埃 鮑照の蕪城賦に直視千里外、唯見起黃埃とあつて、李善の註に「埃は塵なり」とある。(四) 安在哉 鮑照の詩に壯士皆死盡、餘人安在哉とある。

【題義】この詩は、酒に對して作つたので、説明に及ばぬ。

【詩意】君に御勧めするが、折角さし上げた杯を拒まぬが善い。もし之を拒めば、春風に笑はれるであらう。桃李は、舊識の人の如く、傾くばかりに花を著けながら、我に向つて開き、今しも、眞盛りであつて、終日、流鶯は、碧樹の間を啼きめぐり、夜になれば、明月が天に上つて、わが金疊を窺つて居る。昨日紅顔を矜りしものも、今日は白髮の催すを免れず、若い盛りは、二度とない。加之、荆棘は石虎の殿に生じ、麋鹿は姑蘇の臺に走り、古しへより、華美を極めたる帝王の居宅も、やがて、城門むなしく閉ぢて、黃塵が飛び迷ふばかり。富貴榮華の恃むに足らざることは、かくの如くである。君にして酒を飲まざれば、昔人は何處へ往つて仕舞つたか、試に一考せられよ。さすれば、折角の

此杯を辭するにも及ぶまい。

【餘論】起首六句は、春の景色の賑賑しきをいひ、昨日朱顔子以下六句は、衰老しきりに促し、豪奢長く存せざるをいひ、結二句は、はるかに起首に反映し、杯酒は首尾照應、章法極めて齊整である。

醉題王漢陽廳

醉うて王漢陽廳に題す

我似鷓鴣鳥。南遷嬾北飛。
時尋漢陽令。取醉月中歸。

【字解】一、鷓鴣。張華の禽經註に「廣志に云ふ、鷓鴣は雌雉に似たり、飛べば但だ南に往いて、北せざるなり」とあり、異物志に「鷓鴣は、黑白、文を成し、その鳴くや、自ら呼ぶ、小雉に象たり、その志、南を懷うて、北に往かざるなり」とある。

【題義】この詩は、醉うて漢陽の令王某の客室に題したのである。

【詩意】われは、鷓鴣の鳥の如く、南の方へばかり往つて、北に飛ぶに嬾い。時たま、漢陽の令たる王君を訪ひ、十分に醉を盡して、月中に歸るを例として居る。

【餘論】もとより、醉中の率作で、取り立てて言ふべき程の者ではない。

嘲王歷陽不肯飲酒

王歷陽の肯て酒を飲まざるを嘲る

地白風色寒。雪花大如手。
笑殺陶淵明。不飲杯中酒。
浪撫一張琴。虛栽五株柳。
空負頭上巾。吾於爾何有。

【字解】一、笑殺。殺は語助にして意義なし。二、陶淵明。一張琴。五株柳。ともに陶潛の事に係り、前に見ゆ。三、空負頭上巾。陶淵明の詩に若後不快飲、空負頭上巾とある。四、何有。論語に「不爲酒困、何有於我哉」とあるに本づく。

【題義】王歷陽は、如何なる人か分からぬが、歷陽令たりし王某で、歷陽は、和州の縣名。この詩は、王某が酒を飲まざるを嘲つて作つたのである。

【詩意】雪は其大さ掌の如く、やがて積れば、地は一面に白く、景色も寒げに見える。かかる時には、酒を飲むのが第一であるのに、如何なれば、陶淵明に比すべき君にして、すこしも酒を飲まぬといふか、まことに笑ふべきことである。すでに酒を飲まぬ以上は、一張の琴を撫し、五株の柳を植ゑ、頭巾を被つて居たところで、まことに不似合な事である、しかし、吾は相變らず、酒が好きなる故に、君が厭だといった處で、格別、遠慮も致さぬのである。

【餘論】 中間四句は即ち王歷陽を嘲り、結二句は又自分の身に反折して來たのである。嚴滄浪は「ただ酒を飲まず、一齊に放倒し、又一の極飲酒を借りて射的と作す、更に趣あり」といつて居る。

獨坐敬亭山

敬亭山に獨坐す

衆鳥高飛盡。孤雲獨去閒。
衆鳥、高く飛び盡し、孤雲、獨り去つて閒なり。
相看兩不厭。只有敬亭山。
相看着兩つながら厭はず、只だ敬亭山のみあり。

【字解】 【一】 孤雲 一片の雲。 【二】 相看兩不厭 相見て互に厭きもせぬこと。

【題義】 敬亭山は、前に數ば見えて居たが、江南通志に「敬亭山は、寧國府城の北十里に在り、古しへ昭亭山と名づく。東は宛溪に臨み、南は城闔に俯し、煙市風帆、極目畫の如し」とある。ここは、謝朓が宣城に守たりし時、常に登遊し、李白の傳にも「謝家の青山を愛して、終焉の志あり」とある。この詩は、ひとり、敬亭山に坐して作つたのである。

【詩意】 山上に獨坐して、幽寂限りなきを覺ゆる時、愛すべきものは、唯だ鳥と雲とである。しかし、羣鳥高く飛び盡し、孤雲閒に去り、相見て相厭はざるは、唯だ山と我とのみ。我、すでに山に對して厭

ふなく、山も亦た悠然として動かざれば、必ず我を厭ふものではない。

【餘論】 この詩、簡警精到、さながら、一片の天籟である。嚴滄浪は「寒山一片の石と語る、惟れ山に耳あり。敬亭山と相看る、惟れ山に目あり。世上の人を聳聳殺するを怕れず、古人の胸懷眼界、直に此の如く孤曠」といひ、王翼雲は之を詳論し「起句、獨の字の寫照たり。衆鳥は、世間名利の輩に喩ふ。今皆得意にして、去り盡す。承句、獨の字、上の盡の字と應ず、題中の獨の字に非ざるなり。孤雲は、世間高隱の一流に喩ふ。世と相忘ると雖も、尙ほ去來の蹟あり。轉結二句、纔に是れ獨の字、鳥飛び、雲去り、眼前竝に別物なし、惟だ敬亭山を看著し、而して敬亭山も亦た我を看著するに似、兩つながら相厭ふなし、悠然清淨、心目開朗、敬亭山の外に於て、尙ほ安んぞ、晤對を爲すに堪へたる者あらむや、深く獨坐の神を得たり」といひ、乾隆御批には「宛然たる獨坐の神理。胡應麟、絶句は含蓄を貴ぶ、この詩、太だ分曉と謂ふは、善く詩を説くものに非ず」とある。

自遣

自ら遣る

對酒不覺暝。落花盈我衣。
酒に對して、暝を覺えず、落花、我が衣に盈つ。
醉起步溪月。鳥還人亦稀。
醉起、溪月に歩す、鳥還つて人亦た稀なり。

【字解】「嘆 韻會に「嘆は夕なり」とある、日の入ること。【三】醉起 醉眠より醒める。

【題義】この詩は、自ら鬱懷を遣りしに因つて作つたのである。

【詩意】酒に對して、日の暮るるを覺えず、折しも、春の末、落花は紛紛として、我が衣に滿つる。一たびは醉眠したが、醒めて後、起き上り、溪上の月に閒行すれば、鳥は皆罍に歸り、游人も亦た稀で、さすがに淋しき景色である。

【餘論】前半は醉ふまでの經過、後半は醉起後の光景、冲淡、仙境に入るといふべきである。

訪戴天山道士不遇

戴天山の道士を訪うて遇はず

犬吠水聲中。桃花帶雨濃。

犬は吠ゆ水聲の中、桃花、雨を帯びて濃かなり。

樹深時見鹿。溪午不聞鐘。

樹深くして、時に鹿を見、溪午にして、鐘を聞かず。

野竹分青靄。飛泉挂碧峰。

野竹、青靄を分かち、飛泉、碧峰に挂る。

無人知所去。愁倚兩三松。

人の去るところを知るなし、愁へて倚る兩三の松。

【字解】「二 溪午 溪上偶ま日午に際すといふ意。【三】野竹分青靄 青靄の棚引く間に野竹の叢があるから、分つといつたの

である。【三】飛泉 瀧をいふ。【四】兩三松 兩三株の松の相並んで立てる處。

【題義】西溪叢語に綿州圖經を引いて「戴天山は、縣北五十里に在り、大明寺あり。開元中、李白、書を此寺に讀む、又大康山と名づく、即ち杜甫の謂はゆる康山讀書處なり」とあり、一統志に「大匡山は、綿州彰明山北三十里に在り、一名康山、亦た戴天山と名づく」とある。この詩は、戴天山に住む道士を尋ねた處が、あいにく不在であつたので、悵恨の極、口占したのである。

【詩意】水聲潺湲たる間に、犬が吠えて居るし、桃花は露未だ乾かず、その色濃かである。木は深くして、時に鹿の來往するのが見え、溪上、日午に際して鐘を聞かない。野竹は叢をなして、棚引く靄を分かち、飛泉は、碧峰の頂に挂つて居る。わが尋ねる道士は、何處へ往つたか、その行衛を知つて居る人もなく、兩三株の松のむらむらと聚まつて居る處に倚りかかつて、しばし悵然として居た。

【餘論】起二句の外、兩聯ともに景を寫し、材料多くして、しかも堆垛に流れざるは、一片の雋氣が其中に搖曳して居るからである。嚴滄浪は「幽意を寫す、もとより、その長ずるところ、更にその丹鼎の氣なく、短なるところを用ひざるを喜ぶ」といひ、王翼雲は「前聯は、道士を訪うて遇はず、後聯は、景に對して、悵然、樹竹溪泉を倚望するのみ」といひ、唐仲言は「今人詩を作るに、多く重疊を忌む、右丞の早朝、古今に妙絶す、猶ほ五たび衣冠を用ふるの議を免れず、この詩、水聲・飛泉・樹松・桃竹の如き、語皆犯重。吁、古人は言外に於て佳を求め、今人は句中に於て隙を求め、これを求むる遠

し」といひ、乾隆御批には「自然深秀、王維集中の高作に似たり、孟浩然の梅道士を尋ぬる詩に視ぶれば、華實俱に勝る」とある。

秋日與張少府楚城韋公藏書高齋作

秋日、張少府と、楚城韋公の藏書高齋の作

日下空庭暮。城荒古跡餘。日は下る空庭の暮、城は荒る古跡の餘。

地形連海盡。天影落江虛。地形、海に連つて盡き、天影、江に落ちて虚し。

舊賞人雖隔。新知樂未疎。舊賞、人隔つと雖も、新知、樂未だ疎ならず。

彩雲思作賦。丹壁間藏書。彩雲、賦を作らむを思ふ、丹壁間ま書を藏す。

楂擁隨流葉。萍開出水魚。楂は擁す、流に隨ふの葉、萍は開く、水を出づるの魚。

夕來秋興滿。回首意何如。夕來、秋興滿つ、首を回らせば意何如。

【字解】一 空亭 人の居ない亭臺。二 舊賞 謝眺の詩に山川隔舊賞、朋儕多三兩散とある。三 新知 楚辭に樂莫樂兮新相知とある。四 彩雲 宋玉が朝雲を賦せしことを用ふ、その才思の美を贊して云ふ。五 楂 査に同じ、韻會に「水中の浮木なり」とある。

【題義】この詩は、秋の日、張少府と共に楚城なる韋公といふ人の書齋を訪問して作ったのである。

【詩意】夕日は西に下つて、空亭すでに暮れ、城は荒れはたた儘、古跡だけが残つて居る。地形杳茫、直に海岸に至つて盡き、天影は、江波に映じて、空濶である。むかし、相共に此景を賞せし人は、すでに遠く隔つと雖も、新に相知れる樂は、決して疎濶ではない。この主人たる韋公は、彩雲に對して賦を作らむことを思ひ、丹壁の間なる藏書を檢して、日日讀書に耽つて居る。水中の浮木は、流に隨ふ落葉をせき止め、浮草が開くと、魚が水を出でて跳つて居る。程なく、夕ならむとすれば、秋興方に闌に、首を回らして、諸君は此景を如何に見るかと問うて見た。

【餘論】この詩は、五言排律であつて、起首四句は、韋公を訪ふ途すがらの景色、舊賞人雖隔の四句は、韋公と新に交を結びしこと及び其人を敘し、楂擁隨流葉は、亭中に見た秋景を寫し出したのである。就中、地形天影の一聯は、眺觀曠濶、頗る面白く、乾隆御批には「氣體、極めて杜甫に似たり、飛星過水白、落月動州虛、句法相似て、亦た雙璧と稱す」とある。

懷思

懷思の二字、ともに、おもふで、或は人を懷ひ、或は地を思ひ、延佇低徊の意を寓したのである。

秋夜獨坐懷故山

秋夜獨坐、故山を懷ふ

開適 秋日與張少府楚城韋公藏書高齋作

懷思 秋夜獨坐懷故山

小隱慕安石。遠游學子平。

小隱、安石を慕ひ、遠游、子平を學ぶ。

天書訪江海。雲臥起咸京。

天書、江海を訪ひ、雲臥、咸京より起つ。

入侍瑤池宴。出陪玉輦行。

入つては瑤池の宴に侍し、出でては玉輦の行に陪す。

誇胡新賦作。諫獵短書成。

胡に誇つて新賦を作り、獵を諫めて短書を成す。

但奉紫霄顧。非邀青史名。

但だ紫霄の顧を奉ず、青史の名を邀ふるに非ず。

莊周空說劍。墨翟恥論兵。

莊周、空しく劍を説き、墨翟、兵を論ずるを恥づ。

拙薄遂疎絶。歸閒事耦耕。

拙薄、遂に疎絶、歸閒、耦耕を事とす。

顧無蒼生望。空愛紫芝榮。

顧るに、蒼生の望なく、空しく、紫芝の榮を愛す。

寥落暝霞色。微茫舊壑情。

寥落たり、暝霞の色、微茫たり舊壑の情。

秋山綠蘿月。今夕爲誰明。

秋山綠蘿の月、今夕誰が爲にか明かなる。

【字解】 小隱 王康琚の詩に小隱隱林藪、大隱隱朝市とある。 安石 謝安の字、その東山に高臥せしこと、數ば前に見ゆ。 子平 向子平、意を肆にして、五岳名山に遊びしこと、前に見ゆ。 雲臥 鮑照の詩に雲臥恣天行とある。

【五】 瑤池宴 穆天子傳に「天子、西王母を瑤池の上に觴す」とある。 【六】 誇胡 揚雄が長楊を賦せしことを用ふ。 【七】 諫獵 武帝自ら熊羆を撃ち、野獸を馳逐せしに因り、司馬相如が上疏して諫めしこと、史記に見ゆ。 【八】 紫霄 天上に同じ。 【九】 青史

前に見ゆ。 【一】 莊周 莊子の説劍に「趙の文王、劍を喜ぶ、劍士門を夾んで客たる三千餘人。太子、乃ち人をして千金を以て莊子に奉ぜしむ。莊子、受けず。太子、乃ち輿に王に見ゆ。王曰く、夫子御杖するところ長短何如。曰く、臣に三劍あり、唯だ王の用ふるところ。天子の劍あり、諸侯の劍あり、庶人の劍あり。今、大王、天子の位あつて、庶人の劍を好む、臣、竊に大王の爲に之を薄しとす」とある。 【二】 墨翟 呂氏春秋の高誘註に「公輸班、楚に在り、楚王、雲梯を設けて宋を攻むるの具と爲さしむ。墨子聞いて、往いて之に説く。楚王曰く、公輸般は天下の巧工なり、寡人、宋の城を攻めしむ、何すれぞ得ざらむ。墨子曰く、公輸般をして宋の城を攻めしむれば、臣請ふ、宋守の備を爲さむと。公輸般、九たび之を攻め、墨子、九たび之を却く。又公輸般をして、守備せしむ、墨子九たび之を下す、肯て善く兵を用ふるを以て天下に知られざるなり」とある。 【三】 耦耕 二人相耦して耕す。 【三】 蒼生望 謝安の事、前に見ゆ。 【四】 紫芝 前に見ゆ。

【題義】 この詩は、秋夜齋中に獨坐し、故郷を懷うて作つたのである。

【詩意】 われは林藪に隠るる小隱の身ながら、古しへの謝安石を慕ひ、又平生、遠遊を事として向子平を學び、浮世と隔絶して、自ら打澄まして居た。然るに、天子より詔書を下して、江海の間を尋ね廻られたから、今まで白雲に臥して居た此身を起して、長安に上京し、天子の寵遇を受くることになり、入つては瑤池の宴に侍坐し、出でては玉輦の行くまに陪從し、晨夕、御側を離れず、又胡人に矜る爲に、新に賦を作つて昇平の盛を敘し、天子の狩獵に耽けらせらるるを諫めて、短書を草して上疏したことがある。われは、唯だ至尊の眷顧に答へむとしたまでで、何も、故らに、功名を立てて、史上不朽の名を迎へやうといふ様な考はない。かくて、往往、君の顔を犯して直諫したが、莊

周が劍を説いて、趙の文王を諫めた様には成功せず、墨翟が楚王に見えて、兵を論じた様な事も出来ず、本来才拙に力薄きものであるから、遂に天子から疎外せられ、歸臥して閒地に就き、専ら耦耕を事として居た。顧るに、われは、謝安の如く、蒼生から出山を囑望されて居る譯でもなし、むなしく、紫芝の榮ゆるを愛し、つまり、仙家の道を修行したいといふ考である。眺めやれば、夕やけの色も、ほの暗くなつて、あたりの景色、物さびしく、舊壑を懷ふ情は、微茫ながら、心上に棚引いて居る。おもへば、故山の秋に輝く綠蘿の月は、今宵誰が爲に明かなるか、定めて予の歸るを待つて居るであらう。

【餘論】 起首四句は、召に應じて上京するまでの事、入侍瑤池宴の四句は、翰林に供奉せしこと、但奉紫霄顧の四句は、兎角する中に、天子の眷顧を失ひしこと、拙薄遂疎絶の四句は、長安より放逐されしこと、寥落暝霞色の四句は、即ち題意の正面で、懷郷の意を述べたのである。かく一身の經歷を敘し、簡單ながら、その要を得、且つ故事を運旋して、暴露せぬ處は、さすがに、含蓄ありといふべく、全體が絶妙を以て許すべからざるも、なほ一顧の價値はあることと思はれる。

憶崔郎中宗之遊南陽遺吾孔子琴撫之潸然感舊

崔郎中宗之の南陽に遊ぶを懷ふ。吾に孔子の琴を遺る、之を撫し潸然として舊を感ず

昔在南陽城。唯飡獨山蕨。 懷ふ崔宗之と、白水に素月を弄せしを。
 憶與崔宗之。白水弄素月。 時に菊潭の上を過ぎ、酒を縱にして休歇なし。
 時過菊潭上。縱酒無休歇。 泛此黃金花。頽然清歌發。 一朝、玉樹を擢き、生死、殊に飄忽。
 一朝擢玉樹。生死殊飄忽。 我に孔子の琴を留む、琴存して人すでに歿す。
 留我孔子琴。琴存人已歿。 誰か傳へむ廣陵散、但だ邛山の骨を哭す。
 誰傳廣陵散。但哭邛山骨。 泉戸何時明。長歸狐兔窟。 泉戸何時か明かならむ、長く歸る狐兔の窟。

【字解】 一、南陽 題義の項に見ゆ。 二、獨山 太平寰宇記に「獨山は、南陽縣西三十里に在り」といひ、一統志に「豫山は南陽府城の東北十五里に在り、孤峰峭立、俗に獨山と名づく、三十六陂あり」とある。 三、白水 即ち清水、前に、南陽白水の詩の條に見ゆ。 四、菊潭 通典に「南陽郡菊潭縣に菊水あり、水に旁ふ居人、この水を飲んで多く壽なり」とあり、太平寰宇記に「菊水は、南陽縣東石澗山に出づ、一名菊溪水。或は云ふ、水は石馬峰より出づ、峰、馬の如し、その水、諸水より重し。盛弘之の荊州

記に「源旁、悉く芳菊を生じ、崖に被り、潭を浸し、澗流滋液、その水、極めて甘香。谷中三十餘家あり、復た井を穿たず、仰いで此水を飲む、上壽百二十歳、中壽百餘、その七十八十の者、猶は以て天となす、菊は能く身を軽くし、氣を益し、人をして久壽ならしむ、ここに於て微あり」とある。【五】 縱酒 縱は放、意を放にして酒を飲む。【六】 廣陵散 世説に「嵇中散、刑に東市に臨み、神色變ぜず、琴を索めて之を弾じ、廣陵散を奏す、曲終つて曰、袁孝尼、かつて此散を學ばむことを請ふ。吾斬んで固く與へず。廣陵散、ここに於て絶ゆ」とある。【七】 邙山 太平寰宇記に「芒山、一に邙山に作る。河南縣北十里に在り、一名平逢山、亦邙山の別名なり、都城枕むところ。楊隆期の洛城記に云ふ、北山連嶺、修互四百餘里、實に古今東洛九原の地なりと。又戴延之の西征記に云ふ、西岸東垣、互阜相屬す、伊尹・蘇秦・張儀・扁鵲・田横・劉寬・楊修・孔融・吳の後主・蜀の後主・張華・嵇康・石崇・何晏・陸倕・阮籍・羊祜、皆冢あり、この山に在り」といひ、一統志に「北邙山は、河南府城の北十里に在り、山は偃師・鞏・孟津の三縣に連り、綿互四百餘里、東漢諸陵及び唐宋名臣の墳、多く此に在り」といつて居る。王琦の解に「按するに、邙山は、即ち崔の葬處」とある。【八】 泉戸、狐兎窟 隋の煬帝の秦孝王諫に仲秋卜宅、將歸泉戸とあり、張孟陽の詩に狐兎窟三其中、燕穢不復掃とある。

【題義】 崔宗之は、李白の親友、飲中八仙の一で、數ば前に見ゆ。それから、唐書地理志に「山南道鄧州南陽郡に南陽縣あり」と見え、文獻通考に「琴に一十八様あり、これを究むるに、雅度は、伏羲・大舜・夫子・靈開・雲和の五等に過ぎざるのみ。夫子の様は、長さ三尺、六尺四分」とあり。説略に「古琴は、惟だ夫子・列子の二様、皆肩垂れて濶く、今聳えて狭きが若きに非ざるなり。惟だ、此二様、乃ち古制に合す。或は夫子の様、周遍を以て、皆竹節の様と作すは古制に非ず」とある。この詩は、崔宗之が南陽に遊びに来た時、李白に孔子の琴を遺りしことを思ひ出で、それを弾じ、澹然として、懷舊の念に堪へざるに因つて作つたのである。

【詩意】 むかし、南陽縣城に居た時分、ひとりで、獨山の蕨を餐して居た。その時、崔宗之と共に白水に臨んで、明月を弄したことを記憶して居る。時たま、名だたる菊潭の邊を過ぐるに當つて、おもふ存分、酒を飲んで、すこしも休歇せず、その黄金の花を杯中に泛べ、酔ひ潰れて清歌を發した。然るに、一朝にして玉樹摧折し、飄忽として、生死忽ち其處を異にした。崔宗之は、かつて、予に孔子の琴を贈られ、その琴は、猶ほ儼存するも、人は、既に歿して仕舞ひ、さしもの名曲たる廣陵散も、今傳ふるものなく、但だ北邙に埋まつて居る古骨を哭するのみ。黄泉の扉は、何日開いて明かになるか、加之、草は茂るに任せ、いつしか、狐兎の住所と成つて仕舞つた。

【餘論】 前半は、崔宗之と南陽縣に於て相會せしことを述べ、後半は、琴に因つて宗之その人を追懷したのである。菊潭の水を飲めば、長生をするといふのに、宗之は一去して返らず、おまけに、格別長壽でもなかつたので、菊潭の數句は、決して虛泛ではない。

憶東山二首

東山を憶ふ二首

不向東山久。薔薇幾度花。
白雲還自散。明月落誰家。

東山に向はざること久しく、薔薇、幾度か花さく。
白雲、還た自ら散ず、明月、誰が家に落つ。

【字解】一 幾度花 何回花が咲いたか。二 白雲明月 ともに題義の項に見えた如く、上の薔薇に對し、これは堂名であつて、これに因んで構想したのである。

【題義】施宿の會稽志に「東山は、上虞縣の西南四十五里に在り、晉の太傅謝安の居るところなり、一名謝安山、巍然として衆峰の間に特出し、拱揖虧蔽、鸞鶴の飛舞するが如し。その巔に謝公の調馬路、白雲明月二堂の遺址あり、千嶂林立、下に滄海を視る、天水相接す、蓋し絶景なり。山を下つて微徑を出づれば、國慶寺たり、乃ち太傅の故宅、旁に薔薇洞あり、俗傳ふ、太傅が妓女を攜へて游宴せしところ」とある。この詩は、會稽の東山を過ぎ、謝安の宅址を弔うて作つたのである。

【詩意】われ東山に向はざること、すでに久しく、洞の名にしおふ薔薇の花は、幾回の春を経たりしか。堂の名にした白雲は、自然に散じ、明月は、今宵誰が家を照らすか。白雲明月は、依然たるも、宅址荒廢して、その堂も、今は跡方の無い様に成つて仕舞つた。

【餘論】通首寂寥の極、吳昌祺は「後二句は、即ち明月獨舉、白雲誰侶の意」といひ、王翼雲は「空山の雲月、人なきを以て、寂寥、かくの如し、安んぞ、憶はざるを得む」といつた。

我今攜謝妓。長嘯絶人羣。われ今謝妓を攜へ、長嘯、人羣を絶つ。

欲報東山客。開關掃白雲。東山の客に報せむと欲す、關を開いて白雲を掃へ。

【字解】一 謝妓 謝安の攜へたやうな妓女。二 東山客 東山の住人。三 關 門に同じ。

【詩意】われも、古しへの謝安を學び、妓女を攜へて、この宅址を訪ひ、長嘯して、浮世の人を藐視した。そこで、東山に居る人人に報ずるが、今や門を開き白雲を掃うて、あたりを綺麗にして、わが其處へ往くのを待つて居て貰ひたい。

【餘論】この詩は、他人に寄語したので、詞意淺近、もとより前首に劣つて居る様である。

望月有懷 月を望んで懷あり

清泉映疎松。不知幾千古。清泉、疎松に映じ、知らず幾千古。

寒月搖清波。流光入窓戶。寒月、清波を搖かし、流光、窓戶に入る。

對此空長吟。思君意何深。此に對して、空しく長吟、君を思ふ、意何ぞ深き。

無因見安道。興盡愁人心。安道を見るに因なし、興盡きて人心を愁へしむ。

【字解】一 幾千古 幾千年に同じ。二 流光 月より流れ出づる清光。三 安道 戴逵の字、王子猷が雪夜剡溪に棹して

戴安道を訪ひしこと、前に數ば見ゆ。

【題義】説明に及ばぬ。但し有懷は、その友を懷ふのである。

【詩意】清泉は疎松に映じ、その松は、幾千年を経たのであらうか。寒月は、その泉の清波に揺かされて、流光、窓戸に入り、あたりは皎然として明かである。その清寥の景色に對して、空しく長吟しつつ、わが友を思ふの情に堪へぬ。たとへば、王子猷が戴安道を訪ひ、興盡きて門前より引き歸したやうに、わが友を見るに由なく、興すでに盡きて、唯だ人心を愁へしむるばかりである。

【餘論】前半は敘景、後半は抒情、そして、情景融合の妙は、讀者の心を搖盪し、清氣、人を襲ふばかりである。

對酒憶賀監 二首并序 酒に對して賀監を憶ふ 二首并に序

太子賓客賀公。於長安紫極宮一見余。呼余爲謫仙人。因解金龜換酒爲樂。歿後對酒。悵然有懷。而作是詩。

【訓讀】太子賓客賀公、長安の紫極宮に於て余を一見し、余を呼んで謫仙人と爲す、因つて金龜を解き、酒に換へて樂を爲す、歿後、酒に對して、悵然として懷ありて、是詩を作る。

四明有狂客。風流賀季眞。四明に狂客あり、風流の賀季眞。

長安一相見。呼我謫仙人。長安、一たび相見、我を謫仙人と呼ぶ。

昔好杯中物。翻爲松下塵。むかしは、杯中の物を好み、翻つて、松下の塵となる。

金龜換酒處。却憶淚沾巾。金龜、酒に換ふる處、却つて憶ふ、涙、巾を沾せしを。

【字解】一、四明、山の名、即ち賀知章の故郷。洞天福地記に「四明山は、周圍一百八十里、丹山赤水の天と名づく」とある。

二、狂客、俗に云ふかはり者。三、謫仙、下界に貶謫せられた仙人。四、杯中物、即ち酒、陶潛の詩に天運苟如此、且進杯中物とある。五、松下塵、釋曇遷の詩に我住三刊江側、終爲松下塵とあるに本づく、死して葬ること。六、金龜、腰下に佩ぶる雜玩の類、即ち帶の飾。

【題義】本事詩に「李太白、はじめ、蜀より京師に至り、逆旅に舍る。賀監知章、その名を聞き、首として之を訪ひ、すでに其姿を奇とし、復た爲るところの文を請ふ。蜀道難を出して以て之を示す、讀んで、未だ竟らず、稱嘆するもの數四、號して謫仙となし、金龜を解いて、酒に換へ、與に傾けて酔を盡し、期して日を間せず、これに由つて、聲譽光赫」とある。王琦の説に「金龜は、蓋し是れ佩ぶるところの雜玩の類、武后の朝、内外官佩ぶるところの金龜に非ざるなり。楊升菴は、杜詩に金魚換酒の句あり、偶爾相似たるに因つて、遂に謂ふ、白羽冠、賀知章に遇ふは、中宗の朝、未だ武后の

制を改めざるに在り、云々と。考ふるに、武后の天授元年九月、内外官、佩ぶるところの魚を改め、龜と爲す、中宗の神龍元年二月、詔して、文武官五品以上は、舊式に依つて、魚袋を佩はしむ。この時に當つて、太白、年未だ十齡に滿たず、何ぞ能く知章と長安に相遇はむや。又知章は、開元以前より、官、太常博士に過ぎず、品、從七に居る、例に於て、亦た魚を佩ぶるを得ず。楊氏の説、殆んど未だ之を考へざるか」とあるが、如何にも、尤も千萬である。それから、賀知章の事は、唐書の列傳に見え、「賀知章、字は季真、越州永興の人、性曠夷、談説を善くす。陸象先、かつて人に謂つて曰く、季真清談風流、吾一日見ざれば、鄙吝生ず」と。證聖の初、進士超拔羣類科に擢んでられ、太常博士に累遷す。開元十三年、禮部侍郎兼集賢院學士を兼ねぬ。一日、併せ謝し、太子右庶子に遷り、侍讀に充てられ、工部に徙る。肅宗、太子となり、知章、賓客に遷り、祕書監を授けらる。晩節、尤も誕放、里巷に遊嬉し、自ら四明狂客と號す。祕書外監に及び、毎に酔うて輒ち詞を屬し、筆、停書せず、咸な觀るべきあり、未だ始めより刊飾せず。草隸を善くす、好事者、筆研を具して之に従ふ、意慳ふところあれば、復た拒まず、然れども、紙ごとに、纔に十數字のみ、世、傳へて以て寶と爲す。天寶の初、道士となつて、郷里に還らむことを請ふや、詔して、鏡湖剡川一曲を賜ひ、御製の詩、以て行を贈り、皇太子以下、咸な就いて別を執る。年八十六にして卒す。肅宗、禮部尙書を贈らる」とある。この詩の序は「むかし、太子賓客賀知章が長安の道觀たる紫極宮に於て、はじめて予に逢つた

時、予を稱して謫仙人といひ、腰に佩びたる金龜を解き、それを典して酒を買ひ、痛飲して樂を縱にしたことがある。今、ゆくりなくも、その死後に當りて酒に對し、悵然として、其事を憶ひ出で、仍つて、詩を作つた」といふのである。何は兎もあれ、賀知章は、李白の先輩であり、第一の知己であり、殊に飲中八仙の大先達であつたから、平生の交情も、もとより厚かつた。そこで、知章の死後、ある時、李白は、酒に對して其人を思ひ出で、仍つて此詩を作つたのである。

【詩意】賀知章は、風流の人にして、かつて、自ら號せし如く、四明の狂客である。むかし、長安に於て、はじめて我に遇つた時、わが詩を見て感服し、われを謫仙人といひ、そこで、交を結んだ。知章は、生前いたく酒を好みしが、今は死して松下の塵となつて仕舞つた。彼が腰下の金龜を解き、それを賣つて酒に換へ、はじめて對飲したる當時を思へば、往時杳然、幽明境を異にし、涙流れて巾を濕すばかりである。

【餘論】前半は、賀知章と初めて相逢ひし時の事を敘し、後半は、今日追憶の般なるを敘し、古今を俯仰して、感愴決して盡きない。

狂客歸四明。山陰道士迎。
 敕賜鏡湖水。爲君臺沼榮。

狂客、四明に歸れば、山陰道士迎ふ。
 敕して鏡湖の水を賜ひ、君が臺沼の榮となす。

人亡餘故宅。空有荷花生。
念此杳如夢。凄然傷我情。

人亡びて故宅を餘し、空しく荷花の生ずるあり。
此を念へば、杳として夢の如く、凄然、我が情を傷ましむ。

【字解】一 山陰道士 王羲之に字を書かせて鵝を贈つた道士の事で、その詳は前に見ゆ。二 鏡湖 一統志に「紹興府城西南三十里に在り」と見ゆ。三 荷花 蓮の花。

【詩意】賀知章の四明に歸るや、山陰の道士は、定めて之を迎へたことであらう。その時しも、天子は、特に敕して、鏡湖の一曲を賜ひ、知章をして、臺沼の樂を擅にせしめた。しかし、知章は、幾もなくして逝去せしが故に、其宅だけが残つて居て、鏡湖の蓮は、年年花咲けど、これを賞する人もない。おもつて此に至れば、往日の歡、杳然として夢の如く、凄然として、我が心を傷ましむるばかりである。

【餘論】前首と同一筆法で、前半は、鏡湖歸隱の事を敘し、後半は、其地に關する感慨を述べたのである。但し、二首ともに、わるく言へば平淺で、實は今少し、しつかりしたもののが欲しかつたのであるが、例の一斗詩百篇の産物とすれば、その多きを望む方が無理で、兎に角、情誼の深きは、人をして、覺えず愴然たらしめる。嚴滄浪は「二詩皆平平、然れども、情事傳ふるに足れり」といひ、乾隆御批には「白の知章に於ける、知己の感あり、酒に對して懷を傷ましめ、西州の一慟に減せず」とあ

る。それから、賀知章が、歸隱の後、幾もなくして遷化したことは、唐書の本傳にも明かに見え、その享年までも、明記してある。然るに、王琦の言ふところに據れば「許鼎の撰せる通和祖先生墓志に云ふ、賀監、攝生の妙を得、近く數百年死せず、笈を荷ひ、藥を賣ること、韓康伯の如し。近く天台山に在つて升遐せしこと、人聽に徧ねし、元和己亥、先生、これに遇ふ、謂つて曰く、子、中に寛にして外に柔、以て至道を語るべきなり、後十歲、爾に小有に遭はむ、と。乃ち斷穀丹經を授く。徐鉉序して云ふ、賀監、天寶二年、はじめて郷に還るを得たり、すでにして、天下多事、遂に世と絶ち、吳越に止まり、故老亦たその終るところを知る能はず、と。これ皆知章を以て仙去すとするか。この詩を讀まば、云ふところ、翻爲松下塵、又云ふ、人亡餘故宅」と。無稽の口以て杜ぐべし」とある。

重憶 一首

重ねて憶ふ 一首

欲向江東去。定將誰舉杯。
稽山無賀老。却棹酒船回。

江東に向つて去らむと欲す、定めて、誰と杯を舉げむ。
稽山に賀老なく、却つて酒船に棹して回る。

【字解】一 稽山 會稽山の略。二 酒船 酒を載せた船。

【題義】この詩は、重ねて賀監を憶ふに因つて、作つたのである。

【詩意】 われは、これより江東に向つて去らむと欲するも、誰と共に杯を擧ぐべきか。會稽では、賀老すでに死したれば、酒船に棹して回る外はない。

【餘論】 この詩は、前二首の附録と見るべきもので、さればこそ、重憶を以て題に命じたのである。

春滯沅湘有懷山中

春、沅湘に滯して、山中を懷ふあり

沅湘春色還。風暖煙草綠。

沅湘、春色還り、風は暖にして煙草綠なり。

古之傷心人。於此腸斷續。

古しへの傷心の人、ここに於て腸斷續。

予非懷沙客。但美採菱曲。

予は懷沙の客に非ず、但だ採菱の曲を美とす。

所願歸東山。寸心於此足。

願ふところは、東山に歸り、寸心、此に於て足れり。

【字解】 一、懷沙。史記に「屈原、乃ち懷沙の賦を作る。ここに於て、石を懷き、遂に自ら汨羅に投じて以て死す」とある。

二、採菱。爾雅翼に「楚の風俗、菱熟する時に當り、士女相與に之を采る、故に採菱の歌あり、相和を以て繁華流蕩の極となす。招魂に云ふ、涉江采菱陽阿、と。陽阿は、採菱の曲なり」とある。三、寸心。沈約の詩、所願從之遊、寸心於此足とある。

【題義】 史記に浩浩沅湘兮とあり、正義に「説文に云ふ、沅水は、牂牁より出で、東北流して江に入る。湘水は、零陵縣の海山より出で、北、江に入る」とあり、王琦は「按ずるに、これ皆岳州を経て、

大江に入るなり、後人、沅湘を以て岳州の異稱となす」といつた。この詩は、春の頃、沅湘地方に留滯し、因つて、故國なる山中の景を懷うて作つたので、つまり、客中の感懷である。

【詩意】 沅湘一帯の地、春色方に歸り、風は暖かにして、煙れる草の葉も、緑に見える。かの屈原は、古しへの傷心の人であつて、この地に來つて、腸が斷續せむばかり、千歳の下、これを追憶するだに、まことに、氣の毒なことである。予は、沙を懷いて湘水に投ずる程、まだ世間を見切つたものでもなく、但だ少婦が採菱の曲を唱ふるを美しとして、これに聞き惚れて居る。願ふところは、東山に歸臥すれば、それで善いので、さうすれば、この心も定めて満足するであらう。

【餘論】 前半は、屈原を追思し、後半は、一轉して、自己の懷郷に及んだのである。嚴滄浪は「於此、於此、只だ兩邊一指點、心情見るが如し」とある。しかし、多少意味は異なるにせよ、この短篇の中に、於此の字を兩度まで用ひたのは、あまり、褒めたことではない。

落日憶山中

落日、山中を憶ふ

雨後煙景綠。晴天散餘霞。

雨後、煙景綠なり、晴天、餘霞を散ず。

東風隨春歸。發我枝上花。

東風、春に隨つて歸り、我が枝上の花を發す。

懷思 春滯沅湘有懷山中 落日憶山中

花落時欲暮。見此令人嗟。花落時、暮れむと欲す、此を見れば、人をして嗟せしむ。
願遊名山去。學道飛丹砂。願はくは、名山に遊んで去り、道を學んで、丹砂を飛ばさむ。

【字解】 一 煙景 煙れる春景色。 二 餘霞 残れる夕やけ、謝朓の詩に、餘霞散成綺とある。 三 飛丹砂 仙薬を調合すること。

【題義】 この詩は、落日の際、故郷の山中を思うて作つたのである。

【詩意】 雨晴れし後、煙れる春景色は、緑に心地よく、やがて、晴れた空に残れる夕やけが散じて、日も暮れて仕舞つた。東風は、春に随つて歸り來り、わが庭樹の花どもを開かしめた。しかし、花落ちて、春は忽ち盡きむとし、これを見れば、人をして嘆嗟に堪へざらしめる。願はくは、故郷の名山に遊んで去り、仙道を稽古して、丹砂を調合したいと思ふ。

【餘論】 前半は春景、後半は惜春より懷郷に及んで、一往情深きを覺える。

憶秋浦桃花舊遊時竄夜郎

秋浦桃花の舊遊を憶ふ、時に夜郎に竄せらる

桃花春水生。白石今出沒。桃花春水生じ、白石今出沒す。

搖蕩女蘿枝。半挂青天月。

女蘿の枝を搖蕩し、半ば青天の月を挂く。

不知舊行徑。初拳幾枝蕨。

知らず、舊行徑、初めて、幾枝の蕨を拳する。

三載夜郎還。於茲鍊金骨。

三載、夜郎より還らば、茲に於て金骨を鍊らむ。

【字解】 一 搖蕩 ぶり動かす。 二 蕨 埤雅に「蕨、初生して葉なく、食ふべし、狀、大雀の拳足の如く、又その足の蹙の如きなり、故に之を蕨といふ」とあり。爾雅翼に「蕨初めて生ずる、小兒の拳の如し、紫色にして肥ゆ」とあり、楊升菴は「黄山谷の詩、蕨芽初長小兒拳、以て奇句と爲す、然れども、太白すでに不知行徑下、初拳幾枝蕨の句あり、山谷第二義に落つ」といふ。

【題義】 この詩は、夜郎に流竄せらるる途中、むかし、秋浦に桃花を賞したことを憶ひ出でて作つたのである。

【詩意】 桃花の名に因む春の水が江中に満ち、今は白石も出沒して居る。そして、水は岸を蘸して、女蘿の枝を揺り動かし、其枝の半ばあたりに青天の月を掛けて居る。さきに經行せし秋浦の徑には、今幾莖の蕨を生じたか。もし三載の後、赦されて夜郎より還るを得ば、その處に隱居して、金骨を鍊り、羽化の術を學びたいものである。

【餘論】 前半は、夜郎長竄途中に見たところの春景、後半は、秋浦の舊遊を思うたので、毎毎同一の筆法である。

李太白集卷二十三

感遇

感遇とは、境遇に感じて作つたもので、概ね主觀的感想を述べたものである。

越中秋懷

越中秋懷

越水遶碧山。周廻數千里。

越水、碧山を遶り、周廻數千里。

乃是天鏡中。分明畫相似。

乃ち是れ天鏡の中、分明、畫相似たり。

愛此從冥搜。永懷臨湍遊。

此を愛して冥搜に従ひ、永く懷ふ臨湍の遊。

一爲滄浪客。十見紅蕖秋。

一たび滄浪の客となり、十たび紅蕖の秋を見る。

觀濤壯天險。望海令人愁。

濤を觀て天險を壯とし、海を望んで人をして愁へしむ。

路遐迫西照。歲晚悲東流。

路遐にして西照に迫り、歲晚くして東流を悲む。

何必探禹穴。逝將歸蓬丘。

何必必ずしも禹穴を探らむ、逝いて將に蓬丘に歸らむとす。

不然五湖上。亦可乘扁舟。然らざれば、五湖の上、亦た扁舟に乗すべし。

【字解】【一】冥搜 孫綽天台山賦序に「遺寄冥搜」とあり、李善註に「幽冥を搜訪するなり」とある。【二】紅蓮 紅い蓮の花。【三】觀瀾 越の地は左に浙江を繞らし、江に瀾水あり、晝夜再び上る、枚乗の七發に觀瀾於廣陵之曲江とあるは、即ち浙江を指すのである。【四】禹穴 漢書の司馬遷傳に「會稽に上り、禹穴を探る」とあつて、張晏の解に「禹巡狩、會稽に至つて崩す、因つて葬る、上に孔穴あり。民間云ふ、禹、この穴に入る」とあり、水經註に「會稽山東に硯あり、廟を去ること七里、深くして底を見ず、これを禹井と謂ふと云ふ。東游するもの、多く其穴を探るなり」とある。【五】逝 詩の國風に逝將去女、適彼樂土とあつて、朱傳に「逝は往くなり」とある。【六】蓬丘 即ち蓬萊山。【七】五湖 前に數ば見えたが、國語に「范蠡、輕舟に乘じ、以て五湖に泛ぶ、その終極するところを知るなし」とあり、史記に「范蠡、即ち扁舟に乘じ、江湖に浮び、名を變じ、姓を易へ、齊に適いて鴟夷子皮となり、陶に之いて陶朱公となる」とある。

【題義】越中は、唐時の越州で、又これを會稽郡といひ、江南東道に隸屬して居た。この詩は、會稽に滯留した時、秋に感じて其懷を抒べたのである。

【詩意】越水の稱ある浙江は、碧山を遶り、その山は、周回数千里に及んで居る。やがて、それが天の鏡と見まがふ江水の中に落つれば、その影は、さながら晝に似て居る。われも、この風景を愛して、幽冥を搜訪するを旨としたので、深淵に臨んで、遊賞を縦にしたことは、長く思ひ出の種となるのである。かくて、一たび滄浪の客となつて、十たび紅葉の秋を経た、その間、音に名高き浙江に於て觀瀾の興を縦にし、天險の壯絶なるを目睹したことがあるので、海を望めば、わが心を愁へしめる

から、とても長くは此に居られない。顧みれば、路は遠くして、西に照らす落日の邊につづき、歳は暮れなむとして、東流の水の一たび去つて復た回らざるを悲むのである。されば、今しも越中に滯留して居るもの、何も必ずしも禹穴を探るに及ばず、往いて、蓬萊の仙土に歸隱しやうと思つて居る。もし、それが出來ずば、五湖の邊に至り、古しへの范蠡の跡を趁うて、扁舟に乘するもの、又面白かるべく、いづれにしても、早晚、ここを立ち去らうと決心して居る。

【餘論】起首六句は、昔日の遊、極めて樂しかりしことを述べ、一爲滄浪客の六句は、刻下の境涯を敘し、何必探禹穴の四句は、蓬丘五湖に向はむとし、兎に角、この世を脱出したいといふ希望を述べたのである。

效古 二首

古に效ふ 二首

朝入天苑中。謁帝蓬萊宮。朝に天苑の中に入り、帝に謁す蓬萊宮。

青山映輦道。碧樹搖煙空。青山、輦道に映じ、碧樹、煙空に搖く。

謬題金閨籍。得與銀臺通。謬つて金閨の籍に題し、銀臺と通するを得たり。

待詔奉明主。抽毫頌清風。待詔、明主に奉じ、毫を抽いて清風を頌す。

歸時落日晩。躑躅浮雲驄。

歸る時、落日晩く、躑躅、浮雲の驄。

人馬本無意。飛馳自豪雄。

人馬、本と意なく、飛馳自ら豪雄。

入門紫鴛鴦。金井雙梧桐。

門に入れば紫鴛鴦、金井、雙梧桐。

清歌絃古曲。美酒沽新豐。

清歌、古曲を絃じ、美酒、新豊を沽ふ。

快意且爲樂。列筵坐羣公。

快意、且つ樂を爲し、列筵に羣公を坐せしむ。

光景不可留。生世如轉蓬。

光景、留むべからず、世に生きて、轉蓬の如し。

早達勝晚遇。羞比垂釣翁。

早達は晩遇に勝る、垂釣の翁に比するを羞づ。

【字解】

【一】天苑 禁苑に同じ。【二】蓬萊宮 唐書に「大明宮は、禁苑の東南に在り、西、宮城の東北隅に接す、長さ千八百歩、廣さ千八十歩、東内といふ、本と永安宮、貞觀八年に置く、九年、大明宮といひ、以て太上皇の清暑に備ふ、百官費を獻じ、以て役を助く、高宗、風痺を以て西内の湫濕を厭ひ、龍朔三年、はじめて大に興葺して、蓬萊宮といひ、咸亨元年、含元宮といひ、長安元年、復た大明宮といふ」とある。【三】輦道 閣道、輦に乗じて行くべきが故に云ふ。【四】全閣籍 全閣は金門、應劭の漢書註に「籍は尺二の竹牒なり、これを宮門に懸け、案省相應じ、乃ち入るを得るなり」とある。【五】銀臺 大明宮の門の名、前に見ゆ。【六】待詔 通鑑に「玄宗即位、はじめて翰林院を置いて、禁苑に密通し、文章の士を延き、下は僧道書畫琴棋數術の士に至るまで、皆之に處らしめ、之を待詔といふ」とある。【七】抽毫 毫は筆毫、筆を抜き出す。【八】清風 詩の大雅に吉甫作頌、穆如清風」とある。【九】躑躅 行く貌。【一〇】浮雲驄、紫鴛鴦、金井 皆前に見ゆ。【一一】列筵 四座に同じ。【一二】轉蓬 前に見ゆ。【一三】早達 南史に「張纘、年二十二、尙書吏部郎に累遷し、俄にして、長兼侍中たり、時人以て早達となす」とある。【一四】垂釣

翁 呂尙を謂ふ、年八十にして渭濱に釣し、はじめて文王に遇つた。亦た前に見ゆ。

【題義】效古は、即ち古詩の體に倣つたといふのであるが、その内容は、作者自身の閱歷を敘したので、わざと、此の如く題を命じたのである。

【詩意】朝に禁苑の中に入り、蓬萊宮に於て天子に謁見した。終南の山色は、御輦の通行する路に映じ、碧樹は煙れる空に搖き、まことに長閑けく目出たき有様で、さすがに、太平の氣象である。かくて、誤つて、金馬門に籍を置くことになり、そこへ行く道は、銀臺門と通じ、布衣の身を以て、九重の城闕に出入するを得たる有り難さ、身は、翰林に待詔となつて、聖明の主に供奉し、筆を抜いて、清風の頰を作るを事として居た。それから、退朝する時は、落日の晩に際し、しづかに名馬を歩ませ、人馬ともに意なきものから、その飛び馳する様は、豪雄を極めて居た。家に歸ると、池中には紫鴛鴦が戯れて居るし、金井には、梧桐の木が二株植ゑてある。そこで、清歌を唱へて、古曲を弾せしめ、新豊の美酒を買ひ、心ゆくばかりに、樂を縱にし、四座には羣公を坐せしめ、もろともに打興じて居た。しかも、すべての光景は、決して久しく留まることが出來ず、この世に在る間は、轉蓬の如く、行衛定めぬものである。顧みれば、早達は晩遇に勝り、人は、是非とも、年の若い内に出身せねばならぬもので、かの磻溪に釣を垂れた太公望に比せられるを羞づるといふので、これが世俗の見解である。

【餘論】起首四句は、始めて天子に謁見せしこと、謬題「金閨籍」の四句は、翰林に待詔せしこと、歸時落日晩の四句は退食の模様、入門紫鴛鴦の六句は其宅に於ける逸樂の有様、光景不可留は感慨を述べたので、無論、後日の作であるが、その當時の事として敘述を試みたのであらう。蕭士贇は「この詩、樂府富貴の體なり」といつて居る。

自古有秀色。西施與東鄰。

古しへより秀色あり、西施と東鄰と。

蛾眉不可妬。況乃效其瞶。

蛾眉、妬むべからず、況んや、乃ち其の瞶に效ふをや。

所以尹婕妤。羞見邢夫人。

尹婕妤が、邢夫人を見るを羞づる所以。

低頭不出氣。塞默少精神。

頭を低れて氣を出さず、塞默、精神少し。

寄語無鹽子。如君何足珍。

寄語す無鹽の子、君の如き、何ぞ珍とするに足らむ。

【字解】一 西施、東鄰、ともに前に見ゆ。二 尹婕妤、邢夫人、史記に「武帝、時に夫人を幸し、尹婕妤と邢夫人と、同時に幸せらる。詔して、相見るを得ず。尹夫人、自ら武帝に請ひ、願はくは、邢夫人を望見せむといふ。帝、これを許し、他の夫人をして飾らしめ、御者數十人を従へ、邢夫人となつて、來り前ましむ。尹夫人、前んで之を見て曰く、邢夫人の身に非ざるなり。帝曰く、何を以て之を言ふ。對へて曰く、その身形状を視るに、以て人主に當るべからず、と。ここに於て、帝、乃ち邢夫人をして故衣を衣て、獨身來り前ましむ。邢夫人、これを望み見て曰く、これ眞に是れなりと。ここに於て、乃ち頭を低れ、俛して泣き、自ら

其の如かざるを痛むなり」とある。【三】低頭、首を垂れて元氣なきこと。【四】塞默、落膽して黙つて居ること。【五】無鹽、古しへの醜婦、前に見ゆ。

【詩意】古しへより、絶世の秀色と稱せらるるは、越王が呉に進めた西施と宋玉の東鄰の女子とである。蛾眉の美なるは、いくら妬んだとても、仕方がないので、まして、其瞶に倣へば、唯だ自己の醜を増すばかりである。されば、尹婕妤は、武帝に乞うて、邢夫人を見るや、直に之を見分け、おのが容貌の到底相及ばざるを愧ぢ、首を垂れた儘、氣を出さず、落膽して、一語をも出し兼ね、全く精神的に降伏して仕舞つた。無鹽は、聞こゆる醜婦であつて、無論、才徳は偉いに相違ないが、單に美色の上から論ずれば、もとより珍とするに足らぬものとして、世俗一般から卑視されて居る。

【餘論】前首は、世俗、早達を貴んで、晩達を賤むをいひ、此首は、一般に色を重んじ、毫も、才徳を顧みざるをいひ、これが、即ち自己の不遇の原因であるといふことに歸著する。嚴滄浪は「妬むも得ず、瞶に效ふも得ず、色あつて徳なきは、敢て見ず、徳あつて色なきは、珍とするに足らず。色を贊すること、至れり、而して、世を嘆ずるの意、言外に見はる、眞に古人の情を得たり」といひ、蕭士贇は「この詩、時の色を以て相尙んで、徳を好まざるものを刺る、故に末句、これを反言して、寄語無鹽子、如君何足珍といふなり」といひ、乾隆御批には「凡そ效古擬古の作、皆空言に非ず、必ず中に感ずるところあり、藉つて以て意を寄す、故に之を質言し得ざれば、寓言を以て之を明かにし、

これを正言し得ざれば、その辭を反し、以て意を見はす。白の高曠、豈に沾沾として、早達を以て自ら喜び、蛾眉を誇つて醜女を嗤ふものならむや。これを刺ること深く、これを諷すること微なり、眞に古樂府の遺を得たるもの、讀者意を以て之を逆へ、その言外の旨を得れば可なり」といひ、いづれも、肯綮に中つて居る。

擬古 十二首

古に擬す 十二首

青天何歴歴。明星如白石。

青天、何ぞ歴歴たる、明星、白きこと石の如し。

黄姑與織女。相去不盈尺。

黄姑と織女と、相去ること尺に盈たず。

「とする。

銀河無鵲橋。非時將安適。

銀河に鵲橋なし、時に非ずして、將に安くにか適かむ。

閨人理紈素。遊子悲行役。

閨人、紈素を理め、遊子、行役を悲む。

瓶氷知冬寒。霜露欺遠客。

瓶氷、冬寒を知り、霜露、遠客を欺く。

客似秋葉飛。飄飄不言歸。

客は秋葉の飛ぶに似て、飄飄として歸るを言はず。

別後羅帶長。愁寬去時衣。

別後、羅帶長し、去時の衣を寬にせむことを愁ふ。

乘月託宵夢。因之寄金微。

月に乗じて、宵夢に託す、これに因つて金微に寄す。

【字解】(一) 歴歴 古詩に衆星何歴歴とあつて、歴歴は行列の貌。(二) 黄姑 爾雅に「河鼓、これを牽牛といふ」とあり、古歌に東飛三伯勞、西飛燕、黄姑織女時相見といひ、黄姑は即ち河鼓、もと吳音が訛したのである。錦繡黃花谷に「牽牛、これを河鼓といふ、聲轉じて黄姑となるなり」とある。(三) 銀河 初學記に「天河、亦た銀河といふ」とあり、淮南子に「烏鵲、河を填めて、以て橋を成して織女を渡す」とあり、中華古今註に「鵲、一名袖女、俗に云ふ、七日河を填めて、橋を成す」とある。(四) 紈素 顏師古の漢書註に「紈素は、今の絹なり」とあり、柳惲の詩に念君方遠遊、賤妾理紈素とある。(五) 瓶氷知冬寒 呂氏春秋に「瓶水の氷るを見て、天下の寒を知る」とある。(六) 金微 舊唐書に「貞觀二十二年、契苾回紇等、十餘部落相繼いで歸國す。太宗各その地土に因り、その部落を擇び、置いて州府と爲し、回紇を以て瀚海都督府となし、僕骨を金微都督府となす」とあり、新唐書に「金微都督府は、僕固部を以て置き、安北都護府に屬す」とある。

【題義】擬古も、矢張、前の效古と同じく、古詩に擬したと稱し、その實、亦た自己の感懷を寄せたのである。

【詩意】青天の上に歴歴と列をなせる明星は、さながら白石の如く、そして、牽牛・織女の二星は、相距つること尺にも盈たず、極めて接近して居る様に見える。しかし、銀河の上に鵲の渡せる橋もなく、七月七日といふ、きまつた時で無ければ、往かうと思つても、決して行かれない。閨中の少婦は、旅立つ夫の爲に絹の衣を縫ひ、その夫は、又はるばる行役に出かけることを悲しんで居る。げにや、瓶水の氷れるを見て、冬の寒さを知るべく、霜露は遠客を壓倒して、その心を傷ましめる。一たび家を

離れた孤客は、秋葉の飛ぶが如く、飄飄として、その行くに任せ、決して歸らうといはない。されば、空間を守る征婦は、夫に別れし後、羅帶の腰に餘るを覚え、夫の去る時に著て居た衣も、今では身に緩すぎる位、つまり、孤居の物憂さに堪へずして、日に日に瘦せて行くので、月に乗じて、魂は遙夜の夢に入り、この別後の苦を金微の彼方に居る夫に知らせたいと思ふばかりである。

【餘論】これは、主として、思婦の懷を敍したので、その實は、武を驥し兵を弄するを諷つたのである。嚴滄浪は「音情甚だ長し」といひ、蕭士贇は「この篇、時に兵を窮め、武を驥し、行役期度なく、男女怨曠、その室家の情を遂ぐるを得ざるを傷み、時に感じて悲む、哀んで傷らず、怨んで誹らず、眞に國風の體あり、これ晦庵の謂はゆる詩に聖なるものか」といひ、梅鼎祚は「古詩、相去日以遠、衣帶日以緩、太白、その語を約して曰く、別後羅帶長」と。謂はゆる延年善く減ず」といつて居る。

高樓入青天。下有白玉堂。

高樓、青天に入る、下に白玉の堂あり。

明月看欲墮。當牕懸清光。

明月、看て墮ちむと欲す、牕に當つて清光を懸く。

遙夜一美人。羅衣沾秋霜。

遙夜一美人、羅衣、秋霜に沾ふ。

含情弄柔瑟。彈作陌上桑。

情を含んで柔瑟を弄す、彈じて陌上桑を作す。

絃聲何激烈。風卷遠飛梁。

絃聲何ぞ激烈なる、風卷いて飛梁を遠る。

行人皆躑躅。棲鳥去廻翔。

行人皆躑躅、棲鳥去つて廻翔。

但寫妾意苦。莫辭此曲傷。

但だ妾が意の苦なるを寫す、この曲の傷むを辭する莫れ。

願逢同心者。飛作紫鴛鴦。

願はくは、同心の者に逢ひ、飛んで紫鴛鴦とならむ。

【字解】一 白玉堂 古詩に黃金爲三君門、白玉爲三君堂とあり、江總の詩に併勝餘人白玉堂とある。二 遙夜 長夜に同じ、楚辭に靚杪秋之遙夜とある。三 陌上桑 古しへの相和歌曲で、すでに前に見ゆ。四 遠飛梁 前に見ゆ、魯靈光殿賦に飛梁偃蹇以虹指とある。五 躑躅 足を住める。

【詩意】高樓屹として、青天に届く位で、その下には、白玉堂がある。頃しも、秋の夜半、明月は、看る看る西に落ちむとし、堂の窓に當つて、清光を懸けて居る。この夜長に際し、一個の美人、うす物の衣は、秋の霜に沾ひつつ、情を含んで琴を弄し、やがて陌上桑の一曲を弾じ始めた。その絃聲は、いかにも激烈であつて、風に卷かれて、高き梁を繞り、餘音嫋嫋として、長しへに盡きず、路行く人も、歩を止め、時に住む鳥も、再び去つて後に飛ぶ位、抑も絃聲の悲しいのは、妾の心の苦痛を寫したからで、この曲の傷ましげなるは、どうか許して呉れる。願はくは、同心の人に逢ひ、ともに化して、紫鴛鴦となり、そして、翼を並べて飛びたいものである。

【餘論】美人は賢者に比し、その不遇にして、孤寂の感に堪へぬ情致を寫し出したものである。蕭士贇は「この詩、賢者才を懷き、藝を抱き、以て人の耳目を聳動するあり、しかも、肯て身を以て軽く人に許さず、同心同徳の者を得て、これに依附せむことを思ふなり」といつて居る。

長繩難繫日。自古共悲辛。
長繩は、日を繋ぎ難く、古しへより、共に悲辛。

黄金高北斗。不惜買陽春。
黄金、北斗よりも高く、陽春を買ふを惜まず。

石火無留光。還如世中人。
石火、留光なく、還た世中の人の如し。

即事已如夢。後來我誰身。
即事、すでに夢の如く、後來、我、誰が身ぞ。

提壺莫辭貧。取酒會四鄰。
壺を提げて貧を辭する莫れ、酒を取つて四鄰を會す。

仙人殊恍惚。未若醉中真。
仙人殊に恍惚、未だ醉中の真なるに若かず。

【字解】(一) 長繩難繫日 傅玄の詩に歲暮景邁羣光絕、安得長繩繫白日とあるに本づく。(二) 黄金高北斗 唐書の尉遲敬徳傳に「王曰く、公の心、山岳の如く然り、金を積んで斗に至ると雖も、豈に之を移さむや」とあり、又唐人の詩に身後堆金拄北斗とある、多分當時の俚語だらうと思はれる。(三) 石火 劉勰の新論に「人の短生、猶ほ石火炯然以て過ぐるが如し」とあり、法苑珠林に石火無恆燄、電光非久停とある。

【詩意】長い繩を以てするも、大空を渡る日を繋ぎ留めることは出来ず、日が往くと共に、年も移るので、古しへより、これを悲まぬものはない。もし黄金を積んで北斗より高からしめたならば、これを惜まずして、青春を買斷するが善い。石火は、ただ瞬間だけ輝くもので、さながら、世間の人の命と一様に果敢ないものである。一切の事は、すべて夢の如く、後來、われは、誰の身となるか。壺を提ぐれば、貧を辭するなく、どしどし酒を買つて来て、四鄰を會し、大に樂を縱にするが善い。仙人といつた處で、心恍惚として、取り留めもなく、人は醉中に於て、心意初めて真なるもので、その方が實に立ち勝つて居る。

【餘論】嚴滄浪は「即事の二句は、道人の識、達人の言、末句に云ふ、仙人殊恍惚、未若醉中真」と。白、ここに至つて、始めて悟り、一級を翻過し、轉じて醉郷に入る」といひ、蕭士贇は「この篇は、達生者の詩なり、古詩中、この體あり」といひ、乾隆御批には「後半、我誰身、鑄て奇句を爲す、巧理を累せず」とある。

清都綠玉樹。灼爍瑤臺春。
清都綠玉の樹、灼爍たり瑤臺の春。
攀花弄秀色。遠贈天仙人。
花を攀ちて、秀色を弄し、遠く贈る天仙人。
香風送紫蘂。直到扶桑津。
香風、紫蘂を送り、直に到る扶桑の津。

恥掇^二世上豔^一。所貴心之珍。恥づらくは世上の豔を掇る、貴ぶところは心の珍。
相思傳^二一笑^一。聊欲示^二情親^一。相思、一笑を傳ふ、聊か情親に示さむと欲す。

【字解】【一】清都 楚辭に造旬始而觀^二清都^一とあつて、朱子の註に「清都は、列子以爲へらく、帝の居るところなり」とある。

【二】灼爍 艷色、光彩の貌。【三】瑤臺 拾遺記に「崑崙山傍に瑤臺十二あり、各廣さ千歩、皆五色、玉を臺基となす」とある。

【四】天仙 抱朴子に「上士は、形を擧げて虚に昇る、これを天仙といふ」とある。【五】扶桑津 木華の海賦に翔陽逸駭於扶桑之津とあつて、呂延濟の註に「扶桑の津は日出の處」とある。

【詩意】天帝の居ます清都には、緑玉の樹が叢生し、光彩灼然として、瑤臺の春を繪き出して居る。

われは此に人世に在つて、花を攀ちて秀色を弄し、これを折つて来て、はるばる、歩虚の天仙に贈らうと思つた。すると、香風が紫薬を吹き飛ばして、遙に日の出るといふ扶桑の津頭に至つた。恥づるところは、仙界ならぬ斯世の花を掇つて、わざわざ人に贈り、如何にも、愚な事であつたが、ただ珍らしいと思へばこそ、かくしたので、その心を斟酌して貰ひたい。かくて、相思の餘、一笑を爲し、聊か情親に示さうと思ふので、すべての贈遺は、其物の價値に關せず、専ら其心に在るのである。

【餘論】これは、野人獻芹の誠といふ様な意味で、物よりも、唯だ其心を酌み取つて呉れといふ意を詠出したのである。

今日風日好。明日恐不如。

今日風日好し、明日恐らくは如かず。

春風笑於人。何乃愁自居。

春風、人よりも笑ふ、何ぞ乃ち愁へて自ら居る。

吹簫舞彩鳳。酌醴餽神魚。

簫を吹いて、彩鳳を舞ひ、醴を酌んで、神魚を餽にす。

千金買一醉。取樂不求餘。

千金、一酔を買ひ、樂を取つて、餘を求めず。

達士遺天地。東門有二疏。

達士は天地を遺る、東門に二疏あり。

愚夫同瓦石。有才知卷舒。

愚夫は瓦石に同じ、才あれば卷舒を知る。

無事坐悲苦。塊然涸轍鮒。

無事にして坐に悲苦、塊然たり涸轍の鮒。

【字解】【一】吹簫、彩鳳 ともに蕭史の事、すでに前に見ゆ。【二】醴 一宿して熟するもの、即ち甘酒。【三】神魚 魯康

の詩に鸞觴酌醴、神鼎烹魚とあり、曹植の詩に玉尊盈桂酒、河伯獻神魚とある。【四】二疏 漢書に「疏廣、太傅たり、兄の子受、少傅たり、父子並に師傅たり、朝廷以て榮となす、在位五歳、廣、受到謂つて曰く、吾聞く、足るを知れば辱められず、止まるを知れば殆からず、功遂げ、身退くは、天の道なり、今仕宦して二千石に至る、宣成り、名立つ、此の如くして去らずんば、懼らくは後悔あらむ、豈に如かむや、父子相隨つて關を出で、故郷に歸老せむにはと。受、叩頭して教を受け、上疏して骸骨を乞ふ。上、これを許し、黄金二十斤を加賜し、皇太子、贈るに五十斤を以てす。公卿大夫故人邑子、祖道を設けて東都門外に供張す。送るもの車數百輛、辭訣して去る。道路觀るもの、皆曰く、賢なるかな二大夫と。廣、すでに郷里に歸り、家をして具を供し、酒食を設けしめ、族人故舊賓客を請うて、ともに相娛樂す」とある。【五】轍鮒 莊子の事を用ふ、前に見ゆ。

【詩意】今日は天氣が宜しいが、明日は、恐らくは、これほどではなく、或は風雨であるかも知れない。そこで、春風は人よりも笑ましがであるのに、如何なれば、愁に沈んで、自ら居るのか、この風日晴美の時には、十分に樂むが善い。そこで、簫を吹いて、彩鸞の舞をなさしめ、甘酒を酌み、神魚を膾にし、千金を擲つて、一醉を買ひ、樂を取る外、餘念もない。達士は、天地を遺れ、其意に任せて、優游自適するもので、かの東都門外から歸國した二疏の如きは、即ち其人である。これに反して、愚夫は瓦石に同じく、まことに詰らぬものであるし、才あれば、或は卷き、或は施すことだけは、知つてゐなければならぬ。しかし、予は毎に不遇であるが爲に、何も爲すことなくして、坐つた儘、悲んで苦み、たとへば、輒の鮒の塊然として、やがて涸死するやうなものである。

【餘論】蕭士贇は「この篇、亦た達生して、能く時と卷舒するもの、其れ太白の素志か」といつて居る。

運速天地閉。胡風結飛霜。
百草死冬月。六龍頽西荒。
太白出東方。彗星揚精光。

運速にして、天地閉ぢ、胡風、飛霜を結ぶ。
百草、冬月に死し、六龍、西荒に頽る。
太白は東方に出で、彗星は精光を揚ぐ。

鴛鴦非越鳥。何爲眷南翔。
惟昔鷹將犬。今爲侯與王。
得水成蛟龍。爭池奪鳳凰。
北斗不酌酒。南箕空簸揚。

鴛鴦は越鳥に非ず、何すれぞ南翔を眷する。
惟れ昔、鷹と犬と、今は侯と王となる。
水を得ては蛟龍を成し、池を争うて鳳凰を奪ふ。
北斗酒を酌まず、南箕空しく簸揚。

【字解】一、天地閉。周易に「天地閉ぢ、賢人隱る」とあり、月令に「孟冬の月、天氣上騰、地氣下降、天地通ぜず、閉塞して冬を成す」とある。二、六龍。天子の駕をいふ、前に見ゆ。三、太白。即ち金星、漢書に「太白西方に出で、其行を失へば、夷狄敗る、東方に出でて其行を失へば、中國敗る」とある。四、彗星。はうき星、宋書に「彗星は、謂はゆる掃星、本は星に類し、末は彗に類す。小なるものは數寸、長き或は天に竟り、見はるれば兵起り、大水あり、掃除を主り、舊を除き新を布く、五色あり、各五行本精の主るところに依る」とある。五、奪鳳凰。晉中興書に「荀勗、中書監に徙り、尙書令となる。人、これを賀す、乃ち恚を發して曰く、我が鳳凰池を奪ふ、卿、何ぞ我を賀するや」とある。六、北斗不酌酒。詩の小雅に「惟南有箕、不可三以簸揚、惟北有斗、不可三以挹酒漿」とあつて、孔穎達の正義に「言ふは、惟だ此天上、その南に箕星あり、以て米粟を簸揚すべからず、その北に斗星あり、以て其酒漿を斟酌すべからず」とある。

【詩意】節序推移の運は、極めて速に、天地通ぜずして閉塞し、世は今冬となり、北から吹く風は、飛霜を結び、まことに淋しく物すごい。これと同じく、安祿山が一たび亂を爲してより、中原の地は荒れはてて仕舞つた。百草が冬月に死せし如く、人民は、亂に遭うて、死亡相繼ぎ、天子は、西の方には蜀中に行幸された。太白星は、東方に出でて、中國敗亡の兆候、ありありと見え、彗星は、精光

を揚げ、今後の禍殃は、定めて甚しいことであらう。鴛鴦は、越地の鳥でもないのに、如何なれば、南を戀うて翔け廻つて居るか。われも、本と南人ではないのに、今しも、南方の地に居て奔走して居る。世は、刈菰と亂れ、それにつけ入つて、一寸した功名を立て、唯だ鷹犬の用を爲して、侯王となつたものもある。かの名將輩が、封土を得たるは、蛟龍の水を得たるに比すべく、幾多の宰相が十分に用ひられずして、官を罷めたのは、即ち我が鳳凰池を失つたといへると同じ遺憾であらう。北斗は、斗の名あれども、酒を酌むことが出来ず、南箕は、箕の名あれども、米穀を簸揚せしむることが出来ず、われは、世上に聊か名あれども、何も仕出來すこともなく、この儘に終るのは、いかにも無念の事である。

【餘論】蕭士贇の解に「按ずるに、この篇、當に是れ太白、永王璘に従ふ時、かつて、詩を作り、王を諷して勤王せしむれども、王、従はず、王の與に爲すあるに足らざるを知り、故に是詩を作るなり。運速天地閉は、明皇の晩年、賢人隠れて、羣小事を用ふるに喩ふるなり。胡風結三飛霜は、祿山の兵叛するに喩ふるなり。百草死三冬月は、人民の殺戮に遭ふに喩ふるなり。六龍顔三西荒は、明皇の西幸に喩ふるなり。太白出三東方、彗星揚三精光は、兵興るとき、舊を除き、新を布くに喩ふるなり。鴛鴦非三越鳥、何爲眷三南翔は、王、元と南人に非ず、何すれぞ、南方に眷眷たるやといふに喩ふるなり。惟昔鷹將三犬、今爲三侯與三王、得水成三蛟龍、爭三池奪三鳳凰は、行伍より起つて、能く功を立つるも

の、すでに高位を致すに喩ふるなり。今卒伍の徒能く功を立つるもの、尙ほ高位を致す、王、何すれぞ、眷眷然として、兵を南方に擁し、江上に翺翔し、勤王の擧を爲し、以て功名を立て爵位を取らざらむや。北斗不三酌酒、南箕空簸揚は、王、終に與に爲すあるに足らず、北斗の空しく斗の名あつて、以て酒漿を挹むべからず、南箕の空しく箕の名あつて、以て簸揚すべからず、爲すあるなきに喩ふるなり。言盡くるあつて、意窮まりなし、豈に後人詩を作り、明かに譏り、顯に刺るもの、同日にして語るべけむや」とあつて、専ら永王璘を諷する爲に作つたといつて居る。しかし、王琦は之を駁し「運速天地閉は、國家否運の至るに喩ふ。四運將に終らむとするの時、天地の氣、亦た之が爲に閉塞して通せざるが如し。胡風結三飛霜は、祿山兵を起して害を爲すに喩ふ、百草死三冬月は、人民亂に遭うて死するに喩ふ。六龍顔三西荒は、明皇の、西、蜀中に幸するに喩ふ。太白出三東方、彗星揚三精光は、仰いで、天象を觀れば、昭昭として察すべく、災害何の日にか除くべきを知らざるを謂ふ。鴛鴦非三越鳥、何爲眷三南翔は、己、南人に非ず、しかも、南に向つて、奔走するを謂ふ。疑ふらくは太白、この時に於て、婦と偕に同行す、故に鴛鴦を用ひて喩となす。この詩、其れ夜郎に流さるるの前に作るか。惟昔鷹將三犬、今爲三侯與三王は、出身微劣、鷹犬の用を效すに過ぎず、しかも、能く尺寸の功を得、以て身を高位に致すもの多きを謂ふなり。得水成三蛟龍は、將帥、郭子儀、李光弼の一流を謂ふ。爭三池奪三鳳凰は、宰相、房琯、張鎰一流を謂ふ。北斗不三酌酒、南箕空簸揚、己は人の薦達するなく、

彼の天星の中、北斗は斗の名ありと雖も、しかも、之を用ひて以て酒を酌むべからず、南箕は箕の名ありと雖も、しかも、之を用ひて以て米穀を簸揚すべからざるが如きを傷む。徒に高才あるも、人の用を爲さず、その自ら悲むの意深し。蕭氏、以へらく、太白、永王璘に従ふ時、詩を作つて、その勤王を諷し、しかも、王、従はず、故に是詩を作ると爲すものは、非なり」といひ、すべてを李白の一身に引き當てたので、この方が、はるかに、沈痛緊切であつて、予は、斷じて、之に左袒する。但し、安史亂後の光景を傷んだといふ一邊に至りては、もとより、同一である。

世路今太行。廻車竟何託。

世路、今は太行、車を廻して、竟に何にか託する。

萬物皆凋枯。遂無少可樂。

萬物、皆凋枯、遂に少しも樂むべきなし。

曠野多白骨。幽魂共銷鑠。

曠野、白骨多く、幽魂、共に銷鑠。

榮貴當及時。春華宜照灼。

榮貴、當に時に及ぶべし、春華、宜しく照灼すべし。

人非崑山玉。安得長璀璨。

人は、崑山の玉に非ず、安んぞ長く璀璨たるを得む。

身沒期不朽。榮名在麟閣。

身、没して、不朽を期す、榮名、麟閣に在り。

【字解】(一) 太行 劉孝標の廣絶交論に世路險巇、一至於此、太行孟門、豈云三絶絶となつて、太行の山路は、古しへより最も

險峻である。なほ其詳は前に見ゆ。【二】何託 陶潜の詩に萬族各有託とある。【三】白骨 魏の許昌碑表に白骨既交、輝於曠野とある。【四】春華 蘇武の詩に努力愛春華とあつて、李善の註に「春華は、少時に喻ふるなり」とある。【五】照灼 古讀曲歌に千葉紅芙蓉、照灼綠水邊とある。【六】崑山 韓詩外傳に「玉は、崑山より出づ」とある。【七】璀璨 璠は玉光、魯靈光殿賦に下崑崙以璀璨とある。【八】麟閣 漢の宣帝が功臣を麒麟閣に繪いた、その詳は前に見ゆ。

【詩意】世路は、今しも、太行の山の峻絶なるに比すべく、車、前まず、これを廻さむとし、さて何處に落ち付くであらうか。萬物は、決して常住ならず、いづれも、凋み枯れるもので、見て此に至れば、少しも樂むべき處が無い。廣い野邊には、白骨が多く散亂し、幽魂も、共に銷鑠して、心靈の滅といふのも、一向あてにはならない。されば、榮華富貴である内は、時に及んで行樂すべく、少年の頃は、春の花と一般、随分派手に遣るも善からう。崑崙に産する玉は、その質、貞固にして、いつまでも、璀璨として居るが、人生は、さういふ譯には行かず、盛なるも、唯だ一時の事である。もし身歿するも、不朽ならむと欲せば、一廉の大功を立てて榮名を得、そして、麒麟閣上に其形を繪かれるやうに成れば善いので、この外には、格別の名案もない。

【餘論】蕭士贇の説に「この篇は、乃ち世諦の同じく盡くるに歸するを熟識し、惟だ當に時に及んで功名を立て、以て不朽に傳ふべきのみ」とある。しかし、李白は、亦た之を反言したので、麟閣の榮名、必ずしも不朽で無いことは、先刻すでに承知して居るので、もとより之に拘泥してはならぬ。

月色不可掃。客愁不可道。

月色、掃ふべからず、客愁、道ふべからず。

玉露生秋衣。流螢飛百草。

玉露、秋衣に生じ、流螢、百草に飛ぶ。

日月終銷毀。天地同枯槁。

日月終に銷毀、天地同じく枯槁。

蟪蛄啼青松。安見此樹老。

蟪蛄は青松に啼く、安んぞ此樹の老ゆるを見む。

金丹寧誤俗。昧者難精討。

金丹、むしろ俗を誤らむや、昧者は精討し難し。

爾非千歲翁。多恨去世早。

爾は千歳の翁に非ず、多く世を去るの早きを恨む。

飲酒入玉壺。藏身以爲寶。

酒を飲んで玉壺に入り、身を藏し以て寶と爲す。

【字解】【一】掃、掃ひ退ける。【二】玉露、歲華紀麗に「秋露白し、故に玉露といふ」とある。【三】日月終銷毀、楚辭に白日
晚晚其將入兮、明月銷鑠而滅毀とある。【四】蟪蛄、即ち寒蟬。【五】入玉壺、費長房、老翁が薬を賣り、市罷れば、輒ち跳つて壺
中に入るを見る、すでに前に見ゆ。

【詩意】月の色は、掃ふことが出来ず、客愁は譬ふるにも言葉ない程である。玉なす露は、秋衣の上
に生じ、流螢は、百草の上に亂れ飛んで居る。日月でさへも、終には銷えて無くなるし、天地も亦た
枯れはてて仕舞ふ。蟪蛄は、青松に絶つて啼いて居るが、春秋を知らぬ短い命では、とても、松の木
の千歳に老ゆるを見ることは出来ない。しかし、その松とても、いづれは枯死するので、して見れば、

壽命の修短は、免れぬにしても、決して、不死といふものは無い筈である。金丹は、いかで俗を誤る
べき、唯だ心の味い者は、玄妙の理を精しく討究することが出来ないから、仕方がないので、世に學
ぶべきものは、仙道ばかり、汝等は、千歳の翁に非ず、ともすれば、世を去ることの早きを恨むであ
らう。かの仙人は、酒を飲んで仕舞ふと、自ら身を跳らして壺中に匿れ、そこに亦た別世界が儼然と
して存して居たといふが、かくてこそ、仙道の有り難いことが、知れるであらう。

【餘論】劉須溪は「その初、未だ此意あらず、肆言、ここに及ぶ、達の又達」といひ、嚴滄浪は「一
結、費長房の事を用ひ、乃ち渾冥に入る」といひ、蕭士贇は「太白、素志、仙を學ぶ、この詩、是れ
古詩中、服食求神仙、多爲藥所誤の意を反す、猶ほ反騷のごとし」といひ、乾隆御批には「起句、
妙悟天然、思索に由らずして得」とある。

生者爲過客。死者爲歸人。

生者は過客たり、死者は歸人たり。

天地一逆旅。同悲萬古塵。

天地は一逆旅、同じく悲む萬古の塵。

月兔空擣藥。扶桑已成薪。

月兔、空しく藥を擣き、扶桑すでに薪と成る。

白骨寂無言。青松豈知春。

白骨、寂として言なく、青松豈に春を知らむや。

前後更嘆息。浮榮何足珍。

前後更に嘆息、浮榮何ぞ珍とするに足らむ。

【字解】(一) 死者爲歸人。列子に「古しへ、死人を謂うて歸人と爲す。夫れ死人を言うて歸人と爲せば、生人は行人なり」とある。(二) 逆旅。逆は迎へる、旅客を迎へる處、即ち旅館。(三) 月兔。傅玄の擬天問に、月中何有、白兔持藥とある。(四) 扶桑。楚辭章句に「東方に扶桑の木あり、その高さ萬仞、日、下つて暘谷に浴し、上つてその扶桑を拂ひ、ここに始めて登つて、四方を照耀す」とある。

【詩意】生きて居る内は、旅人のやうなものであるし、死んで仕舞へば、歸人と一般、今度は愈よ落ち付くのである。天地の大なるも、たとへば、旅籠屋の様なもので、人が終古の塵に歸するは、洵に悲むべきことの極みである。月中の兔は、藥を擣いて居るが、何の役にも立たず、扶桑の大木も、すでに薪と成つて仕舞つた。人も白骨に成つて仕舞へば、寂として、言葉なく、青松は、千歳を経るといふものから、決して花さくことはない。ここに、わが生の前後を顧れば、更に歎息を増すばかりで、浮べる榮華は、決して、珍とするに足らぬものである。

【餘論】起首四句は、李白の春夜桃李園に會するの序と同一趣旨であつて、月兔空擣藥の四句は、奇語人を驚かすと稱すべく、全體に於て、莊子の言といつて宜しい。この詩を玩味すれば、愈よ以て、前の榮貴當及時的の仕の正言に非ざるを知るべきである。

仙人騎彩鳳。昨下閩風岑。

仙人、彩鳳に騎し、昨、閩風の岑を下る。

海水三清淺。桃源一見尋。

海水、三たび清淺、桃源、一たび尋ねらる。

遣我綠玉杯。兼之紫瓊琴。

我に綠玉の杯を遣り、之に兼ぬ紫瓊の琴。

杯以傾美酒。琴以閒素心。

杯は以て美酒を傾け、琴は以て素心を閒にす。

二物非世有。何論珠與金。

二物、世有に非ず、何ぞ論せむ珠と金と。

琴彈松風裏。杯勸天上月。

琴は松風の裏に彈じ、杯は天上の月に勸む。

風月長相知。世人何倏忽。

風月長く相知る、世人何ぞ倏忽たる。

【字解】

(一) 閩風。十洲紀に「崑崙山は三角、その一角、正北は干辰の輝、名づけて閩風の嶺といふ」とある。(二) 海水三清淺。神仙傳に「麻姑云ふ、接待以來、東海の三たび桑田となるを見る。さきに、蓬萊に到りしに、水、又往日よりも淺し」とある。

【詩意】

仙人は、彩鳳の背に跨り、昨日、崑崙の一角たる閩風の嶺に下つた。見たせば、海水は三たび淺くなり、仙界の風景も、決して、むかしの儘ではない。そこで一寸桃源を尋ねて、我に綠玉の杯と紫瓊の琴とを遣られた。杯は以て美酒を傾ぐべく、琴は以て本心を閒にすることが出来、二物、ともに、世間には滅多に無いもので、その價は、無限といふべく、決して、明珠や黄金などの相比す

べきものではない。かくて、松吹く風に向つて琴を弾じ、天上に輝く月に向つて杯を勧め、聊か自ら楽しんで居る。わが悠久の相知は、唯だ風月ばかり、世人は朝生暮死、まことに、果敢ないもので、決して長い交を結ぶことが出来ない。

【餘論】起首四句は、仙人が桃源に來り、仍つて、相逢ひしことを敘し、遺我綠玉杯の八句は、杯と琴とを交互に寫し、杯琴より風月を逗出し、風月長相知の二句は、收結となり、東坡が前赤壁賦に於て述べたところと、極めて相近いものである。

涉江弄秋水。愛此荷花鮮。

江を涉つて秋水を弄し、この荷花の鮮なるを愛す。

攀荷弄其珠。蕩漾不成圓。

荷を攀ちて、其珠を弄し、蕩漾、圓を成さず。

佳期綵雲重。欲贈隔遠天。

佳期、綵雲重り、贈らむと欲するも、遠天を隔つ。

相思無由見。悵望涼風前。

相思、見るに由なし、悵望す、涼風の前。

【字解】【一】其珠、蓮の葉の上に溜まつて居る露の珠。【二】蕩漾、水の動く貌。【三】佳期、楚辭に與佳期兮夕張とある。

【詩意】江を涉つて、秋水を弄せむとすれば、蓮の花が今を盛りと咲いて居て、まことに、愛すべきを覺えた。そこで、蓮の柄につかまつて、葉上なる露の珠を弄せむとすれば、蕩漾と頻りに動いて、

圓い珠と成つて居らぬ。われは、美人と再會の佳期を約束して置いたが、綵雲が重なり合つて、果して、おもふ様に運ぶかどうか分らない。今しも、この荷花を折つて、彼方に贈らうとするが、遠天を隔てて居て、相思へども見るに由なく、涼風の前立つて、悵然凝望するばかりである。

【餘論】蕭士贇は、「これ比興の詩なり、首兩句、賢者、君の爵祿を慕うて仕へむと欲するに喩ふるなり。三句四句、賢者わづかに位を得て、これを害するもの、すでに至るに喩ふるなり。綵雲重は、女謁譏夫の昌盛なるに喩ふるなり。欲贈隔遠天は、賢者、言を君に獻するところあらむと欲すれども、天を去ること遠くして、女謁譏夫の間隔するところとなるなり。相思無由見、悵望涼風前は、君を思ふと雖も、しかも、従つて君を見るなく、惟だ涼風の前に悵望し、以て吾が眷戀の意を寄するあるに喩ふるなり。涼風も亦た薄徳の形容なり、辭微にして意顯、怨んで誹らすといふべきなり」とある。一説に、この詩は、思婦、盛年にして、その夫遠遊、荷を攀ちて自ら傷む意たとあるが、極めて淺近にして、取るに足らぬものである。

去去復去去。辭君還憶君。

去去、復た去去、君に辭して、還た君を憶ふ。

漢水既殊流。楚山亦此分。

漢水既に流を殊にし、楚山、亦た此に分る。

人生難稱意。豈得長爲羣。

人生、意に稱ひ難し、豈に長く羣たるを得むや。

越三燕喜海日。燕鴻思朔雲。

越三燕、海日を喜び、燕鴻、朔雲を思ふ。

別久容華晚。琅玕不能飯。

別、久しくして、容華晚く、琅玕、飯する能はず。

日落知天昏。夢長覺道遠。

日落ちて、天の昏きを知り、夢長くして、道の遠きを覺ゆ。

望夫登高山。化石竟不返。

夫を望んで、高山に登り、石に化して竟に返らず。

【字解】(一) 去去復去去。古詩十九首の行行重行行に擬したのである。(二) 人生難稱意。鮑照の詩に人生不得常稱意とある。(三) 越燕喜海日。吳越春秋に「胡馬は北風を望んで立ち、越燕日に向つて照す、誰か、その近きところを受せずして、その思ふところを悲むか」とある。酉陽雜俎に「紫胸輕小なるものは是れ越燕」とあり、爾雅に「越燕は小にして聲多く、領下紫、門楣の上に巢ふ、これを紫燕といひ、亦た之を漢燕といふ」とある。(四) 琅玕。張衡の南都賦に珍產琅玕、充溢圓方とあつて、李周藩の註に「琅玕は、玉の名、飲食これに比するは美たる所以」とある。(五) 望夫。劉義慶の幽明錄に「武昌北山の上に望夫石あり、狀、人の立つが若し、古傳に云ふ、むかし貞婦あり、その夫、役に従ひ、遠く國難に赴くや、弱子を攜へて、この山に餓死し、立つて、其夫を望み、化して石となる、因つて、以て名となす」とある。

【詩意】去り去つて、復た去り去り、君に辭して旅路に上り、唯だ一人で、淋しき儘に、翻つて又、君を思つて居る。漢水は、本流から支流に移り、楚山も、亦た此で分歧し、路は愈よ遙にして、見るところの景色も、次第に移つて行く、人生、世に在るも、意に稱ふことは、極めて少く、どうして、長く羣を爲して一緒に居ることが出来やう。越南の燕は、海天の日の暖きを喜び、燕地の雁は、寒げ

なる朔雲を戀ふ。禽鳥すらも、此の如く、まして、人は其郷を思はぬものは無い。別れて居ること、すでに久しく、折角の容華も、いつしか衰へ、琅玕に比すべき美味があつても、食ふことが出来ない。日落ちては、天の暮るるを知り、夜夜の夢は長くして、道の遠きを覺える。むかし、ある女が其夫を望むが爲に、高山に上り、悵悵の餘、その儘、化して石となつたといふが、妾の恨の甚しきも、亦た其通りである。

【餘論】劉須溪は「その愁思を極むるに、語意終に健、古詩唐詩の異なる、此を以てし、而して、人を觀るも、亦た此を以てす。他人、太白の如くならざるもの、情事淺きのみ。その詩を十九の婦人といふ、白を知るものに非ず、亦た詩を知るものに非ず」といひ、蕭士贇は「この篇は、其れ太白國を去るの時作るところか。身は江海に在り、心は魏闕に居り、君を懷ひ、國を憂ふるの意、藹然として言辭の表に見はる。末四句の意、是れ之を嗟嘆す。白、時の昏亂に遭ひ、遠方に隔絶すと雖も、然れども、君を愛するの心、猶ほ石の堅きがごとくなり、辭嚴にして意婉、悲しいかな」といひ、唐仲言は「前篇は涉江采芙蓉に擬し、此は行行重行行に擬するなり、皆鮑謝中より來る、盡く十九首の風格に非ず」といひ、乾隆御批には、以上各首の總評として「漢代の五言、辭多く質直と雖も、然れども、十九首の類の如き、各、機杼を具へ、變化測られず、盡く作用なき者に非ざるなり、陸機江淹の擬古善し、論者謂ふ、猛虎を搏ち、生龍を捉ふるが如し、急に之と較べて、力暇あらず、誠に氣格

悉く敵すと爲す。白の諸作、體、古意に仿ふと雖も、乃ち自ら其才を運し、有らざるところなし。故に辭意、魏晉に入し、しかも、大致直に西京に媲美、正に必ずしも拘拘として、句比字擬、以て之を求めず、又その辭多く寄託あり、當に意を以て會すべく、正に必ずしも處處牽合、舊註云ふところの如くせざるなり」とある。

感興 八首

感興 八首

瑤姫天帝女。精彩化朝雲。

瑤姫、天帝の女、精彩、朝雲に化す。

宛轉入夢宵。無心向楚君。

宛轉、夢宵に入り、楚君に向ふに心なし。

錦衾抱秋月。綺席空蘭芬。

錦衾、秋月を抱き、綺席、空しく蘭芬。

茫味竟誰測。虛傳宋玉文。

茫味、竟に誰か測らむ、虚しく傳ふ宋玉の文。

【字解】一 瑤姫 襄陽耆舊傳に「赤帝の女、瑤姫未だ行かすして卒す、巫山の陽に葬る、故に巫山の女といふ」とある。二 朝雲、楚君 楚王が宋玉をして、神女を賦せしめしこと、前に見ゆ。三 錦衾 詩の國風に錦衾爛兮とある。四 綺席 江淹の詩に綺席生浮埃とある。

【題義】題して感興といふのは、感ずるに因つて、六義の一たる興の體で詩を作つたので、つまり、

古しへに託して自己の感懷を敘したのである。

【詩意】瑤姫は、元と天帝の女であつて、一たび此世に降つたが、いつしか仙去し、その精彩は、朝雲に化して、長しへに巫山の陽に留まつて居た。かくて、宛轉として、夜、楚王の夢に入りしものから、もとより、王に向つて心あるが爲ではない。瑤姫は、平生孤居し、錦衾を擁して秋月を抱き、綺席人なく、空しく蘭の香が残つて居るだけである。抑も神仙の事は、茫味にして、測り知るべくもあらず。かの宋玉の賦の如きは、文人が才に任かせて、出鱈目の事實を敷張したに過ぎざれば、それを信ずるのは大間違である。

【餘論】これは、巫山の神女が楚の襄王の夢に入り、且つ後に枕席を薦めたといふ俗説を駁したので、嚴滄浪は「直に掃語を作す」といひ、蕭士贇は「高唐神女の二賦は、宋玉の寓言、後人以て誠に是事ありと爲す、故に、その託辭たるを辯ずるなり」といつて居る。

洛浦有宓妃。飄飄雪爭飛。

洛浦に宓妃あり、飄飄として雪争ひ飛ぶ。

輕雲拂素月。了可見清輝。

輕雲、素月を拂ひ、了に清輝を見るべし。

解珮欲西去。含情詎相違。

珮を解いて、西に去らむと欲す、情を含んで詎ぞ相違

香塵動羅襪。綠水不沾衣。
 陳王徒作賦。神女豈同歸。
 好色傷大雅。多爲世所譏。

香塵、羅襪を動かし、綠水、衣を沾さず。
 陳王、徒に賦を作る、神女豈に歸を同じうせむや。
 好色、大雅を傷る、多く世に譏らる。

【字解】一 宓妃 楚辭の九嘆に迎宓妃於伊雒とあつて、王逸の註に「宓妃は神女、蓋し伊洛水の精なり」とあり、史記の索隱に「如淳曰く、宓妃は伏羲の女、洛水に溺死し、遂に洛水の神となる」とあり、曹植の洛神賦の序に「黃初三年、余、京師に朝し、還つて、洛川を濟る、古人言ふあり、斯水の神、名を宓妃といふ、宋玉が楚王に對へて神女を説くの事に感じ、遂に斯賦を作る」とあり、髣髴兮若輕雲之蔽月、飄飄兮若流風之回雪、願誠信之先達、解三玉佩以要之、凌波微步、羅襪生塵は、賦中の語である。二 陳王 即ち曹植、植は太和六年を以て陳王に封ぜられた。

【詩意】洛水の神は、宓妃といひ、その態度の輕妙なることは、飄飄として、雪が争つて飛ぶが如くであるし、その風貌のあでやかなることは、輕雲が素月を拂ひ、はつきりと清い光を見ることが出来るかの様である。宓妃は、腰下の珮を解き、身を軽くして、西に去らむとし、情を含んで、人意に違はず、徐に水上を歩するとき、香塵は羅襪に動き、澄める水も、その衣を沾すことは無かつた。かの陳思王曹植は、洛神の賦を作つて、こんな事を言つて居るが、これも善い加減の事で、神女は、決して之と歸を同じうするものではない。元來、色を好むといふことは、大雅の正道を傷害し、多くは、世人に譏られるもので、これにつけても、後世の文人輩は、篤と注意せねばならぬ。

【餘論】この首も、前のと類似したもので、蕭士贇は「高唐神女の二賦は、乃ち宋玉の寓言、以て文章を成す。洛神の賦は、子建これに擬して作る。後世の人、癡子が人の夢を説くを聴くが如く、以て誠に其事ありと爲す。太白、その託詞なるを知りて、その大雅を傷くるを譏る、識見高遠なりといふべし」といつて居る。

裂素持作書。將寄萬里懷。
 眷眷待遠信。竟歲無人來。
 征鴻務隨陽。又不爲我棲。
 委之在深篋。蠹魚壞其題。
 何如投水中。流落他人開。
 不惜他人開。但恐生是非。

素を裂いて持して書を作り、將に萬里の懷を寄せむとす。
 眷眷として、遠信を待つも、竟歲、人の來るなし。
 征鴻、隨陽を務め、又我が爲に棲まず。
 これを委して、深篋に在り、蠹魚、その題を壞る。
 何ぞ如かむ水中に投じ、流落して他人の開くに。
 惜まず他人の開くを、但だ恐らくは是非を生せむ。

【字解】一 素 即ち縑、古へは手紙を書くに縑を用ひた。二 遠信 遠地よりの使者。三 征鴻 飛ぶ雁。四 隨陽 鄭玄の毛詩箋に「雁は陽に隨つて處る」とあり、孔安國の尙書傳に「隨陽の鳥、鴻雁の屬」とあり、孔穎達の正義に「日の行くや、夏至より漸く南し、冬至より漸く北す。鴻雁の屬、九月よりして南し、正月よりして北す。左思の蜀都賦に云ふところ、木落南翔、

氷泮北徂とは、是れなり。日は陽なり、この鳥、南北して進退す、隨陽の鳥、故に陽鳥と稱す」とある。【五】其題。王琦の解に「古人、書籤を謂うて題と爲す。傳に云ふところ、隋唐の藏書、皆金題玉躡とは、是れなり。ここに云ふところの題とは、書札面上手筆封題の處」とある。

【詩意】 緘を引き裂いて、手紙を書き、萬里の遠人を懷ふ我が情懷を寄せやうとした。今まで、眷眷として、もう遠方からの使が來さうなものだといつて待つて居た處が、年の終るまで、使の者は來なかつたから、折角書いた手紙を託して遣る人がない。むかしから雁に玉章を言づけるといふことがあるが、空飛ぶ雁は、陽氣に隨ふことばかりを務め、又わが爲に、ちつと留まつて呉れぬから、これも仕方がない。そこで、これを深い箱の中に藏つて置いた處が、やがて、月日に移り、その封題の處を蟲が食つて仕舞つたので、これでは、如何に便宜があつた處で、この儘、發信することは出來ない。されば、いつその事、水中に投げ込んで他人の間に流落した處で、かまはない。もとより、他人が開いて見ることを惜む譯ではないが、中には、さまざまの事が書いてあるから、ひよつと間違つて、物議の種となつて、是非を生ずれば、まことに困るので、仕方がないから、矢張、元の通りに篋中に入れて置く外はあるまい。

【餘論】 折角手紙を書いても、發信する便が無いといふので、まことに、傷情の至といふべく、結末四句は、側面より筆を著けて、愈よ面白い。嚴滄浪は「雙魚尺素より生出し、許の如く變化し、情詞

古に逼る」といひ、乾隆御批には「情意纏綿」とある。

芙蓉嬌綠波。桃李誇白日。

芙蓉、綠波に嬌たり、桃李、白日に誇る。

偶蒙春風榮。生此豔陽質。

偶ま春風の榮を蒙り、この豔陽の質を生ず。

豈無佳人色。但恐花不實。

豈に佳人の色なからむや、但だ恐らくは花の實らざるを。

宛轉龍火飛。零落互相失。

宛轉として龍火飛び、零落互に相失ふ。

詎知凌寒松。千載長守一。

詎ぞ知らむや凌寒の松、千載長く一を守る。

【字解】 一守一 その常を變ぜざること。

【餘論】 蕭士贇は「按ずるに、この篇、すでに古詩の四十七首に見ゆ、必ず是れ當時傳寫の誤、詩を編するもの、別つ能はず、しばらく、此卷に存す、觀者試に首句を以て比竝して論ずれば、美惡顯然、識者自ら之を見む、註、すでに前に見ゆ、復た重出せず」とある。今之を略説すると、彼には起首を桃花開東園、含笑誇白日に作り、結を詎知南山松、獨立自蕭瑟に作つてあるだけで、その他は、一字の差異もない。

十五游神仙。仙游未曾歇。
吹笙坐松風。汎瑟窺海月。
西山玉童子。使我鍊金骨。
欲逐黃鶴飛。相呼向蓬闕。

十五、神仙に遊ぶ、仙游未だ曾て歇まず。
笙を吹いて松風に坐し、瑟を汎べて海月を窺ふ。
西山の玉童子、われをして金骨を鍊らしむ。
黄鶴を逐うて飛び、相呼んで蓬闕に向はむと欲す。

【字解】【一】汎瑟 江淹の詩に汎瑟臥遙帷とあつて、張銑の註に「汎瑟とは、瑟を撫するなり」とある。【二】西山玉童子 魏の文帝の詩に西山一何高、高高殊無極、上有三兩仙童、不飲亦不食とある。【三】鍊金骨 靈寶經に「骨を鍊つて金となす」とある。

【詩意】われ年十五にして、神仙の道を學び、仙游を事として、未だ嘗て止んだことはない。笙を吹いては松風に吟じ、瑟を撫しては、海月の上るを候し、全く浮世と隔離して居た。すると、西山に住む仙童が、我に教へ、骨を鍊り上げて金と爲さしめたから、この上は、黄鶴を逐うて飛び、相呼んで蓬萊の宮闕に向はうと思つて居る。

【餘論】蕭士贇は「これ比興の詩、以て賢者相招き、以て祿仕を求むるものに喩ふ」といつて居るが、必ずしも之に拘泥するに及ばぬ。

西國有美女。結樓青雲端。

西國に美女あり、樓を結ぶ青雲の端。

蛾眉豔曉月。一笑傾城歡。

蛾眉、曉月よりも豔に、一笑すれば城を傾けて歡ぶ。

高節不可奪。爛心如凝丹。

高節、奪ふべからず、爛心、凝丹の如し。

常恐彩色晚。不爲人所觀。

常に恐る彩色晚く、人の觀るところと爲らざるを。

安得配君子。共乘雙飛鸞。

安んぞ得む、君子に配し、ともに乗ず雙飛鸞。

【字解】【一】豔曉月 曉の殘月より豔なりといふ義。【二】高節 古詩に君亮執高節とある。【三】爛心如凝丹 晉書に「張華曰く、臣は先帝の老臣、中心丹の如し」とある。

【餘論】王琦は「按ずるに、この篇、古詩の二十七首と互に同異あり、想ふに亦是れ其初稿、詩を編するもの、審にせず、遂に重ねて此に列するのみ。註、すでに前に見ゆるもの、復た重出せず」とある。今之を略説すると、彼には起句を燕趙有秀色に作り、高節不可奪の四句を常恐碧草晚、坐泣秋風寒、纖手怨玉琴、清晨起長歎につつてあつて、その他は、一二字の差異である。

竭來荆山客。誰爲珉玉分。
良寶絶見棄。虚持三獻君。
直木忌先伐。芬蘭哀自焚。

竭來、荆山の客、誰か珉玉の分を爲す。
良寶絶えて棄てらる、虚しく持して、三たび君に獻す。
直木は先つて伐らるるを忌み、芬蘭は自ら焚かるるを哀む。

盈滿天所損。沈冥道所羣。
 盈滿は天の損するところ、沈冥は道の羣するところ。
 東海有碧水。西山多白雲。
 東海に碧水あり、西山に白雲多し。
 魯連及夷齊。可以躡清芬。
 魯連と夷齊と、以て清芬を躡むべし。

【字解】【一】 場來 前に懷友人岑倫の詩の處で解釋して置いた、輕い意味の時には、ここにといふ位のこと。【二】 珉玉分 説文に「珉は石の美なるもの」とある、鮑照の詩に涇渭不可雜、珉玉當早分とある。

【餘論】 蕭士贇は「この篇は、古詩の三十六首と但た數語の異なるのみ、是れ亦た當時初本傳寫の殊なる、詩を編するもの棄つるに忍びず、兩つながら之を存するのみ」といつてゐる。註、すでに前に見ゆるものは、復た重出せず。今之を略説すると、彼には起首を把玉入楚國、見疑古所聞に作り、西山多白雲を西闕乘紫雲に作り、魯連及夷齊を魯連及柱史に作つてある。

嘉穀隱豐草。草深苗且稀。
 嘉穀、豐草に隠れ、草深くして苗且らく稀なり。
 農夫既不異。孤穗將安歸。
 農夫、すでに異ならず、孤穗將に安くにか歸せむとする。
 常恐委疇隴。忽與秋蓬飛。
 常に恐る疇隴に委し、忽ち秋蓬と飛ぶを。
 烏得薦宗廟。爲君生光輝。
 烏んぞ得む、宗廟に薦め、君の爲に光輝を生ずるを。

【字解】【一】 嘉穀 書の呂刑に「嘉穀を農殖す」とあり、説文に「禾は嘉穀なり、二月始めて生じ、八月にして熟す、時の中を得たり、故に之を禾と謂ふ」とある。【二】 豐草 詩の大雅に芾厥豐草とある。【三】 草深苗且稀 陶潛の詩に草盛豆苗稀とある。【四】 農夫既不異 曹植の詩に黍稷委疇隴、農夫安所獲とある。

【詩意】 稻を植ゑた後、折角の嘉穀は、勢の善い雜草の中に隠れて仕舞ひ、草は深くして、苗は、しばらく稀に成つて仕舞つた。しかし、農夫は、嘉穀が雜草と異なつて居る點を見分けもせず、嘉穀は、折角穂を出しても、その儘に棄て置かれ、格別保護されもしない。かくては、疇隴に委し、やがて枯死して、秋蓬と共に飛び去るといふ心配がある。されば、どうにかして、この嘉穀を宗廟に薦め、君の爲に光輝を生ずる様に致したいものである。

【餘論】 蕭士贇は「この篇は、比興の詩、時賢の引類拔萃、以て國用を爲す能はざるを刺るか。嘉穀隱豐草、草深苗且稀、賢人野に在つて、常人の中に混するに喩ふ。農夫既不異、孤穗將安歸、農夫、穀の草に在るを見て、これを別異せず、猶ほ賢者、賢の野に在るを見て、これを薦引せざるがごときなり。常恐委疇隴、忽與秋蓬飛、在野の賢、唯だ老の將に至らむとし、草木と俱に腐するに喩ふるなり。烏得薦宗廟、爲君生光輝、在野の賢、在位の賢の引いて之を進め、以て朝廷に羽儀たらむことを冀ふなり。嗟乎、士、才を懷いて遇はず、千載これを讀むも、猶ほ感激あり」といつて居る。それから、唐宋詩醇には八首の中、裂素持作書の一首と、この末首とだけを選録し「前篇は情意纏綿、次

篇は比興深厚、辭旨醇正、直に漢人に逼る」といふ評を下して居る。

寓言 三首

寓言 三首

周公負斧戾。成王何夔夔。

周公、斧戾を負ひ、成王何ぞ夔夔たる。

武王昔不豫。剪爪投河湄。

武王、むかし不豫、爪を剪つて河の湄に投ず。

賢聖遇讒慝。不免人君疑。

賢聖、讒慝に遇ひ、人君の疑を免れず。

天風拔大木。禾黍咸傷萎。

天風、大木を抜き、禾黍、咸な傷萎す。

管蔡扇蒼蠅。公賦鴟鴞詩。

管蔡、蒼蠅を扇り、公は賦す鴟鴞の詩。

金滕若不啓。忠信證明之。

金滕、もし啓かすんば、忠信、誰か之を明かにせむ。

【字解】一 周公負斧戾 逸周書に「周公政を攝し、天下大に治まるや、乃ち方國諸侯を宗周に會し、大に諸侯を明堂の位、天子の位に朝し、斧戾を負ひ、南面して立つ」とある。負ふとは、これに背にする事。斧戾、一に斧依に作り、斧文の屏風で、それを戸牖の間に置き、周公が南面して其前に立ち、即ち天子の代理となつたのである。二 夔夔 悚懼の貌。三 武王昔不豫 尙書に「すでに、商に克つ、三年、王、疾あり、弗豫。二公曰く、我其れ王の爲に稔トせむ。周公曰く、未だ以て我が先王公を感へしむべからず」と。乃ち自ら以て功を爲し、三境同塚を爲し、壇を南方に爲り、北面して周公立ち、壁を植て、珪を乘り、乃ち太王・王

季・文王に告げ、公、歸つて冊を金滕の匱中に入る、王、翼日乃ち瘳」とある。四 剪爪 史記の蒙恬列傳に「成王病あつて、甚だ殆きに及び、周公且、自ら其爪を剪り、以て河に沈む」とある。五 管蔡、鴟鴞 尙書に「武王、すでに喪す、管叔及び其羣弟、國に流言して曰く、公、將に孺子に利あらざらむとす」と。周公、東に居ること三年。公、乃ち詩を爲り、以て王に貽り、名づけて鴟鴞といふ。秋、大に熟し、未だ穫らざるに、天大雷電、以て風ふき、禾盡く偃し、大木斯に抜く。王、金滕の書を啓いて、周公の作るところを得、書を執つて泣き、因つて郊に出づれば、天乃ち雨ふつて風を反し、禾は盡く起ち、歳は大に熟す」とある。

【題義】 寓言とは、何か託するところがあつて作つたので、その事實を表面より明言せず、他の事を借りて云つたのである。この題は三首あるが、いづれも、作者が身世の感を暗に述べたものと見える。

【詩意】 むかし、周公が政を攝した時、成王は、猶ほ幼弱であつたから、自ら斧戾を背にして立ち、天下の諸侯を明堂に朝せしめ、成王は悚懼して居たに過ぎなかつた。これより先、武王が不豫であつた時、周公は、その平癒を祈るが爲に、自ら爪を剪つて、河岸に投じたといふこともあつた位、一身を以て國家の難に代らうとした、その決心の程は、今古稀に見るところである。周公は、かくの如く賢者であり、聖人であるに拘はらず、羣小から猜まれて、讒慝に遇ひ、おまけに、成王は、人君として、なほ癡騃たるを免れず、一時、周公を疎外したものだから、天風俄に起つて、大木を抜き、折角熟しかかつた稲も、皆偃して凋んで仕舞つた。それは、管叔蔡叔の二人が、蒼蠅の如き小人を煽動したからで、周公が鴟鴞の詩を作つて、感遇の意を寄せられたのも、尤も至極な事である。それか

ら、成王は金藤の篋を開いて、周公の書いたものを發見し、その忠信を感せられたから善かつたが、もし金藤を啓かなければ、周公は、いつまでも、冤を負うて、折角の忠信を誰も明かにして呉れず、終古の恨を貽したに相違ない。

【餘論】蕭士贇は「これ讒を懼るる詩なり、金藤の事を鑿括し、以て其意を申ぶ」とある。それから、周公が爪を剪つたのは、字解の項に見ゆる如く、史記の蒙恬列傳には、成王の病を禱るが爲にしたとあり、同じ事が魯世家に見えて居るのに、李白は、武王昔不豫といつて、これを武王の病に繋けたのは、諛記の失でもあらうと思はれる。王琦は「太白の此詩、蓋し二事を合して之を互言す」といつたが、全體、この詩は、周公攝政の時に限ると見て、武王の事などは出て來ない方が善いので、折角の辯護も、格別、效果ありとは思はれない。

搖裔雙綵鳳。婉孌三青禽。
往還瑤臺裏。鳴舞玉山岑。
以歡秦娥意。復得王母心。
區區精衛鳥。銜木空哀吟。

【字解】一、搖裔 盧思道の詩に丰茸鷄樹密、遙裔鶴煙稠とあつて、はるかにかけき貌。二、婉孌 毛萇詩傳に少好の貌とある。三、三青禽 青禽は即ち青鳥、西王母の使者たること、山海經に見ゆ。四、瑤臺、玉山 皆西王母の居るところで、前に見ゆ。江淹の詩に、願乘青鳥翼、徑出玉山岑とある。五、秦娥 秦の穆公の女弄玉、前に見ゆ。六、精衛 木石を銜んで海を填めむとせしこと、亦た前に見ゆ。

【詩意】雙雙として相伴へる綵鳳は、はるかに氣高きやうであるし、三青鳥は、まことに婉孌として美しい。この綵鳳・青禽は、さも得意らしく、瑤臺の裏に往還し、玉山の岑に於て鳴いたり舞つたりして居る。かくて、秦王の女たる弄玉の意を喜ばしめ、又王母の御氣に入りである。しかし、精衛の鳥は、區區として、相變らず、木石を銜んで東海を埋めむとし、いつまで立つても、休むことなく、せつせと働きつつ、哀吟して居るのは、まことに氣の毒で、兩者の比較は、一しほ顯著である。

【餘論】蕭士贇は「これは、當時、宮掖に出入し、媚を后妃公主に取り、以て爵位を求むるものを刺る。綵鳳・青禽は、以て倭幸に比し、瑤臺・玉山は、以て宮掖に比し、秦娥は、以て公主に比し、王母は、以て后妃に比し、精衛木を銜むは、以て小臣が區區報國の心を懷き、忠を盡し、誠を竭して、知られざるに比す、その意、微にして顯なり」といつて居る。

長安春色歸。先入青門道。
長安春色歸り、先づ入る青門の道。

綠楊不自持。從風欲傾倒。
 綠楊、自ら持せず、風に從つて傾倒せむと欲す。
 海燕還秦宮。雙飛入簾櫳。
 海燕、秦宮に還り、雙飛して簾櫳に入る。
 相思不相見。託夢遼城東。
 相思へども相見えず、夢を託す遼城の東。

【字解】【一】青門 雍錄に「青門は、漢の都城に在つて、東面南來の第一門たり、即ち邵平瓜を種うるの地なり」とある。【二】簾櫳 謝惠連の詩に「升月照簾櫳」とあり、説文に「櫳は房室の疏なり」とある、櫳は即ち窓。【三】遼城 王琦の解に「秦、遼西遼東の二郡を置く、遼水の西東に在るに因つて名づく。唐時に在つて、遼西は、柳城郡及び北平郡の東境たり。遼東は、安東都護府の地たり。外、奚契丹・室韋・靺鞨・諸夷と相接す、皆邊城なり、兵あり、之を成る」とある。

【詩意】 長安に春景色の歸り來るときには、先づ東面の第一たる青門の道から這入つて來る。綠に煙れる柳は、ちつと自ら支持することが出來ず、風のまにまに傾き倒れむとして居る。操を守る心の確でない女は、丁度こんな様に、引く人だにあらば、誰にでも靡くが、妾は、斷じて、そんな眞似はしない。北海の上に居る燕は、春を追うて長安の故宮に歸り、雌雄雙飛して、簾や窓の間に飛び入る、その睦まじくして、しばしも離れぬ處は、まことに羨ましく、妾が孤栖年を度るを思へば、この身は、鳥にだも及ばない。わが夫は、從軍して、遼東に居るので、いくら相思つた處で、相見るに由なく、唯だ夢に託して、魂が其地に飛び行くより外はない。

【餘論】 蕭士贊は「これ閨思の詩なり、良人軍に從ひ、滔滔として歸らず、時に感じ、物に觸れて、

人を懷ふの思を起すものか。綠楊海燕は、以て興を起すなり。婉然たる國風の體、謂はゆる詩に聖なるものとは此なるかな」といつて居る。

秋夕旅懷

秋夕旅懷

涼風度秋海。吹我鄉思飛。
 涼風、秋海を度り、我が郷思を吹いて飛ぶ。
 連山去無際。流水何時歸。
 連山、去つて際なく、流水、何の時か歸らむ。
 目極浮雲色。心斷明月暉。
 目は極む浮雲の色、心は斷ゆ明月の暉。
 芳草歇柔豔。白露催寒衣。
 芳草、柔豔を歇め、白露、寒衣を催す。
 夢長銀漢落。覺罷天星稀。
 夢は長くして銀漢落ち、覺め罷んで天星稀なり。
 含悲想舊國。泣下誰能揮。
 悲を含んで舊國を想ふ、泣下つて誰か能く揮はむ。

【字解】【一】明月暉 暉は光彩。【二】歇柔豔 柔豔なるものが凋んで枯れる。【三】催寒衣 冬の厚い衣を著ればならぬ様である。【四】舊國 故郷に同じ。【五】誰能揮 涙を揮つて去ることが出來ぬ、愁の斷えざることを云ふ。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 涼風瑟瑟として、秋の海を度り、わが郷思を吹いて飛ばしめ、日夕懷土の念に堪へぬ。連山

は、ここを去つて、杳杳として際なく、流水は滔滔として、一たび逝けば、復た歸らない。見わたすかぎり、天は浮雲に鎖されて、ほの暗く、夜になれば、空が晴れて、明月光を揚げ、覺えず心腸を断たしめる。芳草は、秋に遇うて柔艷の色を失ひ、黄に枯れ萎み、白露は天に満ち、人をして冬著の用意を爲さしめる。夜の長きままに、夢を見つづけ、やがて、銀漢の低く西に落つる頃となり、わづかに眠さむれば、夜は明けかかつて、星も稀である。かくて、悲を含んで故郷を思ひ、涙は留めどなく流れ、どうしても之を揮ひ落すことが出来ない。

【餘論】蕭士贇は「この詩は、太白竄逐の後に作れるか。身、遐方に在り、心、舊國を懷ふ、詞意悲婉、哀いかな」といひ、乾隆御批には「晉宋間、この清機あり、齊梁間、この逸氣なし」とある。

感遇 四首

感遇 四首

吾愛王子晉。得道伊洛濱。
吾は愛す王子晉、道を得たり伊洛の濱。
金骨既不毀。玉顏長自春。
金骨、すでに毀れず、玉顏長く自ら春。
可憐浮丘公。猗靡與情親。
憐むべし浮丘公、猗靡、情と親む。
舉手白日閒。分明謝時人。
手を舉げて、白日閒なり、分明、時人に謝す。

二仙去已遠。夢想空殷勤。
二仙去つて已に遠し、夢想空しく殷勤。

【字解】一 王子晉、浮丘公 ともに鳳笙篇の條に詳しく見えて居る。二 猗靡 子虛賦に扶輿猗靡とあつて、張銑註に「相隨ふ貌」とある。

【題義】感遇の遇は境遇で、この詩も、矢張、身世の感を敍したのである。

【詩意】王子晉は、まことに慕はしい人であつて、伊洛二水の濱に於て、仙道を修行し、骨は化して金となり、決して消滅することなく、玉顏は長しへに若若しい。ここに、浮丘公は、相隨つて之と親み、やがて、一緒に昇仙せむとするに際し、白日の中に、手を舉げて悠悠と時人に暇乞をなし、その儘、天に上つて仕舞つた。二仙、すでに去つて、その跡、復た尋ぬべからず、唯だ夢想の中に、慇懃相隨ふのみである。

【餘論】蕭士贇は「この詩、蓋し懷ふところあり、二仙に託して言ふなり」といつたが、いかさま、單に二仙の事を詠じたのでは無いらしい。

可歎東籬菊。莖疎葉且微。
歎すべし東籬の菊、莖は疎にして葉且らく微なり。
雖言異蘭蕙。亦自有芳菲。
蘭蕙に異なりと言ふと雖も、亦た自ら芳菲あり。
未泛盈樽酒。徒沾清露輝。
未だ盈樽の酒を泛べず、徒に清露の輝に沾ふ。

當榮君不採。飄落欲何依。榮に當つて君採らず、飄落、何にか依らむと欲する。

【字解】一 當榮 菊の花の盛なる時に當つてといふ義。二 君不採 採は花を摘む、陶潛の詩に採菊東籬下とある。

【詩意】東籬に立てる菊は、莖も疎らで、葉も少ししかなく、大分瘦せ衰へて居るが、今しも花が咲いて居て、蘭蕙に異なれども、亦た一種の芳香があつて、極めて愛すべきものである。しかし、これを摘んで樽中の酒にも泛べず、徒に輝ける白露に沾うて、誰も顧る人もない。この花の盛な時分に採らなければ、やがて、飄落して、どうすることも出来ぬやうに成るであらう。

【餘論】蕭士贇は「この篇、賢者、朝廷養育の恩を蒙り、才あるも用ひられず、空しく此恩を受くるに喩ふるなり、用ふべきの時に當つて、君、これを採らず、唯だ飄零老死あるのみ、將た安くにか依るところぞや」といつて居る。

昔余聞姮娥。竊藥駐雲髮。むかし、余聞く、姮娥、藥を竊んで雲髮を駐む。

不自嬌玉顏。方希鍊金骨。自ら玉顏を嬌なりとせず、方に金丹を鍊らむことを希ふ。

飛去身莫返。含笑坐明月。飛び去つて、身、返るなく、笑を含んで、明月に坐す。

紫宮誇蛾眉。隨手會凋歇。紫宮、蛾眉に誇り、手に隨つて會ま凋歇。

【字解】一 姮娥 淮南子に「羿、不死の藥を西王母に請ふ、姮娥、竊んで以て月に奔る」とあつて、高誘の註に「姮娥は羿の妻、羿、不死の藥を西王母に請ふ、未だ之を服するに及ばず、姮娥、盗んで之を食うて仙を得、奔つて月中に入り、月精となるなり」とある。二 紫宮 左思の詩に列宅紫宮裏とあつて、李周翰の註に「紫宮は、天子居るところの處」とある。

【詩意】聞けば、むかし、姮娥といふ女があつて、不死の仙藥を竊んで、いつまでも雲なす髮を駐めむとし、自ら玉顏を嬌なりとせず、骨を鍊つて、金となさむことを希うた。かつて、一たび、この塵界を飛び去りし後は、決して歸ることなく、笑を含んで明月の中に坐し、即ち月精と成つて仕舞つた。美しき宮闕に居る女どもは、蛾眉の艶を誇るも、やがて老死を免れず、手に隨つて凋歇するばかりで、まことに傷むべきことである。

【餘論】この首は、長生不死を希望して、塵世の短壽を嘲つたものである。

宋玉事楚王。立身本高潔。宋玉、楚王に事へ、身を立つる本と高潔。

巫山賦綵雲。郢路歌白雪。巫山、綵雲を賦し、郢路、白雪を歌ふ。

舉國莫能和。巴人皆卷舌。舉國能く和するなく、巴人皆舌を巻く。

一感登徒言。恩情遂中絶。一たび登徒の言に感じ、恩情遂に中絶。

【字解】一 巫山賦綵雲 前に見ゆ。二 郢路歌白雪 宋玉の對楚王問に「客に郢中に歌ふものあり、陽春白雪を爲す、その曲、彌よ高ければ、その和、彌よ寡し」とある。三 登徒言 宋玉の登徒子好色賦に「大夫登徒子、楚王に侍し、宋玉を妬んで曰く、玉、人と爲り、體貌開麗、口に微辭多く、又性色を好む、願はくは、王、與に後宮に出入する勿れと。王、登徒子の言を以て宋玉に問ふ。玉曰く、體貌開麗は、天より受くる所なり。口に微詞多きは、師に學ぶ所なり。好色に至つては、臣、有るなきなり。王曰く、子、色を好まず、亦た説あるか、説あれば止まむ、説なければ退け」とある。四 中絶 班婕妤の詩に、棄捐箴箴中、恩情中道絶とある。

【詩意】宋玉は、楚王に事へ、その身を立つること、極めて高潔にして、醜行などは、少しもなかつた。ある時、王に従つて、高唐に遊び、巫山神女の事に感じて、朝雲暮雨を賦し、又郢中に於て白雪を歌つたが、曲彌よ高ければ、これを解するものなく、楚國を擧げて、これに和することが出来ず、賤しい曲のみを唱へて居た巴人は、これが爲に、舌を卷いたといふ位。しかも、楚王は、一たび登徒子の言に惑はされ、宋玉を以て色を好むものとなし、さしもの寵遇も、俄に中絶して仕舞つたのは、まことに氣の毒千萬な事である。

【餘論】蕭士贇は「太白の此篇、宋玉の事を借り、以て己の意を申ぶるなり」といひ、即ち宋玉を以て自ら比し、楚王を以て玄宗に擬し、登徒を以て高力士一輩の徒に當てたのである。但し、郢中に白雪を歌つたのは、對楚王問に客とあつて、宋玉自身ではなく、又楚王は登徒の言を聞いても、宋玉に對する恩情が全然中絶した譯でもない。これ等は事實に合はぬ嫌があるが、兩者ともに寓言であるから、さばかり嚴重に批判するにも及ばないと思はれる。

寫懷

寫懷とは、文字の通り、胸中の感懷を寫し出したのである。

翰林讀書言懷呈集賢諸學士

翰林にて書を読み懷を言ひ、集賢諸學士に呈す

晨趨紫禁中。夕待金門詔。
 觀書散遺帙。探古窮至妙。
 片言苟會心。掩卷忽而笑。
 青蠅易相點。白雪難同調。
 本是疎散人。屢貽編促誚。
 雲天屬清朗。林壑憶遊眺。
 或時清風來。閒倚欄下嘯。
 嚴光桐廬溪。謝客臨海嶠。

晨に紫禁の中に趨り、夕に金門の詔を待つ。
 書を觀て遺帙を散じ、古を探つて至妙を窮む。
 片言、苟くも心に會すれば、卷を掩うて、忽として笑ふ。
 青蠅、相點じ易く、白雪、調を同じうし難し。
 本と是れ疎散の人、屢ば編促の誚を貽す。
 雲天、清朗に屬し、林壑、遊眺を憶ふ。
 或時は、清風來り、閒に欄下に倚つて嘯く。
 嚴光は桐廬の溪、謝客は臨海の嶠。

功成謝人間。從此一投釣。

功成つて人間を謝し、これより一に投釣せむ。

【字解】(一)紫禁。謝莊の宋孝武宣貴妃詠に「紫禁は即ち紫宮、天子の居るところなり」とある。(二)金門。漢書東方朔傳に「金門に待詔して、稍や親近を得たり」とある。金門は、即ち金馬門。(三)散遺帙。帙は即ち書衣、謝靈運の詩に「散遺帙、所不知」とあつて、散帙とは、その書外裏むところの帙を解散して之を翻閱すること。(四)青蠅。陳子昂の詩に「青蠅一相點、白壁遂成窳」とあつて、青蠅が白玉の上に糞を遺せば、點汚と成るので、それを讒譖の言に比し、能く修潔の士をして、罪尤を致し招かしむるに比したのである。(五)白雪。曲名、その曲、彌高ければ、その和、彌寡きこと、前に見ゆ。(六)嚴光。章懷太子の後漢書註に「桐廬縣南に嚴子陵漁釣の處あり、今山邊に石あり、石上、十人を坐せしむべし、水に臨む、名づけて嚴陵の釣臺といふなり」とある。(七)謝客。即ち謝靈運、客は其小名、靈運に臨海嶠に登るといふ詩があつて、張銑の註に「臨海は郡名、嶠は山頂」とある。

【題義】唐書百官志に「開元十三年、麗正修書院を改めて集賢殿書院となし、五品以上を學士となし、六品以下を直學士となし、宰相一人を、學士知院事となし、常侍一人を副知院事となし、又判院一人、押院中使一人を置く。玄宗、常に耆儒を選び、日に一人を侍讀とし、以て史籍の疑義を質す。ここにに至りて、集賢院侍讀學士、侍講直學士を置き、その後、又修撰官、校理官、待制官、留院官、知校討官を増置す。文學直の員、又學士の職と云ふ、本と文學言語を以て顧問せらる、出入侍從、因つて謀議に參し、諫諍を納るるを得、その禮、尤も寵、而して、翰林院は待詔の所なり、唐制、乘輿在るところ、必ず文詞經學の士あり、下、卜醫技術の流に至るまで、皆別院に直し、以て宴見に備ふ、而して、

て、文書詔令は中書舍人これを掌る。太宗の時より、名儒學士、時時召して以て制を草す。然れども、猶ほ未だ名號あらず、乾封以後、はじめて北門學士と號す。玄宗の初、翰林待詔を置き、張說、陸堅、張九齡を以て之と爲し、四方の表疏批答應和の文章を掌る。すでにして、又中書務劇にして、文書壅滯多きを以て、乃ち文學の士を選び、翰林供奉と號し、集賢院學士と制詔書敕を分掌す。開元二十六年、又翰林供奉を改めて學士と爲し、別に學士院を置き、専ら内命を掌る。凡そ將相を拜免する、征伐を號令する、皆白麻を用ふ。その後、選用益す重くして、禮遇益す親み、號して内相となすに至る。又以て天子の私人と爲し、凡そ其職に充つるもの、定員なく、諸曹尙書より、下、校書郎に至るまで、皆選に預るを得たり」とある。この詩は、李白が翰林に待詔たりしとき、院中に於て書を読み、因つて、その感懷を抒べて、集賢院諸學士に呈上したのである。

【詩意】われは、朝に天子の居に參趨し、夕に金門に待詔となつた。そこで、翰林院中に於て、書を讀まむと欲し、遺れる帙を解いて、書冊を取り出し、古しへの事實を探つて、至妙の玄理を研究した。その間、片言隻辭でも、苟くも、心に會するものあれば、卷を掩ひ、忽然として、獨り微笑んで居た。おもへば、青蠅は、美事な玉にも糞をしかけて之を汚し、白雪の曲は、高くして、なかなか之と調を同じうすることは出来ない。われは、固より疎放の人であるにも拘はらず、君の眷顧を得たるに因つて、偏屈な急性な厄介の人物だといふ讒を度度受けた。今しも、秋に入り、雲天清朗、林壑は、遠眺

に宜しく、偶ま清風の吹き來るとき、ひとり欄下に倚つて嘯くと、心は物外に馳せて、この世の苦難をも忘れる位。むかし、嚴光は桐廬溪に隠れ、謝靈運は臨海の山頂に登つて眺望を恣にしたといふので、その逸興、憶ふべしである。われも亦た功成りし後は、人間の事を辭し、これより去つて、專心に釣を投じ、全く此世の事を忘れたいと思つて居る。

【餘論】起首六句は、翰林に於て書を讀みしこと、青蠅易三相點の四句は、兎角に小人から譏られること、雲天屬三清明の四句は、秋時の光景、嚴光桐廬溪の四句は、功成りし後、この世を辭したいといふ希望を述べたのである。蕭士贇は「これ太白心を寫すの作、これを觀れば、前の效古の二首は概ね見るべし」とある。

尋陽紫極宮感秋作

尋陽の紫極宮にて秋に感じて作る。

何處聞秋聲。脩脩北窓竹。

何の處か秋聲を聞く、脩脩たり北窓の竹。

廻薄萬古心。攬之不盈掬。

廻薄萬古の心、これを攬して掬に盈たず。

靜坐觀衆妙。浩然媚幽獨。

靜坐、衆妙を觀、浩然として幽獨に媚ぶ。

白雲南山來。就我簷下宿。

白雲、南山より來り、我が簷下に就いて宿す。

嬾從唐生決。羞訪季主卜。

唐生に從つて決するに嬾し、季主を訪うて卜するを羞づ。

四十九年非。一往不可復。

四十九年の非、一往、復すべからず。

野情轉蕭散。世道有翻覆。

野情、轉た蕭散、世道、翻覆あり。

陶令歸去來。田家酒應熟。

陶令歸り去らむ來、田家、酒應に熟すべし。

【字解】

【一】脩脩北窓竹 謝朓の詩に「風飄滿池荷、脩脩蔽窓竹」とあり、古塘上行に「邊地多悲風、樹木何脩脩」とある。脩脩は清秀の貌。【二】廻薄 皇娥歌に「萬象廻薄化無方」とあつて、廻薄は凝聚せしめること。【三】攬之 陸機の詩に「攬之不盈」手とある。【四】衆妙 老子に「衆妙之門」とある。【五】幽獨 謝靈運の詩に「幽獨賴鳴琴」とある。【六】簷下宿 陶潛の詩に「白雲宿簷端」とある。【七】唐生決 張衡の思文賦に「感蔡子之慷慨、從唐生以決疑」とあつて、唐舉が蔡澤を相せしことを用ふ、その詳は前に見ゆ。【八】季主卜 史記に「司馬季主は楚人なり、長安の東市に卜す」とある。【九】四十九年非 淮南子に「蘧伯玉、年五十にして、四十九年の非を知る」とある。【一〇】酒應熟 陶潛の「問來使」の詩に「歸去來山中、山中酒應熟」とある。

【題義】

舊唐書に「開元二十九年正月、制して、兩京諸州に各玄元皇帝の廟を置く。天寶二年三月、西京の玄元廟を改めて太清宮となし、東京を太微宮となし、天下諸郡を紫極宮となす」とあり、方輿勝覽に「江州の紫微宮は、州を去ること二里、即ち今の天慶觀、蘇東坡曰く、李太白に「尋陽紫極宮感秋の詩あり、紫極宮は、今の天慶觀なり、道士胡洞微、石本を以て予に示す。蓋し其師卓杞の爲るところ」とある。この詩は、江州の老子廟に滞留し、秋に感じて作つたのである。

【詩意】何處となく秋聲が聞こえるが、それは秀でて叢を成せる北窓の竹を揺り動かして、そこから吹き起つたのである。萬古の人心は、この間にも聚まつて居る様に思はれるが、これを取らうとしても、掬に盈たず、なかなか容易に收拾することは出来ない。そこで静坐して、即ち萬化の變化を觀ると、すべて、浩然として、幽獨に媚ぶるが如くである。白雲は、片片として軽く、南山より飛び來り、やがて、我が居る道觀の簷端に留まつて居る。ここに我が身世を顧みれば、升沈屢ば變じ、今後どうしたら善いか、分らないが、かの唐舉の處へ往つて、人相を見て貰ふにも嬾く、又司馬季主を訪うて、占をして貰ふことを羞むる。おもへば、過去四十九年の非は、すでに往いて、取りかへしもつかない。自分は、この浮世を離れたいといふ野情が蕭散として居るし、世事は例の如く翻覆常ならず、とても、此儘留まつて居ることは出来ない。されば、陶淵明の如く、歸去來の辭を作つて、立ち去りたいと思ふので、頃しも、秋の末、田家に於ては、丁度酒の熟した時分である。

【餘論】これは、尋陽の玄元廟に於て作り、懷郷の意を寓したのである。劉須溪は「その自然及ぶべからず、東坡、これに和して餘あり、終に擬議に涉る」といひ、蕭士贇は「太白、雅に冲澹を尙ぶ、これ亦た書懷の作なり」といひ、譚元春は「太白の詩を取るは、幽細の語を以て、その輕快餘あるの失を補ふを貴ぶ、これに似たるは、即ち妙なり」といつて居る。

江上秋懷

江上秋懷

餐霞臥舊壑。散髮謝遠遊。
 山蟬號枯桑。始復知天秋。
 朔雁別海裔。越燕辭江樓。
 颯颯風卷沙。茫茫霧縈洲。
 黃雲結暮色。白水揚寒流。
 惻愴心自悲。潺湲淚難收。
 蘅蘭方蕭瑟。長歎令人愁。

餐霞、舊壑に臥し、散髮、遠遊を謝す。
 山蟬、枯桑に號び、始めて復た天の秋なるを知る。
 朔雁、海裔に別れ、越燕、江樓を辭す。
 颯颯として、風、沙を巻き、茫茫として、霧、洲を縈る。
 黃雲、暮色を結び、白水、寒流を揚ぐ。
 惻愴、心自ら悲む、潺湲、涙、收め難し。
 蘅蘭方に蕭瑟、長歎、人をして愁へしむ。

【字解】一 餐霞 霞の氣を呑み食ふ、即ち仙家修鍊の法、前に見ゆ。二 散髮 冠せずして髮の披亂すること、張華の詩に散髮重陰下とある。三 朔雁 北地の雁、謝靈運の撰征賦に眷轉蓬之辭、悼朔雁之赴越とある。四 海裔 淮南子に遊於江海裔とあつて、高誘の註に「裔は邊なり」とある。五 越燕 今の紫燕、前に見ゆ。六 潺湲 楚辭に橫流涕兮潺湲とあつて、王逸の註に「潺湲は流るる貌」とある。七 蘅蘭 郭璞の爾雅註に「杜蘅は葵に似て香し」とあり、邢昺の疏に「本草、唐本註に云ふ、杜蘅、葉は葵に似、形、馬蹄の如し、故に俗に馬蹄香といふ、山の陰、水澤下濕の地に生ず、根は細辛白前等に似たり。山海經に云ふ、天帝山に草あり、その狀、葵の如し、その臭、蘼蕪の如し、名を杜蘅といふ、以て馬を走らすべし。これを食へば、すでに瘰すと、是れなり」とある。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 霞の氣を吞吐し、仙家修鍊の法を學んで舊壑に臥し、髪を散らした儘遠遊を事として居た。今しも、山蟬は、枯れた桑の樹の上に叫び、はじめ、天の既に秋なるを知つた。北方朔地の雁は、海邊に別れて南に飛び、越地の紫燕は、江樓を辭して北に去つて仕舞ふ。風は颯颯として汀上の沙を捲き、霧は茫茫として江邊の洲を繞つて居る。黄に曇りし雲は、暮色を結び、白水は寒流を揚げて、勢よく流れて居る。この惻愴の景に對して、心、自然に悲しく、涙、潺湲として流れ、容易に收めることは出来ない。杜蘅や蘭は、今しも蕭瑟として枯れ凋み、長嘆の餘、人をして愁に堪へざらしめる。

【餘論】 山蟬以下の八句は、敘景であるが、秩序整然として、次第に遞下するが故に、堆垛の弊なく、加ふるに、結四句、感愴無限、讀者も亦た長嘆して心を愁へしめる。

秋夕書懷

秋夕、懷を書す

北風吹海雁。南渡落寒聲。

北風、海雁を吹き、南渡、寒聲落つ。

感此瀟湘客。凄其流浪情。

この瀟湘の客を感ず、凄其、流浪の情

海懷結滄洲。霞想遊赤城。

海懷、滄洲を結び、霞想、赤城に遊ぶ。

始探蓬壺事。旋覺天地輕。

始めて蓬壺の事を探り、旋つて天地の輕きを覺ゆ。

澹然吟高秋。閒臥瞻太清。

澹然として高秋に吟じ、閒臥、太清を瞻る。

蘿月掩空幕。松霜結前楹。

蘿月、空幕を掩ひ、松霜、前楹に結ぶ。

滅見息羣動。獵微窮至精。

見を滅して羣動を息め、微を獵して至精を窮む。

桃花有源水。可以保吾生。

桃花、源水あり、以て吾が生を保つべし。

【字解】 一、海雁 海上の雁、海は北海であらう。

二、凄其 凄然と同義。三、赤城 初學記に「名山略記に云ふ、赤城山、

一名燒山、東卿司命君の居るところ、洞は周圍三百里、上に上玉清平天あり」とあり、その詳は前に見ゆ。四、蓬壺 即ち蓬萊、

方壺。五、息羣動 陶潛の詩に日入羣動息とある、羣動は萬物の運行。六、至精 莊子に「至精は形なし」とある、宇宙の本體。

七、桃花有源水 即ち桃花源、前に見ゆ。

【題義】 説明に及ばぬ。一本には秋日南遊書懷とある、即ち第三句に瀟湘客とある通り、洞庭の南に遊んだ時に作つたのである。

【詩意】 北風は颯然として、海上の雁を吹き、その雁は南に飛んで、鳴く聲も寒げに聞こえる。身は瀟湘に客として、流浪を傷むの情に堪へず。海を望んで、滄洲に至らむと志し、霞を見ては、赤

城に遊ばむと思ひ、心鬱結して惱んで居る。はじめ、蓬萊方壺の事を色色聞いて見ると、忽ちにして、天地の軽さを覚え、やがて、澹然として高秋に吟じ、心のどかに打臥して大空を眺めて居る。羅の間を漏る月は、空幕に掩はれ、松の葉に置く霜は、前楹にも満ちて居る。現在差別の見を滅却すれば、羣動寂然として、至靜に歸し、微を追求すれば、宇宙の本體たる至精を窮めることが出来る。かくの如くして、塵縁を斷つて物外に遊ぶべく、現に桃花源は、眼前咫尺の地に在つて、そこに往けば、わが生を長しへに保つことも出来る。

【餘論】 蕭士贇は「この詩は、太白謫逐の時に作る、乃ち能く仙游を以て自ら解く、患難に素して善く處るものといふべし」といひ、嚴滄浪は「滅見息羣動の二句奥妙、杜に似たり、これ等の句の如き、集中多く得ず」といひ、乾隆御批には「亦た謂はゆる發端に工なるもの、滅見息羣動の二語、頗る見地あり」とある。

避地司空原言懷

地を司空原に避けて懷を言ふ

南風昔不競。豪聖思經綸。

南風むかし競はず、豪聖、經綸を思ふ。

劉琨與祖逖。起舞雞鳴晨。

劉琨と祖逖と、起つて舞ふ雞鳴の晨。

雖有匡濟心。終爲樂禍人。

匡濟の心ありと雖も、終に禍を樂むの人となる。

我則異於此。潛光皖水濱。

我は則ち此に異なり、光を潛む皖水の濱。

卜築司空原。北將天柱鄰。

築を卜す司空の原、北は天柱と鄰る。

雪霽萬里月。雲開九江春。

雪は霽る萬里の月、雲は開く九江の春。

俟乎太階平。然後託微身。

太階の平かなるを俟ち、然後、微身を託す。

傾家事金鼎。年貌可長新。

家を傾けて金鼎を事とし、年貌、長しへに新なるべし。

所願得此道。終然保清真。

願ふところは、此道を得、終然として清真を保たむ。

弄景奔日馭。攀星戲河津。

景を弄して日馭を奔らし、星を攀ちて河津に戯る。

一隨王喬去。長年玉天賓。

一たび王喬に隨つて去り、長年、玉天に賓たり。

【字解】

【一】南風昔不競 左傳に「晉人、楚師あるを聞く。師曠曰く、害せず、吾、驟、北風を歌ひ、又南風を歌ふ、南風競はず、死聲多し、楚、必ず功なからむ」とある。ここでは借りて、晉室南渡、兵力競はざるの義に用ふ。【二】劉琨與祖逖 晉書に「祖逖、劉琨と俱に司州主簿たり、情好綢繆、被を共にして同じく寢す、中夜、荒鷄の鳴くを聞き、琨を蹴つて、覺まして曰く、これ惡聲に非ざるなり」と。因つて起つて舞ふ」とある。【三】匡濟 天下を一匡し、世の廢亂を濟ふ。【四】潛光 韜晦して實力を養ふ。【五】皖水 太平寰宇記に「皖水は、舒州懷寧縣の西北に在り、壽州霍山縣より南流して入り、縣北二里を經、又東南流するこ

と二百四十里、大江に入る、これを皖口といふ」とあり、一統志に「皖水は潛山縣北に在り、下流は潛水に會し、府城の西を経て、大江に達す」とある。【六】天柱 唐六典の註に「霍山、一名天柱、舒州懷寧縣に在り、漢より以來、南岳と爲す」とあり、方輿勝覽に「天柱峰は皖山に在り、高き三千七百丈、周三百五十里、山東に瀑布あり、漢の武帝、かつて此山に登る、即ち司元洞府九天、司命真君の主るところなり」とある。【七】九江 澤陽に在り、前に見ゆ。【八】太階平 秦階に同じ、天下太平なるといふ。【九】金鼎 江淹の別賦に鍊三金鼎而方堅とあつて、李善の註に「鍊金は、丹を爲るの鼎なり」とある。【一〇】日馭 即ち羲和。【一一】河津 天河の津。【一二】王喬 三人もあつて、その一は古の仙人、或は王子喬と稱し、或は王喬と稱し、楚辭にも數ば引いてある。一は周の靈王の太子晉、亦た王子喬と稱する。一は後漢の時、河東の人で、葉縣の令となりしもの、皆前に見ゆ。こゝのは、どれでも善いやうである。【一二】玉天 道家に謂はゆる玉清境の天、天寶君の治むるところ、即ち清微天、又王績の詩に、三山銀作地、八洞玉爲天とある。

【題義】一統志に「司空山は、安慶府太湖縣の西北一百六十里に在り、山極めて高峻、山半に洗馬池あり、即ち古しへの司空原、李白、かつて地を此に避く」とあり、太平寰宇記に「司空山は、舒州太湖縣の東北一百三十里に在り」といひ、江南通志に「太白の書堂は、太湖縣司空山に在り、李白、かつて地を此に避け、卜築司空縣の句あり」といつて居る。この詩は、李白が亂を避けて、司空原に卜居した時に、懷を述べたのである。

【詩意】むかし、晋室、江左に遷りしより、南風兎角に競はず、豪聖の人君は、頻りに天下を経綸したいとあせつて居た。その時、劉琨と祖逖とは、中原の回復に志し、鷄の鳴くのを聞き、これは惡聲に非ずといつて、起つて舞つたといふ話である。この二人、天下を一匡し、蒼生を濟ひたいといふ

志は、固より有りながら、その跡を見ると、どうやら禍を樂み、亂を貪つて居る様に見える。これは、是等の人とは異にして、光を潜めて、皖水の岸上に住み、この度は、居を司空原に卜して、北は天柱山に鄰り、好個の幽境に住む積りである。雪霽れては、明月、萬里の空に輝き、雲開いては、春色、九江の邊に滿ち、四時の眺は、常に面白い。われは、一肌ぬいで、仕事を遣らうと思ふが、それは全く蒼生の爲にし、決して、自己の功名の爲めではない。されば、天下の再び清平に歸するを待ち、然る後、眇たる一身を此地の幽居に託する積り、その時は、一家の財産を傾けて金丹を鍊り、それが見事に成就したならば、きつと若返つて、容貌も長しへに新であらう。願ふところは、仙家の道を修行し、いつまでも清眞を保ち、影を弄しては、日御たる羲和を追ひ、星を攀ちては、天上に至つて銀河の邊に遊戯すべく、一たび王喬に従つて昇仙するを得ば、玉清境 天の賓客となつて、仙人の仲間入も出来るであらう。

【餘論】起首六句は、劉琨・祖逖の事を掲起し、我則異於是といつて反抑し、以下六句、司空原の卜築に及び、俟乎太階平の十句は、本來の夙志、求仙に在つて、功名は其素願に非ざるを言ひ、自己の本領を明かにしたのである。しかし、作者の衷情をいへば、不遇の極、言を仙に託したので、誠に是事ありと爲さば、癡人の前夢を説くべからずといふ嘲を免れぬであらう。

上崔相百憂章

崔相に上る百憂章

共公赫怒。天維中摧。

共公赫怒、天維、中より摧く。

鯤鯨噴蕩。揚濤起雷。

鯤鯨噴蕩、濤を揚げ、雷を起す。

魚龍陷人。成此禍胎。

魚龍、人を陥れ、この禍胎を成す。

火焚崑山。玉石相礮。

火は崑山を焚き、玉石相礮す。

仰希霖雨。灑盡炎煨。

仰いで、霖雨の、炎煨に灑ぎ盡さむことを希ふ。

箭發石開。戈揮日廻。

箭發して石開き、戈揮うて日廻る。

鄒衍慟哭。燕霜颯來。

鄒衍慟哭すれば、燕霜颯として來る。

微誠不感。猶繫夏臺。

微誠感せず、猶ほ夏臺に繋がる。

蒼鷹搏攫。丹棘崔嵬。

蒼鷹搏攫、丹棘崔嵬。

豪聖凋枯。王風傷哀。

豪聖凋枯して、王風傷哀。

斯文未喪。東岳豈頽。

斯文未だ喪びず、東岳、豈に頽れむや。

穆逃楚難。鄒脫吳災。

穆は楚難を逃れ、鄒は吳災を脱す。

見機苦遲。二公所哈。

機を見て遲きに苦むは、二公の哈ふところ。

驥不驟進。麟何來哉。

驥は驟に進まず、麟、何ぞ來るや。

星離一門。草擲二孩。

星は一門を離れ、草は二孩を擲つ。

萬憤結緝。憂從中催。

萬憤結緝、憂、中より催す。

金瑟玉壺。盡爲愁媒。

金瑟玉壺、盡く愁の媒たり。

舉酒太息。泣血盈楮。

酒を舉げて太息し、泣血、楮に盈つ。

台星再朗。天網重恢。

台星再び朗かに、天網、重ねて恢たり。

屈法申恩。棄瑕取材。

法を屈し、恩を申べ、瑕を棄て、材を取る。

冶長非罪。尼父無猜。

冶長、罪に非ず、尼父、猜ふなし。

覆盆儻舉。應照寒灰。

覆盆儻し舉がらば、應に寒灰を照らすべし。

【字解】一、共公。即ち共工、列子に「共工氏、顛頊と帝たるを争ひ、怒つて不周の山に觸れ、天柱を折き、地維を絶つ」とある。

二、鯤鯨。鯤は莊子に見えたる北海の大魚、鯨も亦た海中の大魚。三、禍胎。漢書枚乘傳に「福生する基あり、禍生する胎あり」とある。

四、火焚崑山。崑山の陽に炎え、玉石俱に焚く」とある。五、相礮。礮は落つ。六、炎煨。煨は燼。七、箭發石開。西京雜記に「李廣、冥山の陽に獵し、臥虎を見て之を射る。矢を没し、羽を飲む。進んで之を視れば乃ち石な

り。その形、虎に類す。退いて更に射る、鐵破れ幹折れて、石傷かす。予、かつて以て揚子雲に問ふ、子雲曰く、至誠なれば、金石爲に開く」とある。【八】戈揮日廻 淮南子に「魯幽公、韓と構へ、戰酣なるとき日暮る。戈を援つて之を揮ふ、日、これが爲に反ること三舎」とある。【九】鄒衍 淮南子に「鄒衍、忠を燕の惠王に盡す。惠王、語を信じて之を繫ぐ。鄒衍、天を仰いで哭す、正夏にして、天、これが爲に霜を降す」とある。【一〇】夏臺 史記に「桀、湯を召して、之を夏臺に囚へ、すでにして之を釋す」とある、夏臺は獄の名。【一一】蒼鷹 漢書に「鄧都、遷つて中尉となる。この時、民朴、罪を畏れて自ら重かる。而して、都、ひとり先づ嚴酷にして法を行ふを致し、貴戚を避けず、列侯宗室、都を見れば、目を側て視、號して蒼鷹といふ」とある。【一二】丹棘 周易に實三於叢棘とあつて、虞翻の註に「獄外に九棘を種う、故に叢棘といふ」とある、又棘に赤白の二種あつて、丹棘は即ち赤棘とある。【一三】豪聖 周公を指す、流言の變に遭ひ、王道凋枯、故に幽以下の諸詩はこれを傷哀したのである。【一四】東岳豈類 東岳は即ち泰山、孔子が死ぬ前に作つた歌に、泰山其頽乎とある。【一五】穆逃楚難 漢書に「楚の元王、穆生、白生、申公を以て中大夫と爲す。穆生酒を嗜まず。元王、毎に醴を設く。王戊、即位するに及び、常に設けしが、後設くるを忘る。穆生曰く、これ道を忘れたるなり、道を忘るるの人、胡ぞ以て久しく處るべけむや、と。遂に病を謝して去る。王戊、稍く淫暴、乃ち吳と謀を通ず」とある。【一六】鄒脫吳災 漢書に「鄒陽は、齊人たり、吳に仕へ、文辯を以て名を著す。吳王、太子の事を以て怨望し、疾と稱して、朝せず、陰に邪謀あり、陽、書を奏して諫む。吳王、その言を納れず、ここに於て、鄒陽、吳の説くべからざるを知り、去つて梁に之き、孝王に從つて遊ぶ」とある。【一七】哈笑 宋玉の九辯に「驥不驟進 而求服兮」とある。【一八】麟何來哉 家語に「叔孫氏の車士子鉏商、薪を大野に採つて、麟を獲たり。孔子、往いて之を觀て曰く、麟なり、胡すれぞ來るや、胡すれぞ來るやと、袂を反して面を拭ひ、涕泣、襟を沾す。叔孫これを聞き、然る後に之を取る。子貢問うて曰く、夫子何ぞ泣くや。孔子曰く、麟の至る、明王の爲めなり、出づる、其時に非ずして害せらる、吾、これを以て傷む」とある。【一九】星離 分散の義。【二〇】二兒 結緝 蕭本に結緝に作つてある、結んで解けざること。【二一】台星 晉書に「三台六星、兩兩として居り、文昌の列より起つて太微に抵る、三公の位なり。人に在つては三公といひ、天に在つては三台といふ」とある。台星再期とは、崔相の明察、

能く幽微を照らし見ると云ふ。【二二】天網重恢 老子に「天網恢恢、疎にして失はず」とあつて、説文に「恢は大なり」とある。これは、崔相が己の罪を赦さむことを冀ふの意。【二三】風法申恩 邱遲の陳伯之に與ふる書に「主上、法を屈し、恩を申べ、吞舟是れ漏らす」とある。【二四】棄瑕取材 陳琳の袁紹の爲に豫州に檄する文に「英雄を收羅し、瑕を棄て、用を取る」とある。【二五】治長 史記に「公治長は齊人、字は子長、孔子曰く、長は妻はすべきなり、縲紲の中に在りと雖も、其罪に非ざるなり、と。其子を以て之に妻はす」とある。【二六】覆盆 抱朴子に「これ三光の覆盆の内を照らさざるを責むるなり」とある。【二七】寒灰 三國志に、「煙を寒灰の上不起し、華を已枯の木に生ず」とある。

【題義】原註に「時に尋陽の獄に在り」といひ、崔相は即ち崔渙、詳しく前に見えて居る。王琦の解に「按ずるに、太白、宋中丞の爲に自ら薦むるの表に云ふ、地を廬山に避け、永王の東巡に遇ひ、脅行せられて中道より奔走し、却つて、彭澤に至り、具に己に前後を陳首し、宣慰大使崔渙及び臣の推覆清雪を得、尋いで奏聞を経たり」とある。この詩と次の萬憤詩とは、取りも直さず、この時に作つたので、おのが境涯を詳述し、崔渙に贈つて、その同情を求め、且つ雪冤の事を依頼したのである。【詩意】むかし、共工氏が赫怒して、頭を不周山に觸れたとき、天の網維が、中程から摧けて仕舞つたといふが、今しも、これと同じ様な大災厄が起り、鯢だの鯨だのいふ海中の大魚は、噴蕩して暴れ廻り、濤を揚げ、雷を起し、魚龍は跳り上つて、人を陥れむとし、やがて、禍を孕むやうに成つた。それから、一方では、火が崑岡の上に燃え、玉石の區別なく、あらゆる物は、碎け落ちる位。あはれ、霖雨一たび至り、その火に灑いで、燃えさしまでも残らず消して呉れば善いがと、頻りに望をかけ

て待つて居る。かくの如き禍亂の世に當つても、人の至誠のみは、依然として存し、時には、效驗が明かに見えるので、李廣が虎と間違へて石を射ると、鐵までも没して仕舞つたし、魯陽公が戈を揮へば、落日も忽ち後へ廻つたといふことである。その外、鄒衍は、冤を銜んで獄中に繋かれ、その爲めに、慟哭すれば、燕地の霜は、颯として地上に降り來つたといふことだし、殷の湯王は、微誠未だ君王を感動する能はざるに因つて、夏臺の獄に囚へられた。かの酷吏は、蒼鷹の小禽を搏つて攫むが如く、獄舎の周圍には赤い棘が植ゑられて、崔嵬として高くなつて居る。むかし、周公は、豪聖を以て稱せられたが、成王を輔佐するに當つて、流言が頻りに起り、その爲に、大道凋枯し、やがて、しばらく、東に遷されたことがあつたので、王風の詩は、之を傷み哀んだのである。そして、孔子が出たのは、斯文の未だ亡びざる證據であつて、泰山も決して頽れない。穆生は、醴を供せられなくなつて、楚王の心、早くも道を忘れたるを知つて、病を謝して去つたが、その爲に、後日の難を免れたし、鄒陽は、一たび吳王を諫めたが、その用ひられざるを見るや、去つて梁に之き、爲に七國の變に出合はずに濟んだので、苟くも、この世に在るものは、機を見て、早く自分の身を始末するが第一であつて、もし遅くなれば、到底、禍を免れずして、穆梁二公の笑ふところとなるであらう。自分は、今丁度、さういふ憂き目に遭つたので、名馬の材能ありながら、驟に進むを得ず、麟も其時に非ずして世に出づれば、まことに氣の毒なことである。かくて、我が一門は、星の如く分離し、我が二兒は、草間に

擲ち棄てられ、萬憤解き難く、憂は心中より催し來り、金瑟玉盃も、決して心を樂ましめずして、愁の媒となるのみである。そこで、酒を擧ぐるも、太息を禁じ得ず、涙盡きて、續ぐに血を以てし、それが杯中に一ぱいに成つて居る。願ふところは、台星再び朗かにして、崔相の明察、よく幽微を照見し、天網恢恢、おのが罪を赦す様に、精精盡力して貰ひたい。かくて、法を枉げて、恩を申べ、瑕を棄てて材を取り、この才、幸に用ふべくんば、何卒任用して、相當の職務を授けて欲しい。むかし、公冶長は、縲紲の中に在りと雖も、その罪に非ざるが故に、孔子は、決して之を猜惡しなかつた。覆せた盆の中には、三光照らし到らざれども、その覆盆にして、一たび擧がらば、日月星辰、これを照らすべく、その餘光の及ぶところ、冷え切つた寒灰も、煙を起して、幸に復活することが出来るであらう。

【餘論】 共工赫怒の十句は、安祿山の亂を指したので、中原兵禍の慘を極力寫し出して居る。箭發石開の八句は、至誠天を動かすを敍して、囚獄の苦に及び、豪聖凋枯の八句は、禍殃の身に逼るを言ひ、且つ機を見るの早からざるを悔恨し、驥不三驟進の十句は、今日の慘狀を細述し、台星再朗の八句は、おのが希望を述べて、崔相に訴へ、その盡力に因つて、今の難を逃るのみならず、出來得べくんば、任用して貰ひたいといふ意を逗露したのである。この詩は、四言を以て之を遣り、しかも、筆、意に隨つて盡さざるなく、これを讀めば、作者當日の心衷が、すつかり分かる。

萬憤詞投魏郎中

萬憤の詞、魏郎中に投ず

海水渤潏。人懼鯨鯢。

海水渤潏として、人は鯨鯢に懼る。

翦胡沙而四塞。

胡沙を翦めて四塞し、

始滔天於燕齊。

始めて、天に燕齊に滔る。

何六龍之浩蕩。

何ぞ六龍の浩蕩として、

遷白日於秦西。

白日を秦西に遷せる。

九土星分。嗷嗷栖栖。

九土星分し、嗷嗷栖栖たり。

南冠君子。呼天而啼。

南冠の君子、天を呼んで啼く。

戀高堂而掩泣。

高堂を戀うて泣を掩ひ、

淚血地而成泥。

涙、地に血して、泥を成す。

獄戶春而不草。

獄戶春にして草ならず、

獨幽怨而沈迷。

ひとり幽怨にして沈迷す。

兄九江兮弟三峽。

兄は九江に弟は三峽、

悲羽化之難齊。

羽化の齊しうし難きを悲む。

穆陵關北愁愛子。

穆陵關北、愛子を愁へ、

豫章天南隔老妻。

豫章天南、老妻を隔つ。

一門骨肉散百草。

一門の骨肉、百草に散じ、

遇難不復相提攜。

難に遇ふも、復た相提攜せず。

樹榛拔桂。囚鸞寵雞。

榛を樹る、桂を抜き、鸞を囚へ、雞を寵す。

舜昔授禹。伯成耕犁。

舜、むかし、禹に授け、伯成耕犁す。

德自此衰。吾將安棲。

德、これより衰へ、吾、將に安くにか棲まむとする。

好我者恤我。

我を好するものは我を恤まむ、

不好我者何忍臨危

我を好せざるものも、何ぞ危きに臨んで、相擠するに忍びむや。

而相擠。

子胥鴟夷。彭越醢醢。

子胥は鴟夷、彭越は醢醢。

自古豪烈。胡爲此繫。

古しへより、豪烈、胡んぞ此を爲す、繫。

蒼蒼^(一九)之天。高乎^(二〇)視低。蒼蒼^(一九)の天、高きより低きを視る。
 如其聽卑。脫我牢狴^(二一)。如其聽卑ければ、我を牢狴より脱せよ。
 儻辨美玉。君收白圭^(二二)。儻し美玉を辨ずれば、君、白圭を收めよ。

【字解】(一) 渤海。木華の海賦に天網浮滂とあつて、李善の註に「沸湧の貌」とあり、又桓譚の新論に「夏禹の時、洪水浮滂」とある。(二) 鯨鯢。不靖の人に喩ふ、ここでは安祿山を指す。(三) 蒼。聚まる。(四) 滔天。書の堯典に「浩浩天に滔る」とある。安祿山、范陽に於て逆を起し、遂に燕地に據るをいふ。燕は齊と壤を接す、故に兼言して燕齊といふ。(五) 六龍。淮南子の註に、「日、車に乗じ、駕するに六龍を以てす」とあつて、明皇の蜀に幸せしに喩ふ。蜀は、秦の西に在るが故に、秦西といひ、下に遷三日於秦西とある。(六) 九土星分。國語の韋昭註に「九土は九州の土なり」といひ、淮南子に「何をか九州といふ。東南神州を農土といひ、正南次州を沃土といひ、西南戎州を滔土といひ、正西兗州を白土といひ、正中冀州を白土といひ、西北台州を肥土といひ、正北濟州を成土といひ、東北薄州を鹽土といひ、正東揚州を伸土といふ」とあり、左思の蜀都賦に九土星分とある。(七) 南冠君子。左傳に「晉侯、軍府を觀、鍾儀を見て之を問うて曰く、南冠にて縶がるるものは誰ぞや。有司對へて曰く、鄭人獻するところの楚囚なりと。これを稅せしめ、召して之を甲へば、再拜稽首す。その族を問へば、對へて曰く、伶人なり、と。これに琴を與へて、南音を操らしむ。公、范文子に語る、文子曰く、楚囚は君子なり」とある。(八) 高堂。普通に父母在ます處を指せども、ここでは、蕭士贊が朝廷と解したのが善い。(九) 九江。文獻通考に「江州の西北に在り」といひ、その詳は前に見ゆ。(一〇) 三峽。四川通志に「巫峽は巫山縣東三十里に在り、西陵峽、歸峽と竝に三峽と稱す。上は夔州より、下は歸州夷陵州に至る、凡そ七百里中、皆三峽の地」とある。(一一) 羽化。仙人の化して羽翼を生ずるが如きをいふ。(一二) 穆陵關。一統志に「穆陵關は、青州大嶺山上に在り。左傳、齊の桓公曰く、我が先君に履を賜ひ、南、穆陵に至ると、即ち此れ」とある。この時、李白の子の伯禽は、なほ東魯に在つて、未だ歸らざるが故に云ふ。(一三) 豫章。郡名、唐時江南西道に屬し、又洪州といひ、潯陽郡の南に在つた。疑ふらくは、この時、李白は廬

山に臥し、家室は此に寓して居たので、流三夜郎寄内^(一四)の詩に南來不得豫章書の句がある。(一四) 囚鸞籠雞。後漢書に「公卿舉ぐるところ、率れ其私に黨す、謂はゆる鸞鳥を放つて鸞鳳を囚ふ」とある。(一五) 伯成。莊子に「堯、舜に授け、舜、禹に授く。伯成子高、諸侯たるを辭して耕す。禹、往いて其故を問ふ、曰く、むかし、堯、天下を治む、賞せずして民勸め、罰せずして民畏る。今、子、賞罰して、民日に不仁、徳、これより衰へ、刑、これより立つ、後世の亂、これより始まる」とある。(一六) 子胥。吳王、子胥の尸を取り、盛るに鴟夷を以てし、これを江中に浮ぶ」とある。鴟夷は革囊。(一七) 彭越。酈。史記に「漢、梁王彭越を誅し、これを醢にし、その醢を盛つて、徧れく諸侯に賜ふ」とある。(一八) 繫。語助にして意味なし。(一九) 蒼蒼。莊子に「天の蒼蒼たるは其れ正色か」とある。(二〇) 高乎視低。呂氏春秋に「天の高きに處つて卑きを聽く」とある。(二一) 牢狴。初學記に「亦た獄の別名」とある。(二二) 白圭。詩の小雅に白圭之玷尙可磨也とある。

【題義】萬憤とは、心中萬種の幽憤で、これを敘して、魏郎中に贈つたのである。但し、郎中その人は、事蹟不明である。

【詩意】海水が湧き上り、人は鯨鯢に取り圍まれたと同じく、安祿山、一たび亂を爲し、天下は沸き上る様な大騒動。北地の胡沙は、聚つて四方を塞ぎ、祿山は、はじめ范陽より起つて逆をなし、滔天の勢、到底防遏すべからず、六龍浩蕩、白日を秦西に遷し、天子は難を避けて、遠く蜀中に行幸せられた。そこで、九州の曠土は、星の如く、ばらばらと分崩し、到る處、嗷嗷の聲、悽悽の想に充ち満ちて居る。われ亦た南冠の君子となり、一たび囚へられて、異邦に居り、天を呼んで啼號し、朝廷の上なる君王の行衛をしのびて、涙を掩ひ、はては、涙盡きて、繼ぐに血を以てし、その血は、地に注いで、

泥に交つて仕舞ふ位。獄舎の戸は、嚴重に閉ちて、春になつても、そのあたりには青い草さへ生えな
し、ひとり幽怨を懐いて、この心は沈み迷ふばかり。兄は九江に居り、弟は三峽に潜み、同時に羽化し
て、軽く舉がり、遠く逝いて、相會することの難きを嘆いて居る。わが愛子の伯禽は、なほ東魯に留
まつて、穆陵關北に居り、老妻は、豫章郡の南に居るが、消息も絶えはてて、近ごろ、どうして、
活を成して居るか、全く分らない。おもへば、一門の骨肉は、散じて百草に埋没し、この禍難の日に
遭ふも、互に提攜して助け合ふことが出来ない。今の世の有様は、榛を植ゑて桂を抜き棄て、鸞を囚
へて雞を寵するといふ風に、物事が全然顛倒して、この先、どうなるとも知れない。むかし、舜が位
を禹に傳へた時、伯成子高は、諸侯たることを辭して、親ら野に耕し、賞罰、一たび行はれてより、
民は日に増し不仁となり、徳、これより衰へ、刑、これより立ち、われは、何處に棲むべきかといつ
たが、全く其通り。この喪亂の世に當つて、禍を受くるは、誰しも同じとはいへ、われは、殊に甚
しいから、われを好しとするものは、もとより相憐んで、同情を寄するに相違なく、われを好しとせ
ざるものでも、いかで危きに臨んで排擠するに忍ぶべき。わが今日の境涯は、恩あるも、讎あるも、
一樣に哀れを催すべきものである。かの伍子胥は、功あるに拘はらず、讒を蒙り、やがて、吳王は、
屬鏤の劍を賜うて自殺せしめ、その死骸を馬の革で作つた大きな囊に入れて江中に棄てて仕舞つたし、
彭越は、漢の高祖を佐けて大功ありしものの、一たび其叛を誣ひらるるや、高祖は之を誅し、その肉

を醢として、諸侯に分ち賜はつたといふので、豪烈の功臣でさへも、その末路は、かくの如く、まし
て、予の如きものに於ては、猶更の事である。嗟乎、蒼蒼たるものは天、高きより低きを見て居るが、
君にして、もし卑き方に注意し、わが此訴を聞いたならば、精精力を盡して、われを牢獄の内より脱
せしめ、且つ美玉を辨別されるならば、われを白珪と同一視して、随分收用して貰ひたいものである。
〔餘論〕 全篇の旨意は、前の百憂章と同じである。起首より嗷嗷栖栖に至るまでは、祿山亂を爲し、中
土騷擾せしことを述べ、南冠君子より遇難不復相提攜に至るまでは、おのが今日慘苦の實況を敘し、
樹榦拔桂より胡爲此繫に至るまでは、世道愈よ澆季、豪烈なは禍を免れざるをいひ、蒼蒼之天の六句
は、魏郎中に向つて、救済汲引の恵を垂れむことを囑望したのである。この詩は、長短句を以て之を
行り、前首の整齊なるに對して、錯落參差、各、その妙を極めて居る。王琦は、この詩の條下に於て、
李白の兄弟に關する私考を附記してあるから、念の爲め、下に引抄する。曰く、太白集中、その兄と
稱するもの五人、新平長史榮なり、襄陽少府皓なり、虞城宰錫なり、中都明府某なり、徐王延年なり。
その弟と稱するもの十七人、金城尉叔卿なり、臨洛令皓なり、舍人臺卿なり、南平太守之遙なり、宣
州長史昭なり、單父主簿凝なり、鄱陽司馬昌岷なり、深陽尉濟なり、京兆參軍令問なり、職位を言は
ざるもの、延陵なり、冽なり、幼成なり、況なり、襄なり、綰なり、錫なり、浮屠談皓なり。大抵皆
従兄弟なり。この詩に云ふところ、兄九江兮弟三峽、下文の愛子老妻と並び言ふ、その親兄弟を指し

て言ふに似たり。上に兄あり、下に弟あらば、太白は、乃ち其仲か。然れども、兄弟の名は、據るべきなし。しばらく之を表出し、以て淹博者の詳考を俟つ。云云。

荆州賊平臨洞庭言懷作

荆州の賊平らぎ、洞庭に臨んで懷を言うて作る

修蛇横洞庭。吞象臨江島。

修蛇、洞庭に横はり、象を吞んで江島に臨む。

積骨成巴陵。遺言聞楚老。

骨を積んで巴陵を成し、遺言、楚老に聞く。

水窮三苗國。地窄三湘道。

水は窮まる三苗の國、地は窄し三湘の道。

歲晏天崢嶸。時危人枯槁。

歲晏くして天崢嶸、時危くして人枯槁。

思歸阻喪亂。去國傷懷抱。

歸るを思うて、喪亂に阻まれ、國を去つて、懷抱を傷む。

郢路方丘墟。章華亦傾倒。

郢路、方に丘墟、章華、亦た傾倒。

風悲猿嘯苦。木落鴻飛早。

風悲んで猿嘯苦なり、木落ちて鴻飛ぶこと早し。

日隱西赤沙。月明東城草。

日は隱る西の赤沙、月は明かなり東の城草。

關河望已絕。氛霧行當掃。

關河、望、すでに絶え、氛霧、行くゆく當に掃ふべし。

長叫天可聞。吾將問蒼昊。

長叫、天、聞くべし、吾、將に蒼昊に問はむとす。

【字解】

【一】修蛇 淮南子に「堯、乃ち羿をして、修蛇を洞庭に斷たしむ」とあつて、高誘の註に「修蛇は大蛇、吞象は三年にしてその骨を出すの類」とある。

【二】巴陵 元和郡縣志に「むかし、羿、巴蛇を洞庭に屠る、その骨、陵の若し、故に巴陵といふ」とある。

【三】三苗 通典に「岳州は、古しへの蒼梧の野、亦た三苗國の地、青草洞庭湖あり、二湖相連り、青草は南に在り、洞庭は北に在り」とある。

【四】三湘 前に見ゆ。

【五】歲晏 晏は晩の義。

【六】崢嶸 鮑照の舞鶴賦に「崢嶸而愁暮」とあつて、李善註に「廣雅に曰く、崢嶸は高き貌、歲の將に盡きむとする、猶ほ物の高きがごときなり」とある。

【七】郢路 通典に「江陵郡は、今の荊州、春秋以來、楚國の都、これを郢都といふ」とある。

【八】丘墟 居人少きをいふ。

【九】章華 臺の名。

【一〇】赤沙 湖名、一統志に「赤沙湖は、洞庭湖西に在り、夏秋水泛、洞庭湖と一となり、潤るる時は赤沙を見る」とある。

【一一】城草 王琦の説に「青草の訛ならむといふ、青草も湖の名、一統志に「青草湖、一名巴邱湖、北、洞庭に連り、南、瀟湘に接し、東、汨羅の水を納る、夏秋水泛する毎に、洞庭と一となり、水潤るれば、この湖、先づ乾いて青草生ず」とある。

【一二】氛霧 澹冥の氣、こゝでは亂賊に喩ふ。

【一三】蒼昊 皆天の稱、春には蒼天となし、夏には昊天となす。

【題義】通鑑に「乾元二年八月、襄州の將康楚元、張嘉延、州に據つて亂を作し、刺史王政、荊州に奔る。楚元自ら南楚の霸王と稱す。九月、張嘉延、襲うて荊州を破り、荊州節度使杜鴻漸、城を棄てて走り、澧・朗・郢・峽・歸等の州の官吏、これを聞いて、争つて山谷に潛竄す。十一月、康楚元等、衆萬餘人に至る。商州刺史充荆襄等道租庸使韋倫、兵を發して之を討ち、鄧の境に駐まり、降者を招諭して、厚く之を撫し、その稍や怠るを伺ひ、軍を進めて之を撃ち、楚元を生擒し、その衆、遂に潰ゆ、その掠むるところの租庸凡そ二百萬緡を得たり、荆襄皆平らぐ」とある。この詩は、荊州に於ける康

楚元の亂、はじめて平定したる時、洞庭湖に臨み、その懷抱を述べて作つたのである。

【詩意】むかし、大蛇が洞庭湖に横はり、象を呑んだ儘、久しく江島に臨んで居たが、やがて、羿に殺されると、その骨は積んで巴陵と成つて、今でも残つて居るといふので、この傳説は、かつて楚地の老人から聞いたことがある。三苗の住んで居る國は、丁度、その間であつて、洞庭を左にし、彭蠡を右にして居る。そして、三湘の道の通ずるところは、地形も至つて窮屈である。今しも、歳暮れむとし、天色物さびしく、加ふるに、時危くして、人は生に聊んせざるに因つて、瘦せ衰へる。予は、此に羈游し、故郷に歸らうと思つても、喪亂に阻まれて、意の如くならず、國を去つて以來、時として懷抱を痛めぬことはない。古しへの郢都は、荒廢して邱墟となり、名だたる章華臺も、傾き倒れた儘、破壊して仕舞つた。頃しも、秋の末、西風悲しく吹いて、猿の嘯く聲も、苦しげに聞こえ、木の葉は、はらはらと落ちて、雁は、早くも北地から飛んで來る。夕日は、西の方、赤沙湖にかざろひ、月は、東の方、青草湖の上にさし上つた。關河は、望すでに絶えて、目力相及ばざれども、その中に搖曳する賊氛は、次第に掃ひ清めることが出來るであらう。もし我が叫ぶ聲を天が聞いて呉れるならば、吾は、今後この世は如何に成り行くかを仰いで蒼昊に問はうと思ふ。

【餘論】起首八句は、楚老の傳説に筆を起して、其地の窮陰に及び、思歸の八句は、洞庭に臨んで見たところの景物を寫し、關河望已絶の四句は、おのが感慨を述べたのである。乾隆御批には「幽鬱の裏、沈雄の氣、形を程し、音を賦すと云ふべし」とある。

覽鏡書懷

鏡を覽て懷を書す

得道無古今。失道還衰老。道を得れば古今なく、道を失うて還た衰老。

自笑鏡中人。白髮如霜草。自ら笑ふ鏡中の人、白髮、霜草の如し。

捫心空歎息。問影何枯槁。心を捫して空しく歎息し、影に問ふ、何ぞ枯槁。

桃李竟何言。終成南山皓。桃李、竟に何をか言ふ、終に南山の皓とならむ。

【字解】一 霜草 霜を帯びたる草、即ち秋草。二 捫心 胸を撫でる。三 桃李竟何言 史記に「桃李言はず、下自ら蹊を成す」とある。四 南山皓 前に見ゆ。

題義 説明に及ばぬ。

【詩意】宇宙の大道を體得すれば、古今の別もなく、長生不老であるが、一たび、道を失へば、又ぞろ衰老を免れない。鏡に對して、わが影の淋しきを笑ひつつ、よく見ると、頭上の白髮は、霜を帯びたる秋草かと疑はるるばかり。胸を撫でて、空しく嘆息し、如何なれば、かくは瘦せ衰へたかと、我が影に向つて問うた位。その下、自ら蹊を成すといふ桃李は、依然物言はず、この儘、隠れて住み、やがて、南山の四皓となる、これが我が刻下の希望である。

【餘論】起首二句は、格言めいて居て面白いが、得道無古今は、莊子から出たので、失道の一句は、新に添へたのである。中間四句は衰老の状、結句は感慨を逗露したのである。

田園言懷

田園にて懷を言ふ

賈誼三年謫。班超萬里侯。賈誼は三年謫せられ、班超は萬里に侯たり。

何如牽白犢。飲水對清流。何ぞ如かむ、白犢を牽き、水を飲まして、清流に對するに。

【字解】【一】賈誼。漢書に「長沙王の傅たること三年、鵬あり、飛んで誼の舎に入り、坐隅に止まる。誼、自ら傷悼し、以爲へらく、壽長きを得ずと、乃ち賦を爲つて自ら廣む」とある。【二】班超。後漢書に「相者指して曰く、生燕頰虎頭、飛んで肉を食ふ。これ萬里侯の相なり」とあり、後、果して定遠侯に封せられた。【三】牽白犢。巢父、許由の耳を洗ふを見、その名譽を求むるを責め、吾が牛の口を汚す勿れといひ、上流に往つて牛に水を飲ませた。その詳は、前に見ゆ。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】賈誼は、長沙に謫せらるること三年、鵬鳥の賦を作つて、自ら傷んだといふし、班超は、生來萬里侯の相ありと稱せられ、後、西域に之き、五十餘國を服屬して、定遠侯に封せられた。一は不得意、一は得意であるが、故郷を離れて、異邦に流寓したといふ點に於ては、同一である。それよりも、故郷に居て獨處し、牛を清流に飲ひ、浮世の事を全然忘れた方が、はるかに長閑である。

【餘論】王琦の解に「詩意謂ふ、仕官して志を得ざること賈誼一流の如き、志を得ること班超一流の如き、皆異方に羈旅す、巢許の隱居獨樂、歩を田園に安んずるの善たるに如かざるなり。その旨深し」とあつて、簡にして要を得て居る。

江南春懷

江南春懷

青春幾何時。黃鳥鳴不歇。青春幾ばく時ぞ、黃鳥鳴いて歇まず。

天涯失鄉路。江外老華髮。天涯、鄉路を失ひ、江外、華髮老ゆ。

心飛秦塞雲。影滯楚關月。心は飛ぶ秦塞の雲、影は滯す楚關の月。

身世殊爛熳。田園久蕪沒。身世、殊に爛熳、田園、久しく蕪沒。

歲晏何所從。長歌謝金闕。歲晏くして何の從ふところ、長歌して金闕に謝す。

【字解】【一】黃鳥。埤雅に「黃鳥、亦た黎黃と名づく、その色、黎黒にして黄なり、鳴けば蠶生す」とある。普通に鶯といつて居る。【二】華髮。白髮に同じ。【三】歲晏。前に見ゆ。【四】謝。去る。【五】金闕。金門に同じ。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】青春は幾何の時を經べきか、今しも、鶯は鳴いて歇まないが、やがて、花落ち水流れて、春

も盡きるであらう。身は、天涯に在つて、歸路を失ひ、江外に滯留して、早く白髪を生じた。心は、秦塞の雲を趁うて、北に向ひ、影は、楚關の月に滯して、なほ南に留まつて居る。わが身世は、盛りを過ぎて、追追下り阪となり、故郷の田園は、耕す人なくして、大方蕪没して居るであらう。やがて、歳暮るれば、何處に向ふべき、已むなくんば、長歌して、金闕を去り、仕官の事などは、ふつつりと斷念して、早く歸田したいと思ふのみである。

【餘論】通首、辭清く、意婉に、人をして悽然已まざらしめる。蕭士贊は「これ、太白、湘楚に流離するの詩か、食息にも君を忘れず、その志、亦た哀むべきのみ」といつてゐる。

詠物

詠物とは、全く客觀的に、或る物の特性を詠出するのであるが、ここのは廣い意味で、主觀約感想を述べたものをも含有して居る。

聽蜀僧濬彈琴

蜀僧濬の琴を彈するを聽く

蜀僧抱綠綺。西下峨眉峰。

蜀僧、綠綺を抱き、西、峨眉の峰を下る。

爲我一揮手。如聽萬壑松。

我が爲に一たび手を揮へば、萬壑の松を聽くが如し。

客心洗流水。餘響入霜鐘。

客心、流水に洗はれ、餘響、霜鐘に入る。

不覺碧山暮。秋雲暗幾重。

覺えず碧山の暮、秋雲暗きこと幾重。

【字解】【一】綠綺 司馬相如の琴の名、前に見ゆ。【二】峨眉峰 唐書地理志に「嘉州羅目縣 峨眉山あり」と見ゆ。【三】揮手 揮は動かす。【四】入霜鐘 山海經に「豐山に九鐘あり、これ霜を知つて鳴る」とあつて、郭璞の註に「霜降れば鐘鳴る、故に知る」といふなり」とある。

【題義】この詩は、蜀中の僧、名を濬といへるものが琴を彈するを聞いて作つたのである。

【詩意】蜀中の僧は、かの綠綺に比すべき名琴を抱き、西の方、峨眉の高峰から態態下つて來た。かくて、我が爲に、一たび手を動かして、琴を彈じ出せば、その音清越、萬壑の松聲を聞くが如くである。羈客の懶き心は、流水の如き妙なる調に洗ひ清められ、琴の餘韻は、霜夜の鐘に入るかと怪まれ、碧山すでに暮れ、秋雲が幾重か立て籠めたるをも忘れる位であつた。

【餘論】この詩は、一氣呵成に成り、中間四句、琴聲を寫し、碧山秋雲は、その餘波である。嚴滄浪は「一味の清響、眞に松風の如し」といひ、乾隆御批には「纍纍として貫珠の如く、泠泠として叩玉の如く、これを雅奏清音と爲す」とある。

魯東門觀刈蒲

魯東門に刈蒲を觀る

魯國寒事早。初霜刈渚蒲。

魯國、寒事早く、初霜、渚蒲を刈る。

詠物 聽蜀僧濬彈琴 魯東門觀刈蒲

揮鎌如轉月。拂水生連珠。
 此草最可珍。何必貴龍鬚。
 織作玉牀席。欣承清夜娛。
 羅衣能再拂。不畏素塵蕪。

鎌を揮へば、月を轉するが如く、水を拂へば、連珠を生ず。
 此草最も珍とすべし、何ぞ必ずしも龍鬚を貴ばむ。
 織つて玉牀の席となし、欣んで清夜の娛を承く。
 羅衣、能く再び拂はば、素塵の蕪するを畏れず。

【字解】(一)寒事 冬の支度。陸倕の詩に「江關寒事早、夜露傷秋草」とある。(二)渚浦 岸邊に生えた蒲、梁の簡文帝の詩に「渚浦變新節」とある。(三)揮鎌如轉月 方言に「刈鉤、關よりして西、或は之を鉤といひ、或は之を鎌といふ」とあり、顏師古の急就篇註に「鉤は即ち鎌なり、形曲つて鉤の如し、因つて以て名づくといふ」とある。(四)龍鬚 草の名、蜀本草に「龍鬚は叢生し、莖、縦の如し、所在之あり、俗に龍鬚草と名づく、以て席となすべし」とある。(五)羅衣 この二句は謝朓の詠席の詩に但願羅衣拂、無使素塵蕪とあるに本づく。

【題義】埤雅に「蒲は水草なり、莞に似て禰に、脊あり、水涯に生ず、柔滑にして温、以て席と爲すべし」とある。この詩は、魯の東門に蒲を刈るを觀て作つたのである。

【詩意】魯國は、北に寄つた地方であるから、冬の支度をする事も早く、初霜が降ると、すぐに渚邊の蒲を刈るといふ風である。その時、鎌を揮へば、月を轉するが如く、やがて水を拂ふと、飛沫は、連珠の如く見える。元來、蒲といふ草は、尤も珍とすべきもので、何も必ずしも龍鬚草を貴ぶにも及ばない。これを織つて、玉牀の上に敷く席となせば、清夜の歡娛を受けることが出来る。もし美人

の羅衣で再び拂つて呉れるならば、素塵に荒らされても、かまはない。

【餘論】起首四句は題の正面、此草最可珍の四句は、蒲草の功能を述べ、羅衣能再拂の二句は、謝朓の詩句を翻用して、餘情を含ましたので、即ち一步を拓開したのである。

詠鄰女東牕海石榴

鄰女東牕の海石榴を詠す

魯女東牕下。海榴世所希。
 珊瑚映綠水。未足比光輝。
 清香隨風發。落日好鳥歸。
 願爲東南枝。低舉拂羅衣。
 無由共攀折。引領望金扉。

魯女東牕の下、海榴、世の希なるところ。
 珊瑚、綠水に映じ、未だ光輝を比するに足らず。
 清香風に隨つて發し、落日、好鳥歸る。
 願はくは、東南の枝と爲り、低く舉がつて、羅衣を拂はむ。
 共に攀折するに由なく、領を引いて金扉を望む。

【字解】(一)珊瑚映綠水 潘岳の安石榴賦に似長離之棲鄧林、若珊瑚之映綠水とある。(二)清香隨風發 古詩に清商隨風發とあるを轉用す。(三)引領望金扉 王延壽の魯靈光殿賦に排金扉而北入とあつて、張銑の註に「扉は門扉なり」とある。

【題義】太平廣記に「新羅に海紅并に海石榴多し、唐の贊皇李德裕云ふ、花名中、海を帶ぶるものは、悉く海東より來る」とある。この詩は、鄰女の東窓に近く植ゑた石榴の花を詠じたのである。

【詩意】鄰家なる魯女の住む部屋の東窓の下に植ゑた石榴は、世にも稀なもので、珊瑚が珠を綴つて、

緑水に映するも、その花の光輝あるに比し難い程である。その清香は、風に随つて發し、夕陽の頃は、珍らしい小鳥が其花に宿せむが爲に歸つて來る。われ願はくは、その木の東南の枝となり、低く擧がつて、魯女が木の邊に來る時、徐に羅衣を拂ひたいものである。何は兎もあれ、鄰家ではあるものの、用心堅固にして、その木の枝を攀折することだに出來ず、唯だ首を延ばして、その女の住んで居る部屋の金色の門扉を望むのみである。

【餘論】前六句は題の正面、後四句は、花に因つて魯女その人を思ふ意を寓したので、その謔意を帯びたるは、題意の自ら然らしむるところである。

南軒松

南軒の松

南軒有孤松。柯葉自綿羃。

南軒に孤松あり、柯葉自ら綿羃。

清風無間時。瀟灑終日夕。

清風、間なる時なく、瀟灑、日夕を終る。

陰生古苔緑。色染秋煙碧。

陰は古苔の緑を生じ、色は秋煙の碧を染む。

何當凌雲霄。直上數千尺。

何か當に雲霄を凌ぎ、直に上ること數千尺なるべき。

【字解】一 柯葉 柯は枝幹。二 綿羃 枝葉稠密にして相覆ふの意。三 陰 松の木かげ。四 雲霄 大空。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】わが家の南軒に近く、一本の松があつて、その枝葉は稠密にして重り合ふ位。清風は、斷えず吹き入り、朝夕極めて瀟灑である。その木かげには、苔が段段古くなつて、緑濃かに、その葉の色は、秋煙を深碧に染むるばかり。愈よ生長して、直立數千尺に及べば、屹として、雲霄を凌ぐやうに成るであらう。

【餘論】中間四句は、聊か形容して、孤松の姿趣を畫き出し、何當凌雲霄の二句は、その長壽を祝したので、後人詠物の法門は、まさしく此に開かれた。

詠山樽 二首

山樽を詠す 二首

蟠木不彫飾。且將斤斧疎。

蟠木、彫飾せず、且つ斤斧と疎なり。

樽成山岳勢。材是棟梁餘。

樽は山岳の勢を成し、材は是れ棟梁の餘。

外與金罍竝。中涵玉醴虛。

外は金罍と竝び、中に玉醴を涵して虚し。

慙君垂拂拭。遂忝玳筵居。

慙づ君が拂拭を垂るるを、遂に忝うす玳筵の居。

【字解】一 蟠木 屈曲せる木。二 金罍 銅製の酒器、前に見ゆ。三 玉醴 張衡の思文賦に「青岑之玉醴」とあつて、

詠物 南軒松 詠山樽二首

呂向の註に「玉醴は玉泉なり」とあり、又嵇康の琴賦に玉醴湧其前とあつて、呂延濟の註に「玉醴は玉漿なり、味、酒の如し」とある。但し、此詩では、玉醴を以て直に酒としたのである。

【題義】山樽とは、山岳の形を成せる酒壺である。この一首は、一本には詠柳少府山瘿木樽と題してある。

【詩意】屈曲せる木は、彫飾もせず、その上、斧斤と疎濶にして、何の細工をも施すことが出来ない。唯だ自然に山岳の形を爲して、酒器に用ひられ、その材は、もと棟梁の用に供した跡の餘り物で、謂はば、廢物を利用した様なものである。そこで、外は金罍と竝んで陳せられ、中は空虛にして、酒を満たすことが出来る。もと木で造つた粗末なものであるが、随分磨いて艶を出し、一種の趣がある處から、玳瑁の盛宴にも罷り出ることが出来るので、予の不遇なる、斷じて、之に及ばざるを愧づるのみである。

【餘論】この詩は、題が題だけに、まことに詰まらぬもので、全然取るに足らぬ駄作である。

擁腫寒山木。嵌空成酒樽。擁腫、寒山の木、嵌空、酒樽を成す。

愧無江海量。偃蹇在君門。愧づ江海の量なきを、偃蹇、君が門に在り。

【字解】【一】擁腫 莊子「吾に大樹あり、人、これを樗といふ、その大本、擁腫して繩墨に中らず」とある、節くれ立つて居ること。

【二】嵌 開張の貌。

【詩意】寒山の木は、節くれ立つて、役に立たぬ様であるが、これを剜つて、酒樽に造り上げた。しかし、その容積狭小にして、たんとも這入らず、のさばつて君の門下に在るのは、まことに愧かし、次第である。

【餘論】前首と同斷で、愈よ下劣なるを覺える。

初出金門尋王侍御不遇詠壁上鸚鵡

初めて金門を出で、王侍御を尋ねたるも遇はず、壁上の鸚鵡を詠す

落羽辭金殿。孤鳴託繡衣。羽を落して金殿を辭し、孤鳴して繡衣に託す。

能言終見棄。還向隴西飛。能く言ふも終に棄てられ、還た隴西に向つて飛ぶ。

【字解】【一】繡衣 即ち繡衣御史のこと、前に見ゆ。ここでは王侍御を指す。【二】能言 張華の禽經註に「鸚鵡は、隴西に出づ、能言の鳥なり」とある。

【題義】この詩は、李白が翰林供奉を免せられ、はじめに金馬門を出た時、王侍御を尋ねたが、あいにく、不在で逢はず、仍つて壁上に畫いてある鸚鵡を詠じ、これに託して、自己の境涯を述べたのである。

【詩意】われは、今、鸚鵡が羽を打落したるが如く、金殿を辭し、仍つて、孤鳴して、兔に角、王侍御を尋ね、一身上の相談をしたいと思つて居た處が、御不在では、どうにも仕方がない。鸚鵡は能く物いへども、鳥を離れざるが故に、終に棄てられたので、われも、本来不才であつて、かうなるのも、決して怪むに及ばぬ。そこで、鸚鵡が隴西に向つて飛ぶが如く、われも、一先づ故郷へ歸りたいと思つて居る。

【餘論】全首が比であつて、楊齊賢は「太白、自ら況するなり」といつて居る。

紫藤樹

紫藤樹

紫藤掛雲木。花蔓宜陽春。

紫藤、雲木に掛り、花蔓、陽春に宜し。

密葉藏歌鳥。香風留美人。

密葉、歌鳥を藏し、香風、美人を留む。

【字解】(一)藏、かくす。(二)歌鳥、囀る鳥。

【題義】筆談に「黄環は、即ち今の朱藤なり。葉は槐の如く、その花穂懸し、紫色にして葛花の如し、菜食と作すべし、火も熟せず、亦た小毒あり。京師の人家園中、大架を作つて之を種る、これを紫藤花といふもの、是れなり。實は皂莢の如く、蜀都賦に謂はゆる青珠黄環なるもの、黄環

は、即ちこの藤の根、古今皆種るて、以て庭檻の飾となす」とある。これを見ると、我が邦で普通謂ふところの藤と同類の者に見える。この詩は、即ち紫藤を詠じたのである。

【詩意】紫藤は延びて、雲を衝く木に這ひかかり、花を著けた蔓は、陽春の候に於て最も宜しい。その茂れる葉の下には、囀る鳥を隠し、香ばしき風は、美人を勾留するばかりである。

【餘論】一應無難に言ひ終せてはあるが、後半は必ずしも紫藤に限つた譯でもなく、聊か切實を缺くやうである。

觀放白鷹 二首

白鷹を放つを觀る 二首

八月邊風高。胡鷹白錦毛。

八月、邊風高し、胡鷹、白錦毛。

孤飛一片雪。百里見秋毫。

孤飛す一片の雪、百里、秋毫を見る。

【字解】(一)邊風、邊地の風、即ち北風。(二)秋毫、極めて微細なるものに譬ふ。

【題義】この詩は、秋の末、狩を爲すに際し、白鷹を放つて作つたのである。

【詩意】八月秋の半に於て、邊地は北風高く吹きすさび、胡地に産する白鷹は、錦毛愈よ麗はしく、まことに俊姿颯爽といふべき程である。これを放てば、一片の雪が孤飛するが如く、そして、白鷹は、

眼界百里に互つて、秋毫の末までも見透し、決して獲物を逃がすまいといふ意氣込みである。
【餘論】前半は、白鷹その物を寫し、後半は、これを放つた時を寫し、全首を通じて、その姿態、さながら見るが如くである。

寒冬十二月。 寒冬十二月。

蒼鷹八九毛。 蒼鷹八九毛。

寄言燕雀莫相啁。 言を寄す、燕雀、相啁する莫れ。

自有雲霄萬里高。 自ら雲霄萬里の高きあり。

れ始めて獲たるの鷹、その勁翮を剪り、遠擧颺去せざらしむ」とある。【三】啁、衆口の貌、ここでは嘲誚の意。

【詩意】寒冬十二月の候、新に飼はれた蒼鷹は、八九毛を剪り去られ、追追人に狎れて來たので、やがて、狩に用ひられるであらう。されば、燕雀どもは、決して之を嘲誚せぬが善い。この鷹にして、一たび羽ばたきすれば、雲霄萬里の高きも、造作なく飛び上り、その間に居る鳥どもを盡く打ち落すに相違ない。

【餘論】後半二句は、大に蒼鷹の爲に氣を吐いたもので、作者の寓意もあるらしく思はれる。

觀博平王志安少府山水粉圖

博平の王志安少府の山水粉圖を觀る

粉壁爲空天。

粉壁を空天と爲し、

丹青狀江海。

丹青、江海を狀す。

遊雲不知歸。

遊雲、歸るを知らず、

日見白鷗在。

日に白鷗の在るを見る。

博平真人王志安。

博平の真人王志安、

沈吟至此願掛冠。

沈吟、此に至つて冠を掛けむことを願ふ。

松溪石磴帶秋色。

松溪石磴、秋色を帶び、

愁客思歸坐曉寒。

愁客歸るを思つて曉寒に坐す。

【字解】一 掛冠 南史に「蕭 脈素、諸壁の令となり、縣に到る十 餘日、衣冠を縣門に掛けて去る」と あつて、釋常談に「休官、これを挂冠 といふ」とある、又西漢の馮萌は、 王莽の篡逆を見て「去らずんば、禍 將に身に及ばむとす」といひ、遂に 冠を解き、城の東門に掛けて去つた といふ事實もある。二 石磴 韻 會に「磴は登陟の道」とある。普通 には、石段の類をいふ。

【題義】唐の河北道博州博平郡に博平縣がある。この詩は、博平縣尉王志安の家なる壁畫の山水を觀たるに因つて作つたのである。

【詩意】白い壁は、さながら天空の如く、そして、丹青の彩は、江海に象つたのである。その圖中には、遊雲一片、長しへに浮んで居て、決して歸ることなく、いつ見ても、白鷗は同じ處に居るので、それ

は、無論、畫だからである。博平の真人たる王志安は、此畫を見ると、やがて、冠を掛けて官を休めたいと思つて居る。げにや、圖中の松溪石磴は、秋色を帯びて、その佳景、得も云はれず、そこで、王志安は、かういふ處へ是非往きたいと念じつつ、曉寒の中に坐し、依然として、これに看惚れて居る。

【餘論】前半四句は、山水粉圖を寫したので、遊雲不知歸の二句は、全く其畫たることを表示して居る。後半四句は、王少府の心中を忖度し、反照的に畫の妙を寫したのである。

題雍丘崔明府丹竈

雍丘の崔明府の丹竈に題す

美人爲政本忘機。美人、政を爲して、本と機を忘る、服藥求仙事不違。藥を服し、仙を求めて、事、違はず。葉縣已泥丹竈畢。葉縣、すでに丹竈を泥して畢り、瀛洲當伴赤松歸。瀛洲、當に赤松を伴うて歸るべし。先師有訣神將助。先師、訣あり、神、將に助けむとす、大聖無心火自飛。大聖、心なく、火、自ら飛ぶ。九轉但能生羽翼。九轉但だ能く羽翼を生ずれば、

【字解】(一)美人 明府を指す。(二)爲政 論語に見えた字面。(三)瀛洲 海中の仙山、前に見ゆ。(四)赤松子 古しへの仙人、亦た前に見ゆ。(五)訣 秘訣に同じ。(六)神將助 抱朴子に「古しへの道士、神藥を合作する、必ず名山に入り、山神必ず之を助けて、福を爲し、藥、必ず成る」とある。(七)九轉 同じく抱朴子に「一轉の丹、これを服

雙鳧忽去定何依

雙鳧忽ち去つて、定めて何くにか依らむ。

すること三年にして仙を得、二轉の

丹、これを服すること二年にして仙を得、三轉の丹、これを服すること一年にして仙を得、四轉の丹、これを服すること半年にして仙を得、五轉の丹、これを服すること百日にして仙を得、六轉の丹、これを服すること四十日にして仙を得、七轉の丹、これを服すること二十日にして仙を得、八轉の丹、これを服すること十日にして仙を得、九轉の丹、これを服すること三日にして仙を得」とある。

【八】生羽翼 魏の文帝の詩に服藥四五日、身輕生三羽翼とある。【九】雙鳧 風俗通に「俗説、孝明帝の時、尙書郎河東の王喬、還つて葉令となる。喬、神術あり、毎月朔、かつて臺朝に至る、帝、その來る屢ばにして車騎なきを怪み、密に太史をして候望せしむ。言ふ、その至る時に臨み、常に雙鳧あり、南より飛び來る。因つて、伏して鳧を伺ひ見、羅を擧ぐるに、但だ一雙の鳧を得たるのみ、尙方をして讖視せしむるに、四年中、賜ふところの尙書官屬の履なり」とある。

【題義】唐の河南道汴州陳留郡に雍邱縣がある。この詩は、雍邱令崔某が仙丹を鍊る竈に題したのである。

【詩意】わが友なる崔明府は、政を爲して、其地方を治めて居るが、その煩劇に拘はらず。世俗の機を忘れて、超然脱出し、藥を服して仙を求めむとし、しかも著著その效を奏して、豫期に違はない。明府は、葉縣に於て、すでに丹竈を準備し、それに封印を付けて仕舞ひ、丹成つて、愈よ仙を得たならば、瀛洲に向つて、かの赤松子と一緒に出かけらるであらう。この道の先師達の秘訣として、名山に入つて、藥を鍊るときには、必ず神が之を助けるといふし、大聖の域に到達したものは、もとより無心であつて、灰の自ら飛ぶに任かせ、やがて、仙丹が出来上るのである。かくて、九轉の丹を服

すれば、羽翼を生ずることも出来、むかしの王喬の如く、雙鳧と共に往來し、倏忽變化、何に依ることもなく、飛行自在になるであらう。

【餘論】これは、純然たる七律で、李白の集中に於ては、稀に見るところである。但し、構想と措辭と、兩つながら、平正で、少しも奇警雋異の處が認められない。

觀元丹丘坐巫山屏風

元丹丘の巫山屏風に坐するを觀る

昔遊三峽見巫山。むかし、三峽に遊んで巫山を見る、

見畫巫山宛相似。巫山を畫くを見る、宛として相似たり。

疑是天邊十二峰。疑ふらくは是れ天邊の十二峰、

飛入君家綵屏裏。飛んで入る、君が家の綵屏の裏、

寒松蕭颯如有聲。寒松蕭颯、聲あるが如く、

陽臺微茫如有情。陽臺微茫、情あるが如し。

錦衾瑤席何寂寂。錦衾瑤席、何ぞ寂寂たる、

楚王神女徒盈盈。楚王神女、徒に盈盈。

【字解】三峽 前に屢ば見ゆ。三 巫山 巫峽に在つて、そこに望霞・翠屏・朝雲・松巒・集仙・衆鶴・浮壇・上昇・起雲・栖鳳・登龍・聖泉の十二峰がある。陽臺 宋玉の高唐賦の序に「むかし、先王（懷王）かつて高唐に遊び、怠つて晝寢ぬ。夢に一婦人を見る。曰く、妾は巫山の女なり、高唐の客となる、君が高唐に遊ぶと聞き、願はくは、枕席を薦めむと。王、因つて之を幸す。去つて辭して曰く、妾は巫山の陽、高

高咫尺如千里。高さ咫尺、千里の如く、

翠屏丹崖粲如綺。翠屏丹崖、粲として綺の如し。

蒼蒼遠樹圍荆門。蒼蒼遠樹、荆門を圍み、

歷歷行舟泛巴水。歷歷行舟、巴水に泛ぶ。

水石潺湲萬壑分。水石潺湲、萬壑分れ、

煙光草色俱氤氣。煙光草色、俱に氤氣。

溪花笑日何年發。溪花日に笑うて、何の年か發する。

江客聽猿幾歲聞。江客猿を聽いて、幾歲か聞く。

使人對此心緬邈。人をして、此に對して心緬邈たらしむ、

疑入嵩丘夢綵雲。疑ふらくは嵩丘に入り、綵雲を夢むる。一か。

嵩山、五岳の一、太室・少室等の諸山を總稱し、河南府に在る。【一〇】綵雲 五色の雲。

【題義】元丹丘は、前に數ば見えた通り、李白の親友である。この詩は、元丹丘が巫山の風景を畫いた屏風に坐せるを觀て、作つたので、巫山は、字解の條に於て解説して置いた。

邱の岨に在り、且に朝雲となり、暮に行雨となり、朝朝暮暮、陽臺の下」とある。【四】楚王神女 宋玉の神女賦の序に「楚の襄王、宋玉と雲夢の浦に遊び、玉をして、高唐の事を賦せしむ。その夜、王寢れ、夢に神女に遇ふ、その狀、甚だ麗」とある。【五】荆門 山の名、荊州記に「郡西、江を浜ること六十里、南岸に山あり、荆門と名づく、北岸に山あり、虎牙と名づく、二山相對し、上は合し、下は開き、その狀、門に似たり」とある。【六】巴水 江の上流、巴郡に在る部分をいふ。【七】氤氣 祥氣、匂やかなる氣。【八】緬邈 長遠の貌。【九】嵩丘 即ち

【詩意】われ、さきに、三峡に遊んで、巫山を見たが、今巫山の畫を見れば、如何にも、よく似て居るので、かの天邊の十二峰が、その儘飛んで来て、君の家の彩屏の裏に入つたかと思ふばかりである。さて畫中見るところは、寒松は蕭瑟として、颯颯の聲あるが如く、陽臺は微茫として、愈よ情あるが如く、錦の衾、瑤の牀、かの襄王の夢の名残は、もとより、其跡なく、唯だ盈盈たる神女の姿を思ふばかり。畫中の山は、一尺に満たずして千里の遠きに在るが如く、翠屏丹崖は、粲然として、綺繡に類似し、加ふるに、遠樹は蒼蒼として、荆門の山を圍み、行舟は歴歴として、巴水の流に泛んで居る。到る處、水は潺湲として石に激し、萬壑勢分れ、煙の光、草の色、ともに匂やかである。おもへば、日に笑ふ溪花は、さながら、昔見た儘であるが、江閣の上に、猿の聲を聞いたのは、すでに幾年になるか。今、この圖に對すれば、心神遠く馳せ、かの嵩山に分け入つて仙となり、五色の彩雲の中に臥して居る様な心持がした。

【餘論】起首四句は、巫山屏風の縁起と見るべく、寒松蕭颯如く有聲より歴歴行舟泛巴水に至るまでは、純然たる畫中の景物を細敘し、水石潺湲萬壑分以下は、畫を結びつつ、感愴に入つたのである。嚴滄浪は「烘染を欠く」といつて居るが、全篇飄逸絶羣、自らは是れ謫仙の口吻で、乾隆御批には「題畫の詩、杜は多く沈著、李は自ら飄逸」とある。

求崔山人百丈崖瀑布圖

崔山人に百丈崖瀑布の圖を求む

百丈素崖裂。四山丹壁開。
龍潭中噴射。晝夜生風雷。
但見瀑泉落。如濼雲漢來。
聞君寫眞圖。島嶼備縈廻。
石黛刷幽草。曾青澤古苔。
幽絨儻相傳。何必向天台。

百丈、素崖裂け、四山、丹壁開く。
龍潭、中に噴射し、晝夜、風雷を生ず。
但だ見る瀑泉の落つるを、濼の雲漢より來るが如し。
聞く君が眞圖を寫し、島嶼備に縈廻すと。
石黛、幽草を刷し、曾青、古苔に澤す。
幽絨もし相傳ふれば、何ぞ必ずしも天台に向はむ。

【字解】一、瀑泉、瀑は飛泉懸水。二、濼、水會。三、石黛、徐陵の玉臺新詠序に、南都石黛、最發雙蛾とあつて、韻會に「黛、説文に眉を畫く墨なり、本と騰に作り、今黛に作る」とある。四、曾青、荀子の王制篇に「南海には羽翻・商革・曾青・丹干あり」とあつて、楊倞の註に「曾は青銅の精、繪畫すべく、及び黄金に化するものあり、蜀山賊崖に出づ」とあり、又正論篇に「之に加ふるに丹研を以てし、之に重ぬるに曾青を以てす」とあつて、楊倞註に「曾青は銅の精、形、珠の如きもの、その色、極めて青し、故に之を曾青といふ」とある。して見れば、曾青は銅から造つた青色の繪具である。五、幽絨、謝惠連の詩に盈筐自予手、幽絨候三君開とあつて、李延濟の註に「幽は密、絨は封なり」とある。

【題義】天台山志に「百丈巖は、天台縣の西北二十五里、崇道觀の西北に在り、瓊臺と相望み、峭險束隘、四山牆立し、下を龍湫となす。翠蔓蒙絡、水流の聲、濼然たり。盤澗、麓を繞り、入つて靈溪

となる。高きより下を見れば、「悽神寒骨」とある。この詩は、「崔山人に向つて、百丈崖の瀑布を畫いて呉れるといつて注文した詩である。」

【詩意】百丈の白い懸崖は、中央より裂け、四山の赤い絶壁は、兩側に開け、龍湫の水は、潭間より噴射するが如く、晝夜の別なく、風雷を生ずるを疑ふばかり。仰ぎ見れば、一道の瀑布は、半天より落ち來り、たとへば、大水が銀河から注ぎ來つた様である。聞けば、君は、風景の寫生が上手で、島嶼の入れ交つて縈廻する様な込み入つた景色でも、造作なく畫くといふが、願はくは、眉墨の色で幽草を刷し、曾青の青い繪具で古苔をぼかし、造化の密封せる、この神祕境を寫し出して、予に贈つて呉れる。さうすれば、何も必ずしも、天台山に向ふに及ばないので、何分宜しく、御願ひ申します。

【餘論】前半六句は、龍湫附近の景勝より、百丈崖の瀑布に至るまでを一氣に寫し出し、後半は、山人の畫才より、今次晝を依頼する旨を述べたので、その中、石黛刷幽草の二句は、警聯と稱すべきものである。

見野草中有名白頭翁者

野草中に白頭翁と名くる者あるを見る

醉入田家去。行歌荒野中。

醉うて田家に入つて去り、行歌す荒野の中。

如何青草裏。亦有白頭翁。

如何か青草の裏、亦た白頭翁ある。

折取對明鏡。宛將衰鬢同。

折り取つて明鏡に對すれば、宛として衰鬢と同じ。

微芳似相誚。留恨向東風。

微芳、相誚るに似たり、恨を留めて東風に向ふ。

【字解】

【一】行歌 行くゆく歌ふ。

【二】微芳 微細なる花。

【題義】名醫別錄に「白頭翁は、處處に之あり、根に近き處に白茸あり。狀、白頭老翁に似たり。故に以て名と爲す」とあり、本草に「白頭翁、一名野犬、一名胡王使者、一名奈何草、高山の谷及び野田に生ず」とあり、唐本草に「白頭翁は、その葉、芍薬に似て大、一莖を抜き、莖頭一花紫色、木槿の花に似たり、實大なるものは雞子の如く、白毛寸餘、皆披下して麤頭の如し、正に白頭老翁に似たり、故に名づく」とある。それから、和漢三才圖會を見ると、白頭翁、ははづさう、おきなぐさ、一云奈加久佐とあり。按ずるに、白頭翁、今は識る者なし、別に翁草あり、これと同じからず」とある。して見ると、翁草といふ和名もあるのだが、別に又翁草といふ濕草もあつて、それと混同してならぬといふ意味らしい。何にしろ、その草は、根に近い處に白い毛が披いて下つて居るといふのが特色である。この詩は、李白が或時郊原を散步すると、野草の中に白頭翁と名づくるものがあつた故に、その名に感じて作つたのである。

【詩意】

醉うて田家に入らむとし、行歌しつつ、荒野の中を行くと、青草の内に、白頭翁といふのが